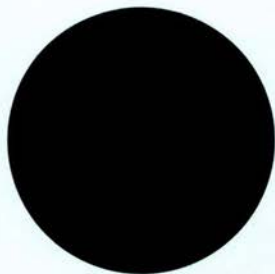


日本への回帰

第15集



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会
編

日本への回帰 (第十五集)

—第二十四回学生青年合宿教室(霧島)の記録より—

は し が き

かねてから国後、択捉両島の軍事基地化を急いでゐたソビエトは、根室の鼻先にある色丹島にまで兵力を進出させて来た。北方領土全体の兵力は師団規模にふくれ上り、戦車、火炮、攻撃用ヘリコプターの配備などによって、今や北方ソビエト軍は、島嶼防衛的性格のものではなく、明らかに強襲上陸能力を備へた攻撃的性格のものに変わつてゐる。最新鋭空母ミンスクの極東への回航、第二次戦略兵器制限条約からはづされた、高性能中距離爆撃機バックファイアーの極東配備など、極東全域における軍事的主導権を握らうとするソビエトの異常な執念には驚かざるを得ない。ツアー時代以来、少しも変らぬ膨脹主義は、ロシヤ人の深部にくひ込んだ本能なのであらうか。「有事」は今や目睫に迫つて来たといふ感じである。

昨年六月に東京で開かれた第五回主要先進国首脳会議（東京サミット）で論議の中心になつたのはエネルギー問題であつた。原油のほとんど百パーセントを中近東の産油国に依拠してゐる日本は、今更のやうに、その高度の生活水準を支へてゐる基盤の脆弱さを思ひ知らされた。今や、印度支那半島の大部分は、タイを除いてソビエトの影響下に入つてしまつた。マラッカ海峡から東支那海を抜けて来る海域でタンカーを抑へてしまへば、日本の国民生活は数ヶ月で崩壊する。そ

のやうなことは万々ないといふ前提の上に、泰平の眠りを貪つてゐるのが日本の現状ではないだらうか。先進工業国の機能は、その活殺の権を中近東諸国に握られてゐるといつても、決して過言ではないであらう。

イラン王制が倒れて、パーレビ国王が出国して十ヶ月、昨年十一月四日、イラン学生はテヘランの米大使館を占拠し、大使館員を人質にした。一部の人質は解放されたけれども、拘禁状態は今も続いてゐる。戦時でも尊重されるべき外交官特権が、公然とふみにじられ、しかも国家権力がそれを支持してゐるといふのは前代未聞のことである。これに対して、アメリカは経済制裁以外に打つ手が無い。その国家的威信は地に堕ちた感じである。イランに隣接するアフガニスタンでは年も押し迫つた十二月二十七日、クーデターが勃発、アミン革命評議会議長は処刑された。ソビエトは「友好善隣協力条約」を逆手に取つて、直ちに軍事介入を開始した。アフガニスタンに投入されたソビエトの兵力は五箇師団、八万から十万と推定されてゐる。ソビエト側はカルマル新政権の派兵要請によると説明してゐるが、もとより詭弁に過ぎない。アメリカは穀物輸出の削減をふくむ制裁措置に乗り出し、国連安保理の撤兵決議を取りつけようとしてゐるが、ソビエトの拒否権の壁にはばまれて動きがとれない。こゝでもソビエトは世界戦略において、着々と先手を打つてゐる。産油国支配の野望は今や歴然として来た。

かういふ世界的緊張の中で、国内では政治家や官僚の汚職事件が相ついだ。彼らの公私混淆と

金銭感覚の痲痺は、国家秩序そのものの崩壊といふ不吉な予感さへ感じさせる。統一地方選挙での保守回帰への流れをつかみ切れず、十月七日の総選挙において、自民党は敗北した。それに続く、首相指名をめぐる一月にわたる権力闘争は、自民党の統治能力の限界を国民の眼前にさらけ出した。受け皿としての社公民連合政権が具体的構想として打ち出されて来た今日、自民党は憲法問題をふくめて立党の原点に立ち帰らなければ、その自壊作用の速度が早められるだけであらう。

ある新聞社が、昨年十二月に行った現状の若者の意識調査の一項目に防衛意識の集計が上げられてゐた。もし外敵が侵入して来たらどうするかといふ設問に、「戦う」と答へたものは三四パーセント、「逃げる」「降服する」「その時でない」と分らない」と答へたものが、実に六六パーセントを占めてゐる。

この怖るべき主体欠落状況への対処は、一刻の遲滞も許されない。われわれは日本青年の心に、国への熱き思ひの蘇へる日を念じてこの記録を編んだ。

終りに講義要旨の掲載を許して頂き、御心のこもる御加筆をいたゞいた木内・高山両先生に深く感謝の意を表して、序にかへる次第である。

昭和五十五年二月

大学教官有志協議会

国民文化研究会

目次

はしがき	1
一、日本民族の情意	
明治の精神——現代精神蘇生のために——	
福岡教育大学教授 山田輝彦	5
『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』講読——輪読のはじめに——	
亜細亜大学教授・教養部長 夜久正雄	29
短歌創作について	
戸田建設欄 技師 青山直幸	53
やむを得ざるの誠——吉田松陰を中心に——	
福岡県立修猷館高校教諭 小柳陽太郎	77
『畏敬のこころ』を身につけずんば日本国民にあらず	
国民文化研究会理事長 小田村寅二郎	99
一、講義	
これからの世界のなかの日本	
——近刊『新しい健康な経済学』に触れながら——	
世界経済調査会理事長 木内信胤	123

精神文化と科学的機械文明と

——従来のイデオロギーでは今日の難問は解けなくなった——

文学博士・元京都大学教授 高山岩男……………157

一、青年研究発表

混乱した教育現場に身を投じて感じたこと……

福岡県立若松高校教諭 坂口秀俊……………191

いのちを見つめて……………福岡県宗像郡玄海小学校教諭 前園由美子……………201

動乱の生……………日本ユニバック㈱勤務 大町憲朗……………211

一年の歩み——阿蘇合宿から霧島合宿まで——

九州大学法学部四年 加藤多夏詩……………219

合宿教室のあらまし……………九州大学経済学部四年 奈良崎修二……………237

合宿詠草……………269

あとがき……………289

△国民文化研究会図書目録▽

■ 日本民族の情意

明治の精神

—現代精神蘇生のために—

福岡教育大学教授

山田輝彦



福岡北郊・東郷公園を望む

は じ め に

ナシヨナリズムと競争原理

日 露 戦 争 ま で

明 治 の 終 焉

はじめに

私が担当いたします導入講義の演題は『明治の精神』、副題を「現代精神の蘇生のために」といたしました。九年前の十一月二十五日に自刃された三島由紀夫氏は、現代は心の死にやすい時代だと遺稿の中で述べてをられました。さういふ現代の状況の中で、われわれの祖先はいかにして国家を作り、いかにしてそれを育てて行ったかをもう一度ふりかへることによって、現代の思想的低迷、梗塞状態を突破するエネルギーが出てくるのではないかと考へてかういふ題を選んだわけです。八月といふ月は、私どものやうな戦中派の者にとっては、大変重い課題をつきつけられる忘れがたい月なのです。戦争で亡くなった友達、敗戦の責任を負って自決した友達、あるいは戦後の混乱期の中で、思想的な悩みを苦しみぬいて病没した友達、それらの人々のことが昨日のやうになまなましく浮んでまゐります。私どもの年代の者は、私どもの乏しい力を、それらの無量の思ひを抱いて死んで行った人の鎮魂のために少しでも役立てたいと思ひつゝ生きて来ました。さうして三十四年の歳月が流れました。

この三十四年の戦後思想史は、大体三つに区分できると思ひます。まづ第一期は終戦直後から三十五年の安保闘争の頃までです。この時代はひと口に申しますと「イデオロギー神話の時代」

といへると思ひます。共産主義が新しい日本を作る思想的原理であるといふことが、多くの学者や青年諸君に一種の信仰をもって受け取られてゐた時代です。若い方々には想像もつかないでせうが、自由主義国家は戦争勢力、社会主義国家は平和勢力といふ言葉が何の疑ひもなくまかり通つてゐました。さういふ時代は「安保の挫折」によつて終焉を告げました。第二期はそれから昭和四十五年までの十年間です。この時代は「イデオロギー相対化の時代」といへませう。かつてのやうな魔力をもつて、共産主義思想が思想界を牛耳るといふ時代ではなくなりました。この時期は、いはゆる高度成長の時代で、日本人はこの十年間で非常に豊かな物質生活を享受できるやうになりました。共産主義の目標の一つは、豊かな富の獲得といふことです。から、資本主義体制はその体制のまゝで共産主義の目標を達成してしまひ、イデオロギーは現実的な目標をなくしてしまつたわけです。そこで、教条的なマルクス主義に対する反撥が起つて来ます。その具体的な表はれが、四十年代初頭の大学紛争です。全共闘の思想は教条的な左翼に対する最も激烈な反抗であつたのですが、四十四年一月の安田講堂の攻防戦で崩壊してしまひます。そして、四十五年十一月二十五日、三島由紀夫氏の自刃といふ衝撃的な事件が起ります。これは思想史的に非常に重要な事件で、三島さんは平和と民主主義といふスローガンのもとに展開されて来た戦後思想といふものが、重大な虚偽の上に立つてゐることを、天才特有の鋭い感性でキャッチし、戦後思想そのものと刺しちがへて死んだのです。そして、四十五年以



降現在まで約十年、この時代は「イデオロギー破産の時代」と言へると思ひます。社会主義国家は相互に戦争をしないなどといふ理論がナンセンスであることがはつきり分つて来ました。統一ベトナムは、東南アジア最大の軍事国家となり、その専制政治は「海上のアウツシュヴィッツ」といはれるやうな何十万といふ難民を作り出してゐます。かつて「ベトナムに平和を」と叫んでゐた人たちは、どういふ言論の責任のとり方をするのか、口をぬぐつて何も言はないではありませんか。中国のベトナム侵入、ベトナムのカンボジア侵入、この悲惨な現実を社会主義理論で説明はできない。さういふ国際的な危機状況の中で、日本の状況を一口で言ふならば、日常生活への埋没といふことになるでせう。人は私的な次元でしかものを考へることができなくなり、どこにも精神のドラマがなくなつてゐます。危機に対する無痛感といつてよいでせう。

今、私は戦後の三十四年間に三つの時代に区分しましたが、この三つを貫いてゐるものは、国家への徹底的軽蔑ないし憎悪であったといへると思ひます。多田道太郎氏によると、形といふ言葉は「カタ」と「チ」に分けられる。「カタ」は型であり、規範であり、タイプでもあります。「チ」は古代語での語源ははっきりしないが、おそらく生命のもつてゐる最も根源的なエネルギーを意味するものと思はれます。つまり、形といふものが生きてゐるためには、その型を支へてゐる生命的なエネルギーが必要である。たしかに戦前までは生活様式なり人間の考へ方なりに型があつて、それを生命のエネルギーが支へてゐた。ところが、「カタ」と「チ」の間の亀裂がだんだん深くなり、戦後といふ時代は、型がとめどもなく崩れて行つて、根源的な野蛮な生命力だけが横行してゐる時代だといふのです。

さういふ点から申しますと、明治といふ時代はやはり一つの形を持つてゐた時代である。国といふものが形骸化された単なる機構ではなく、国民の深いエネルギーによって、それが支へられてゐた時代だったといへるでせう。

ところが、戦後の歴史教育では、「暗い明治」といふイメージが定着してしまひました。そのイメージをある程度修正したのが司馬遼太郎の『坂の上の雲』ですが、そのあとがきで司馬さんはかう書いてゐます。

〆維新後、日露戦争までという三十余年は、文化史的にも精神史のうえからでも、ながい日

本歴史のなかでじつに特異である。これほど楽天的な時代はない。むしろ、見方によってはそうではない。庶民は重税にあえぎ、国権はあくまで重く、民権はあくまで軽く、足尾の鉋毒事件があり女工哀史があり小作争議がありで、そのような被害意識のなかからみればこれほど暗い時代はないであろう。しかし、被害者意識でのみみることが庶民の歴史ではない。(中略) 不馴れながら「国民」になった日本人たちは、日本史上の最初の体験者としてその新鮮さに昂揚した。このいたいたしいばかりの昂揚がわからなければ、この段階の歴史はわからない。▽

安政五年(一八五八)に結ばれた不平等条約が、完全平等の条約になるのは日露戦争後の明治四十四年(一九一三)なのです。明治といふ時代は日本が一人前の独立国家になるための苦闘の時代だったといへるのではないでせうか。

ナシヨナリズムと競争原理

福沢諭吉には『文明論之概略』といふ名著があります。諭吉は戦争中は非国民のやうに言はれましたし、戦後は逆に進歩的な民権論者として、あらゆる人がこぞってとり上げました。しかし、彼の偉大なところは、国権と民権を車の両輪のやうに不可分のものと考へてゐる点にあ

ります。「独立の心なきものは、国を思ふこと深切ならず」とは彼の名言です。国家のことを深く切実に思ふことができないやうな人間は、自立した一個の人間に値しないといふ意味です。彼はかういつてゐます。

「余輩に於て独立を以て目的に定むと雖ども、世人をして悉皆政談家と爲し、朝夕之に従事せしめんことを願ふに非ず。人各々勤る所を異にせり。亦これを異にせざる可らず。或は高尚なる学に志して、談天彫龍に耽り、随つて進み、之を棄て食を忘るゝ者もあらん。或は活潑なる營業に従事して、日夜寸暇を得ず、東走西馳家事を忘るゝ者もあらん。之を咎むる可らざるのみならず、文明中の一大事業として之を称譽せざる可らず。」

「談天彫龍」とは高尚な真理を追究するといふことでせう。学者が真理の追究に寢食を忘れ、商人が家事を忘れて金まうけに熱中する、さういふ「私」の利益の追究は決して悪いことではなく、文明人として称讃に値することだといふのです。しかし、重要なのは次の言及です。

「唯願ふ所は其食を忘れ家事を忘るゝの際にも、国の独立如何に係る所の事に逢へば忽ち之に感動して、恰も蜂尾の刺したに触るゝが如く、心身共に穎敏ならんことを欲するのみ。」

「穎敏」の「穎」は稲の穂のことで、鋭いといふ意味です。平和な時はいくら個人的な楽しみに耽つてもいいし、個人的な利益を追究してもよいが、国家の一大事の時には、蜂の尻尾の針にふれるやうに鋭敏であれと言つてゐるのです。

島根県の沖に竹島といふ小さな島があります。今度の新指導要領による改訂の日本地図ではじめて島根県の所属であることを明記しましたが、あそこには韓国の軍隊が駐留してトーチカを作っている。尖閣列島の帰属問題は、現在の人間は愚かだから、賢明なる次の世代にその選択を委せようと鄧小平が言って、その領有権を棚上げにされたのに、非難の声を上げる国民はほとんどゐない。国後、択捉にソビエトが軍事基地を作り、飛行場を作っている。あの飛行場の空中写真を見て、血のたぎらないやうな人間が日本人といへるだろうか。それほど日本人は「心身に穎敏」な状態から遠いところまで来てしまったのです。

皆さんは「螢の光」の三番と四番をご存知ですか。歌詞は次の通りです。

つくしのきはみみちのおく

うみやまとほくへだつとも

そのまごころはへだてなく

ひとつにつくせくにのため

「つくしのきはみ」とは九州の南の涯、「みちのおく」とは東北の果、青森あたりを指すので

千島のおくも沖繩も

やしまのうちの守りなり

いたらんくににさをしく

つとめよわが背つつがなく

「千島のおく」とは北千島のことです。この小学唱歌の歌詞が作られたのは、明治十四年、西南戦争から四年しか経ってゐません。まだ国家が幼い時代ですが、その時代でさへ北千島は敵として日本の領土であつたのです。千島と沖繩が日本防衛の最前線であつた。その至りついた北の果、南の果で、「いさをしく」——雄々しく祖国防護の任につとめて下さい「わが背」——わが夫よといふ意味なのです。これは兵士たちの妻が、夫を偲んで詠んだ形になつてゐます。小学校の生徒にかういふ歌詞が分るはずはないでせう。しかし、かういふ歌詞を作つて、それを小学生に歌はせざるを得なかつた、その新興国家の独立を守らうとした祖先の心を、もう一度ふり返つてほしいと思ふのです。かういふ歌を作つた人たちの子孫であるわれわれが、領土についての危機意識を全く持たなくなつたのは、敗戦の傷の深さを語つて余りがあります。日本の教育は徹底して国を守ることの意味を教へなくなつてしまつたのです。

もう一つ現在の教育に欠けてゐる重大な問題があります。それはあの有名なクラーク博士の言葉に関連する問題です。マサチューセッツ州立農科大学の学長であつたクラークが札幌農学校の教頭として赴任したのは明治九年六月でした。明治十年四月十六日には離任してゐますので、在任は九ヶ月といふ短い期間でした。当時札幌農学校の生徒は二十人そこそこで、氣候の寒い所なので飲酒の悪弊が絶えなかつた。クラークは酒好きで、アメリカから一年ぶんの酒を持って来てゐたのですが、その酒のびんを学生の前で全部割つて、学生たちに禁酒の誓をさせたいはれてゐます。当時は北海道開拓庁の管轄下にあつたので、札幌農学校には非常に煩雑な規則がありました。クラークはさういふ規則は一切不必要である。「ビ・ゼントルマン」(紳士たれ)で充分だといつて、一切の規則を撤廃させたともいはれてゐます。そのクラークの別れに臨んだ最後の言葉が「ボーイズ・ビ・アンビシャス」だったので。稲富栄次郎氏の『明治初期教育思想の研究』によれば、その言葉は次の通りです。

△青年よ大志をもて。それは金銭や我欲のためにはなく、また人呼んで名声といふ空しいものためであつてもならない。人間として当然そなへてゐなければならぬあらゆることを成しとげるために大志をもて。▽

いま、「ボーイズ・ビ・アンビシャス」といふと、それは立身出世主義である。立身出世主義が学歴社会を生み、受験態勢を作り、青年たちを頹廢させてゐるといふ論理がまかり通ります。

しかし、クラークの言葉は、金銭や我欲や名声を否定してゐるではありませんか。さういふ「空しいもの」のためではなく、人間として当然身につけておくべき美しいもの、崇高なものへ向つての競争を呼びかけてゐるではありませんか。

現在の日本の教育界には二つのタブーがあります。どこの国でも、そのために青年が心を燃やしてゐる二つの原理があり、それが日本では排除すべき「悪」といはれてゐます。一つはナシヨナリズム、一つは競争原理です。ナシヨナリズムと競争原理は、どこの国でも青年が心を燃やす最も強烈な原理です。たゞここで注釈を加へておきますが、ナシヨナリズムは閉鎖的なものであってはならず、競争原理は弱肉強食的なものであってはなりません。ナシヨナリズムは戦争につながる、競争原理は資本主義的人間の養成につながるといふ短絡的な思考が、いかに青年の健康な心を規制してゐるか。今にして気づかずにをれば世界の進運に遅れることは必ずです。われわれはこの点についても、明治から学ぶべきものを沢山もつてゐるはずで

日露戦争まで

国家の運命に対して、明治の女性はこのやうな対処の仕方をしたのでせうか。こゝに樋口一葉の明治二十六年十二月二日の日記があります。最初にこの日記の書かれた時代背景を考へてみ

たいと思ひます。一葉は明治五年に生れ、明治二十九年に亡くなりました。二十四歳といふ短命な生涯でした。この日記の書かれた頃、彼女は吉原の遊廓の門前町、下谷龍泉寺町で、ほそぼそと雑貨屋を営み、日銭を稼いで妹と母親を養ってゐました。「にごりえ」「たけくらべ」といふやうな不朽の名作が出るのは、この二、三年後で、当時は全く無名の存在でした。日清戦争の始まる丁度一年九ヶ月前です。冒頭に「議會紛々擾々」といふ言葉を書きつけてゐますが、これは当時の衆議院議長星亨の不信任案が上程されて、与野党が現在と同じやうな虚々実々のかけひきにあけくれてゐたことが偲べれます。また、日本は当時日清戦争に備へて軍艦の増強をしてゐましたが、この日記の書かれた前年、明治二十五年十一月三十日、フランスから回航してゐた千島艦といふ小さな軍艦が、四国沖で英国のラヴェンナ号といふ軍艦と衝突して沈没し、七十数人の日本の水兵が溺死します。当時自主的な裁判権を持たなかつた日本は、横浜の領事裁判所に提訴しますが、この日記の書かれる数日前、十一月五日に、理はわが方にあるが、国力の相違で敗訴してしまひます。さういふ内憂外患に対して、彼女は全身心を傾けて対決してゆきます。

兎猶、条約の改正せざるべからざるなど、かく外にはさまざまに憂ひ多かるを、内は兄弟かきにせめぎて、党派のあらそひに議場の神聖をそこなひ、自利をはかりて公益をわするゝのともがら、かぞふれば猶指もたるまじくなん。にござる水は一朝にして清め難し。かくて流

れゆく我が国の末いかなるべきぞ。外にはするどきわしの爪あり、獅子の牙あり。印度、埃及の前例をきゝても、身うちふるひ、たましひわななかるゝを、いで、よしや物好の名たちて、のちの人のあざけりをうくるとも、かゝる世にうまれ合せたる身の、することなしに終らむやは。なすべき道を尋ねて、なすべき道を行はんのみ。さても恥しきは女子の身なれど、吹きかへす秋のの風にをみなへしひとりほもれぬものにぞ有ける

最後の歌の意味は、秋の野に烈風が吹きつけてゐるやうな、この非常事態に、はかない女郎花にも似た女一人とはいへ、私だけが例外ではあり得ないといふことです。一介の無名の女性が、国家の運命についてこれほどの痛感を持ってゐたのです。かういふ心意気が日清戦争を勝利に導いたのではないでせうか。

そして、わづか十年の距離を置いて、日本は日露戦争に突入してゆきます。日露戦争は満州を市場とするための侵略戦争であつたとする唯物史観による戦争観は徐々に修正されつゝあります。「ロシアのように皇帝の極東に対する私的野望のために戦つたのではなく、日本側は国防衛戦争のために国民が国家の危機を自覚して銃をとつたために寡兵をもって大軍を押しかえずことができたのだ」といふ司馬氏の言葉もあります。何よりも、ソビエト建国の父レーニンが、日露戦争はロシア帝国主義に対する最大の正義の戦ひであつたといつてゐる言葉が、この戦争の性格を語つてゐます。日本の歴史教科書におけるこの戦争の故意の歪曲が修正されるの

はいつの日でせうか。もしこの戦争が勝利に終らなければ、不平等条約が半永久的に継続してゐただけは疑ないところでせう。

日露戦争に従事した将兵の歌を集めた『山桜集』といふ歌集があります。その中に猿田只介といふ無名の人の歌があります。七首の連作短歌を次にあげてみませう。

待ちわびし召集令をうけしより心をどりぬなにとはなしに

君の為国の為なりとはいへど老いしちち母思はぬにあらず

いさましきはたらきせよといひさして涙にくもる母のみことば

ふた親に妾わらはつかへむ国のためいざとはげますけなげなる妻

門の辺におくるみ親ををろがめば泣かじとすれど涙こぼるゝ

手をつかへなみだぐみたる教子の姿を見れば胸さけむとす

いざやいざ朝日のみ旗おしたてゝふみにじらなむ露の醜草しとぐさ

七首のうち六首までは「私」の世界、私情が詠まれてゐるでせう。私情にひかれる気持を素直に詠んでゐます。母や妻や教へ子をいさぎよく捨てゝ喜び勇んで行くとは書いてありません。さういふ、後髪をひかれるやうな悲しみと闘ひ、のりこえることによつてはじめて胸底から闘

志といふものが湧いて来る。軍国主義とか天皇制イデオロギーとかいふもので、よそ行きのタテマエを詠んでゐるのではない。公と私の内心の葛藤を、ありのままに包みかくしなくうたひ上げてゐる。こゝに生れてゐるものは全部一兵士の本音なのです。人間が極限の立場に立って、公私の役割の關係を、これほど自然に、見事にうたひ上げた作品はまれでせう。かういふ教養の高い兵士を擁してゐたといふ事実が、明治日本のすばらしさを如実に語つてゐるのではないでせうか。

そのやうにして、日露戦争までは、日本は一つの運命共同体であり、その共同体に参加することに「新鮮な昂揚」をすら感じてゐた日本人が、戦後は思想的に大きな変貌をとげてゆきまゐります。戦争といふものは、敗戦国を変へることは勿論ですが、戦勝国もまた戦争によって変わって行くのです。国の存亡をかけて、からうじてかち得た勝利でしたが、明治四十年代は近代思想史の分岐点といはれるやうに、さまざまな思想が渦を巻いて、価値観の变革が急速に進んで行くわけです。

明治の終焉

武者小路実篤に「『それから』に就いて」（『白樺』四三・四）といふ論文があります。「それか

ら』といふのは漱石の明治四十二年の作品で、長井代助といふ主人公と親友の平岡が三千代といふ一人の女性を争ふ。代助は義侠心によって、その恋人を親友に譲るのである。ところが結婚した平岡と三千代の間が次第に悲惨な状態になり、京都の支店にゐたのが東京に帰ってくる。その上京を見て、代助は自分が自分の心の「自然」にそむいて三千代さんを不幸にしたといふやうに考へて、最後は世の掟にそむいて、その三千代さんを自分の妻にしようと決意する。要するに俗な言葉でいふと姦通を容認するやうな小説なのです。この小説について、武者小路は次のやうに言ひます。

△自分は「それから」に顕はれたる思想を以て、一種の自然崇拜と見たい。 *ni admirari* の域に達した代助を以てこの自然崇拜家と見たい。作者も代助も、代助の罪を以て、人妻を奪はうとした点に認めようとはせず、自然の命に背いて平岡に自分の恋人を譲った点に認めようとしてゐる。

『それから』に顕れたる思想を、自然の力、社会の力、及び二つの力の個人に及ぼす力に就いての漱石氏の考の発表と見ることが出来ると思ふ。▽

こゝまでを説明しますと、文中の「自然」は、人間の内なる自然、人間の本性、極端にいふと本能でせう。漱石のほかの言葉をもってすれば、「人の掟」ではなく、「天の掟」といふことになります。それに対して「社会」といふ言葉は、道徳、倫理、「人の掟」といふことになりま

す。つまり、人の掟を捨てても、天の掟に忠実である方が、本当の意味で道徳的なのではないのだらうか。だから、漱石は不道徳な作品を書いたのではなくて、形骸化した道徳を批判してゐるといへると思ひます。姦通を礼讃してゐるのでは決してありません。

△（漱石氏は）自然を社会に調和させようとされず、社会を自然に調和させようとされるだらうと思ふ。▽

この部分を解りやすく言ふと、人間の本性を道徳に従属させようとするのではなくて、道徳そのものを出来るだけ人間の本性に即したものにす。つまり道徳を内面化し、できるだけ人間の自然に近づけようとする。教条化され、いのちを失って形骸化した道徳律を、いのちの通つたものにしてよといふわけです。△その時漱石氏は真の国民の教育者となられると思ふ▽と続けてゐるのです。

こゝに言はれてゐる限りにおいては、武者小路の言ひ方は決して間違つてゐないと思ひます。ところが「白樺」派の自然は、とめどなく暴走を始めます。武者小路には「自分の中にだけ神がある。その神は自我である」といふ有名な立言があります。自我が神であり、一切の価値基準といふことになると、それは政治的には無政府主義思想になります。だから「白樺」の思想は、大逆事件を起したアナキズムと密接につながることになります。明治四十四年の一月に、幸徳秋水をはじめとする十二名の者が死刑になりましたが、これは日本の近代史における最初

の思想的大事件であると思はれます。

やがて明治天皇が崩御され、乃木大将の殉死といふ衝撃的な事件が起ります。森鷗外は殉死の五ヶ月ほど前に、上原陸軍大臣の官邸で乃木大将に会つてゐるのです。明治四十五年の四月二十四日の日記は、そのことにふれて、最後に「白樺諸家の言論に注意すべきことを托す。」と記してゐます。武者小路や志賀直哉のやうな学習院出身の名門の子弟たちの、国家を否定し、個人と人類を直結させる思想を乃木大将は深く憂慮し、はしなくもそれが鷗外への遺言となつたのです。御大葬の葬列の中で乃木殉死を聞いた鷗外は「半信半疑す」と書いてゐます。明治二十年のベルリン留学以来、二十五年にわたるつき合ひですし、日露戦役にも共に従軍してゐるので、衝撃の大きさが想像できます。鷗外は直ちに「興津弥五右衛門の遺書」を書き、以後歴史小説の世界に入つて行きます。人間はいかに生きるべきかといふ抽象的な哲学の問題から、人間はいかに生き、かついかに死んだかといふ歴史事実の方に自分の全情熱を傾けて行くのです。

鷗外と並んで文壇の一方の旗頭であつた漱石は、乃木殉死をどのやうに受けとめたでせうか。漱石には大正二年十二月十二日、第一高等学校で行つた「模倣と独立」といふ講演があります。その中で次のやうに言ひます。

「乃木さんが死にましたらう。あの乃木さんの死といふものは至誠より出たものである。乃

木さんの行為の至誠であると云ふことはあなた方を感動せしめる。夫が私には成功だと認められる。さつゝいふ意味の成功である。だからインディペンデントになるのは宜いけれども、夫には深い背景を持ったインディペンデントとならなければ成功は出来ない。▽

こゝでは「至誠」といふ言葉が使はれてゐます。吉田松陰が「至誠にして動かざるものいまだこれあらざるなり」といった、あの「至誠」が心をこめて使はれたのは恐らく漱石あたりが最後なのではないか。「成功」とは道徳的に肯定できるといふ意味でせう。他人と違った独創的な行為も、その背景に万人の胸に伝はってくる至誠といふやうなものを持たなければ人を感動させないのだと言つてゐるのです。そして、この講演の最後のところへ日露戦争と云ふものは甚だオリジナルなものであります。インディペンデントなものであります▽と昂然と言いつてゐるのです。

明治が終つて一年半ぐらゐ経つた時点で、漱石は有名な「こゝろ」といふ作品を書きます。主人公の「先生」が、親友のKと一人の女性を争ひ、Kは自殺します。先生は静といふ人を自分の奥さんにしますが、その友人を死に至らしめた責任を終生胸に秘めて、自分の死にどころを探してゐます。ところが乃木さんの殉死といふことによつて、はっきりと死の決意ができる。そして自決してゆくといふ筋になつてゐますが、その最終部に次のやうに書いてゐます。

△すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始ま

て天皇に終ったやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく胸を打ちました。私は明白あからさまに妻にさう云ひました。妻は笑って取り合ひませんでした。何を思ったものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調戯からかひしました。私は妻に向つてももし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだと答へました。▽

『こゝろ』が朝日新聞に連載された時の題は「先生の死」といふ題でした。漱石に「文芸とヒロイック」といふ評論がありますが、これには潜航訓練中に殉職した佐久間勉大尉の壮烈な遺書のこと書いてあります。乃木大将の「遺言条々」といふ遺書も勿論読んでゐた筈です。漱石の現実の経験の中にくひ込んでゐる二人の軍人の死と「先生の死」が無関係なわけがありません。恐らく、さういふ経験の上に、明治の精神に殉死するといふ言葉がごく自然に出て来たのではないでせうか。『こゝろ』のほかのところに「自由と独立と己れに充ちた現代」といふ言葉もあります。明治は決して暗黒な天皇制絶対主義といふやうな枠にはまらぬ、果敢な自己主張の時代でもあったわけです。明治の精神といふのは、いろいろな規定ができるでせうが、「天皇に始つて天皇に終る」とあるやうに、その中核に明治天皇がいらつしたといふ事実を抜きにしては考へられない。その明治天皇には、日露戦争中の明治三十七年「樹間花」と題する次の御製があります。

こずゑのみ人に知られて桜花こがくれながら散りやはつらむ

人が桜の花を見るとき、高い梢に咲いてゐる花だけが目に映る。しかし、人の目に映らない沢山の花が、一年に一度の生命を開花の一瞬にかけて、やがて人知れず散ってゆくといふ意味でせう。名も知れぬ民へのこまやかな憶念の情がこめられてゐて、それが日本人の心には敏感に分るのです。天皇、天皇といつて、天皇をかつきまはる天皇主義といふやうなイデオロギーとは全く無縁な、美しく微妙な世界がそこに開けてゐます。さういふ陛下のお心に、ぼくら一人ひとりの、かけがへのない生命が摂取されてゆく。有限な個人の生命が、うつしみを持った生きた人格、三島さんの言葉でいふと「人間であることのきはみにおいて神であるところの方」、さういふ方の微妙な憶念の情に摂取されてゆくといふ喜びが、明治を支へてゐた力源であつた。私はさういふ明治といふものの見方も、はっきり成り立つといふことを自信を以て申し上げたいと思ふのです。

暗黒な絶対権力の支配する時代といふマルクス主義者のもち出すイメージと、いま私が文献をあげながら説明したイメージと、どちらに当時の日本人の大部分を支へてゐた真実があつたのだらうか。この四泊五日の合宿の中で真剣に考へてほしいのです。国家は権力機構や制度で

あると同時に、有機的な一つの永久生命である。国には国のいのちがあるといふことを、どの国でも情熱をこめて教へてゐます。それを教へることが罪悪であり、戦争につながると言つてゐるのは、日本だけに見られる倒錯現象ではないでせうか。われらの父祖が、血と涙を捧げて、幼い国を育て、対等の条約を五十年かけてかちとつた。その苦難の歴史に、ぼくらは恥づるところなきやと問はざるを得ないのです。

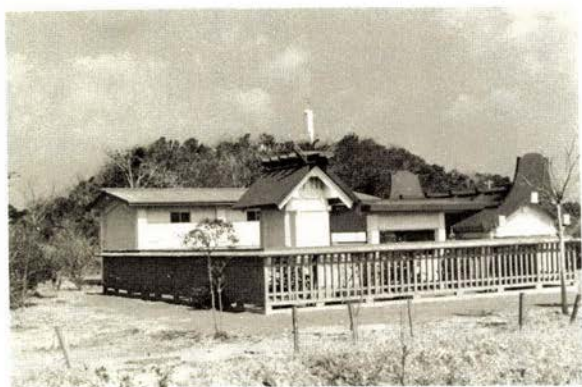
『聖徳太子の信仰思想と』

『日本文化創業』 講読

— 輪読のはじめに —

亜細亜大学教授・教養部長

夜久正雄



東郷神社より日本海々戦記念碑を望む

(一) 輪読のしをり

(二) 講読

(一) 輪読のしをり

今日は聖徳太子のお言葉を中心にして、聖徳太子のご精神がどういふものであったかといふことを皆さんと一緒に勉強してみたいと思つてをります。

聖徳太子は日本固有の文明と大陸の文明を融合するといふ大変なご事業をなされたのですが、いふまでもなくいかなる文明も交流なくしては展開してゆかない。従つてもしも外国の文明を受け入れなければ、その国は自滅してしまふのです。丁度、個人の場合でも、友達も作らず話すこともないやうな生活を送つてゐると、最後には自閉症と言ふ一種の精神病のやうなものにかかつてしまふ。国家や文明の場合もわれわれの精神の場合と同じく、外国の文明と交流することのない文明は停滞して、つひにその文明は滅びてしまふのです。

現在テレビなどで、原始文明といふものが時々紹介されますが、あの種族は結局ほかと交流しなかつたために原始段階そのままの状態です。すなはち生れたばかりの子供が少し言葉を覚えただけの状態で、そのまゝ、ほかと交流しないでずっと生きて来た。それとよく似た状況だと思ふのです。もっとも他国の文明と交流するときに、外国の文明をあまり高く評価しすぎると、今度は自分の経験を忘れてしまひ、他国に隷属するやうなことになる

しまふ危険性があるのですから、文化の交流の中で自己を發展させて行くことは大変至難なことだと思ふのです。ところが今日皆さんと一緒に勉強しようとしてゐる聖徳太子は、日本が当時の大陸文明を導入したとき、これをどういふふううに自分たちの経験の中に生かし、それによつて自分たちの生活をどのやうに豊かに充実せしめて行くかといふ問題に、真っ向うから取り組み、日本文化の基礎を確立せられたのです。

太子のご事業は形の上で言ひますと、仏教を導入し、それをご自分の体験の中に生かしてゆかれた。そして仏教研究の著書として「三経義疏」を残された。それから国家の基本的な内容を明らかにして、これを「十七条の憲法」といふ形で述べ表はされた。さらに「日本書紀」には日本の歴史を初めて編纂せられたといふことが書かれてをりますが、それは恐らく中国の歴史を参考になさったのでせうから、中国の歴史的精神つまり歴史の文明といふものを取り入れて、これを日本化して表現せられた、さういう御仕事もなさったのだと思ひます。この聖徳太子の残されたと思はれる歴史が「古事記」の原形といへます。さう考へてまゐりますと聖徳太子の御事業は以上の三つのことからしても大陸の文明、支那文明、印度文明を取り入れて、御自身のご体験の中に生かして、日本文明の基礎を確立されたといふふううに見ることが出来ると思ふのです。しかしそれはあくまでも外側から見ただけなので、外側からだけでは太子の御事



業のもつ精神内容がわからない。その精神にふれるためにはやはり太子の御言葉にふれる以外にはない。したがって聖徳太子のお言葉を直接研究の対象にして、これをよく読んでみるといふことになるわけです。それが今日皆さんと一緒にしようとする勉強の内容なのです。

聖徳太子のお言葉といふと、この資料に書かれてあるやうな、例へば「十七条の憲法」の「和を以て貴しと為し、忤ふことなきを宗となす。……」さういふところから始まるお言葉がある。しかし今迄にさういふ文章にふれても、何かずいぶん縁遠いやうな気持ちになられる人もあるだらうと思ひますので、私の経験を少しばかりお話し申し上げておきませう。

私は諸君ぐらゐの年輩のところから先輩の導きによつてずつと読み続けて参りました。

従つて若いときから聖徳太子のお言葉は暗唱するく

らゐに読んでゐるのですけれども、しかしなかなか本當にわかるといふふうにはゆかない。しかし、中にはわかつたところもあるわけですから、私はそのわかつたところを手がかりにして、その太子のお言葉をしっかりと心に銘記してそこから考へをおしすゝめて参りました。それがいはば私の勉強の方法でもあつたのです。

昨年この合宿で小林秀雄先生がご講演をなさいましたが、その中で「自分の知恵が人に伝はるのは、心を開いてその人と語り合ふ時だ。心を開いて、人を信じてお互に語り合ふところに、火花のやうに散る知恵が、本當に生きた知恵だ。」（『日本への回帰』第十四集「感想」から）といはれた。そのとき私はそれを聞いてゐて本當に「やはりさうだなあ」といふ感じがしたわけです。ほかのことは忘れても、これだけは覚えておかうといふつもりで、その後も小林先生のお言葉をじっくりと味つてまゐりました。さう考へてゆきますと、そのお言葉はさきほど少しお話しした聖徳太子の「憲法十七条」の第一条の終りの方と非常に深い関連がある。

「然れども上和ぎ下睦びて事を論あげつらふに諧かなひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。」

「上和ぎ下睦びて事を論ふ」といふのは小林先生のいはれる「お互ひに人を信じて語り合ふ」といふことでせう。そのやうに語り合ふときには「火花のやうに散る知恵が、本當に生きた知

恵だ。」といふその知恵が生まれ「事理自ら通ふ。」ことになるのです。事の道理といふものから通じて、事が成るのだ。太子はさうおっしゃってゐるのです。「上和ぎ下睦びて事を論ふに諧ふ」といふことは、小林先生の言はれる「心を開いて、人を信じてお互ひに語り合ふ」といふことだ。小林先生と全く同じことを太子は言っていてをられるのだ。私はさう思ひました。

もっとも小林先生の文章は、お互ひに人生について、生き甲斐について、自分の職業についてどう考へるかとか、そのことをお互ひ同志に語り合ふといふやうな内容を言っていてをられるやうですが、聖徳太子の方の「事を論ふに諧ふ」といふこの「事」といふのは、国家の大事です。その国家の大事を論ずる場合にも、われわれが家庭の中であるいは学校の中で、あるいは友人同志が本当に心を開いて語り合ふやうな気持でもって、国の大事を語り合へば、国家の運命は開けて行くに違ひないのだ、さう言っていてをられると思ひますが、ここに太子が述べてをられる基本的な趣旨については、小林先生の言葉と全く一つに通じてゐるものがあると思ふのです。

その次に挙げました資料は、聖徳太子の「勝鬘經義疏」の御言葉です。「勝鬘經」といふのは、仏教の最高の思想である大乘仏教の教典のひとつです。聖徳太子は大乘仏教の經典を取り上げられて、そのうちの「維摩經」「勝鬘經」「法華經」といふ三つの經典について、注釈をお書きになったのです。ここで注意していただきたいことは、一般に仏教の經典の注釈といへば、それは多く理論の説明なのですが、この聖徳太子の「義疏」はよく読んでゆきますと、太子ご

自身の信念体験の表現であるといふことです。太子は註釈を通じながらご自分の人生観を述べられたものであると思はれるのです。例へば

「一に云く」、「二に云く」、「三に云く」、「又云く、」

このやうなお言葉がところどころに出て来るのですが、これはお一人で書齋にこもって本を読んでをられたのではなくて、その当時高麗とか百濟から来た聖徳太子の仏教の方面の先生がをられますから、少くともその先生あるいは何人かの仏教を研究する人と一緒になってこの『勝鬘經』などを読まれたのではないだらうかと思ふのです。

われわれが輪読をやる、さういふ輪になってひとつの本を読むといふ、さういふ形を太子もやはりとってをられたのではないだらうか。「一に云く」「二に云く」といふことで、お互ひに自分たちの解釈を述べ合つてゐるところに、つまりお互ひに心を開いて語り合ふといふことの中に、本当の知恵といふものが生れ育ち、お互ひの交流が生まれて行つたのではないだらうか。かういふふうに思はれてならないのです。

それから

「疑を標して云く… 釈して曰く」

かういふところが各所にあるのです。ある人が質問を出した。それに対して「釈して曰く」、みんなよく考へて、われわれが輪読の中でやるやうにこれはかういふ意味であるといふ答へを

出してゆく。それから

「本義に云く」「或は云く」「私の積は、少しく異なる。」

といふ言葉もある。「本義に云く」と云ふのは、聖徳太子が註釈のための参考書として柱にしてをられた大陸伝来の書物に云く、といふこと。「或は云く」、ほかの本にかういふふうにある。あるいは人はかういふふうに言っているけれども、「私の積は、少しく異なる」、自分は少し違ふ。この「少し」といふのは太子の一種の謙遜であって、大分違ふところもあるのですけれども、まあ少し違ふといふふうなことが書かれてゐるのです。かういふところをずっと見ますと、丁度われわれが一冊の本を輪読で読むときに、お互ひに非常に努力をして、ここはかういふ意味ではないかとか、この言葉の主語はどれだらうかとか、さういふことを一生懸命に考へてゆくのと違はない。さういふ働きを表はしてゐるものであると私は考へてをります。そのやうな澁刺とした討論の中から学問が育って行った。その生き生きとした道程を偲ぶべきだと思ふのです。

文章の読み方について、小林秀雄先生は次のやうに言つてをられます。

「…文章を読むといふことは知識を貯めることではない。『あ、分つた』と直ぐ言ひたがる人は知識を貯めてゐるのです。さういふ読み方をすれば、文章はみなやさしいですよ。たった一

つの歌でも、この歌人はどういふ心持でこの歌を詠んだのだらうと思へば、歌はいくら読んでもむづかしいし、読めば読むほど味はひも出て来る。その味はひの中にその歌人の顔が見えてくる。さういふところまで読まなくてはならないでせう。論文でもさうです。歌と論文は違ふと簡単に考へてはいけない。全然違はぬ性質が両者にあるのです。私は歌は詠まないけれども、自分の文章は歌のつもりで書いてゐる。僕といふ人間の味はひが出てゐるやうに、僕は文章を作らうとしてゐます。僕はむづかしい文章など少しも書いてはゐません。僕の文章を小林といふ男が表はれてくるまで、何度も読んでもらひたいと思つてゐるだけです。」（『日本への回帰』第十四集「感想」から）

何遍も何遍も、同じ文章を読んで、その人の表情といふか、その人の感情といふものが本当に今、そこにその人がゐるやうに見えて来る。そこまで読まなければいけない。小林先生はさうおっしゃつてゐるのです。ところが実に聖徳太子も、それとごく似たやうなことを言つてをられます。

「しか而るに勝鬘は但書を見るのみ。那なんぞ『我聞ク三仏ノ音ノ声ニ』といふことを得るとならば、声は以て意を伝へ、書は以て声を伝ふ。故に書をば義を以て『聞ク三仏ノ声ニ』といふなり。又見けんし

聞し覚もんすることは、書に従りて解げを得るも亦また称して聞となす。」

漢文で書いてあるところが「勝鬘經」のお経の中の文章です。「我聞ク三仏フツ、音ヲ」といふ言葉がお経の中にあるのです。勝鬘といふ人は波斯匿王の子供ですが、ご両親が大乗仏教に帰依したので、自分の子供の勝鬘も大乗仏教に帰依させたいと思つて手紙を出したのです。ところが勝鬘はそれを読んで「我聞ク三仏フツ、音ヲ」と言つたのです。仏様の教へについて書いた両親のその手紙を読んで、自分は仏様の声を聞いたと言ふのです。手紙を読んだだけで仏様の声を聞くといふのはをかしい。それをなぜそのやうに書いてあるのだらうか。それに対して太子は次のやうに言はれるのです。「声は以て意を伝へ」——声はその人の心を伝へるものだ。その人の全体の感情を持つてゐるのはむしろ書いたものよりも、肉声を伴つたものだ。その肉声の中に感情が現れるわけですから、「声は以て意を伝へ」といふことになるのです。そして「書は以て声を伝ふ」。——書かれたものはその深い感情をたゞへた声を伝へるのだ。だから「書ば義を以て聞ク三仏フツ、音ヲ」と、いふ——書を読むといふことを仏の声を聞くといふのだといはれるのです。次の「見し聞し覚もんすることは」「覚もんすること」といふのは悟るといふことです。書かれた文字からその心を察し、心を察することによつて、その人の声を聞き、そして相手の言つてゐることを悟ることは「書に従りて解げを得るも」——「解げを得る」とは悟るといふこと、

書かれたものによって悟りを得るといふ場合もまた「称して聞となす」——聞くといふことと同じに考へるのだ。太子はかう言ってをられるのです。小林先生は書いた人の顔が見えるまでその文章を読むのだといはれたが、書物といふものはさういふふうを読むべきであらうと思ふのです。

それと関連しますが吉田松陰の「講孟余話」の序の中に次のやうな文章があります。

「…夫れ孟子の説は固より辯を待たず。然して之を喜びて足らざれば乃ち之を口に誦し」

孟子の説は固より細かな分析的な説明は必要でないが、「之を喜びて」——その文章が本当にいいことを言っているなあといふときには、「喜びて足らざれば」——ただ喜んだだけで済まなければ、「乃ち之を口に誦し」——それを自分も口に出して言ってみるのだ。「之を誦して足らざれば乃ち之を紙に筆す。」今度はこれをもう一遍書いてみるのだ。「亦情の己む能はざる所なり」。ものを読んで本当に感動するといふことはさういふことなのだ。この吉田松陰の言葉とほとんど符節を合するやうなお言葉が聖徳太子の、やはり『勝鬘經義疏』の中にあります。

「此の中の文は本義に微妙に細釈すれども、而も受くること能はざるが故に、文に随ひて直ち

に唱ふるのみ^し

といふのです。此の經典の中のことばは大陸からわたってきた基本的な註釈書に「微妙に細積すれども」細かに説明してあるけれども、そんな細かな説明は不要だと思ふから「文に随ひて直ちに唱ふるのみ」。その文を何回も繰り返して読んで、その文の表はしてゐる声を聞くといふ、さういふふう^にに読むのがいいのだ。これは先程の松陰の言葉と全く同じく、ものを讀んだときの深い感動を表はしてゐるのだらうと思ひます。

明治天皇も読書について次のやうなお歌をよんでをられます。

歌

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり（明治四十一年）

一度聞けば忘れないといふやうな、さういふ歌のよみ方、それがこの一首の中に見事に表現されてゐると思ひます。

歌

事もなくしらべあげたる言の葉の花にぞ匂ふ国のすがたも

技巧を弄したりすることもなく非常に素直な日本語の表現の中に、日本の国の本当の素晴らしい姿といふものが輝いてゐるといふことでせう。私は本当にいいお歌だと思つていつでも拝誦してをります。

(二) 講 読

さて皆さんがいま手にしてゐる『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』といふ書物について一寸お話ししておきませう。この書物の著者の黒上正一郎といふ方のことや、この書物が出来た由来についてはこの本の一番最初の「復刊のことば」の中に書いてありますが、著者の黒上先生といふ方は、昭和四年に数へ年僅か三十歳で亡くなられた方です。先生は非常に敬虔に聖徳太子の御研究をなさつて、当時東京大学の山上御殿と言つて一流の学者が講義をするところで講義をなさつたのです。三十足らずで、そこで講義をなさつたのだから非常に勉強家であり、信仰の深い方であつたことはそのことによつても偲べれます。

黒上先生はそこで講義された内容を、今度は当時のやはり東京大学の国文科から出てをりま

した『国語と国文学』といふ雑誌に掲載されました。この本はその論文を黒上先生が亡くなられてから、われわれの先輩の田所さん、高木さんたちが、当時皆学生ですから、大変な苦勞をして編纂したのです。

今日はこの中の一八一ページのところに「大乘經典の芸術的鑑賞と大陸仏教思想の内的純化」といふ一章がありますが、そこを一緒に読んでみます。大乘經典といふのは、『勝鬘經』とか『維摩經』とか『法華經』とかいふ經典のことですが、聖徳太子はさういふ大乘仏教經典を、芸術的に鑑賞するやうに読み味はってこられた。そのやうにして大陸の仏教思想をご自分の経験に照らして内的に純化されてきた、その過程についての黒上先生の考察が述べられてゐるのです。その章の最初から読んでみませう。

「聖徳太子はわが文化の黎明の時代に出現し給ひ、當代大陸の思想學術を博綜せさせ給うたのである。けれども太子はこれらの思想學術を以て直ちに人生そのものを律し給うたのではない。實に太子の御思想の特質は、国民生活の運命を荷はせ給ひし力の偉大なるが故に、自ら教學理論の領域に踰躋せさせ給はずして、更に之を統御すべき信念體驗の事實を重んぜさせ給ひたる、その内心の威力に存するのである。」

聖徳太子は、日本文化の夜明けの時代に現はれなさって、その時代の中国、印度を含めた亜細亜大陸の思想学術を広く綜合なさったのである。しかし、大陸の思想学術を以て「直ちに人生そのものを律し給うたのではない」、例へばマルクシズムを例にあげると、マルクシズムがソ連に一応定着したといふのはそこにツアーといふ皇帝に対する非常な反抗精神があった。さういふ歴史的背景があるのですが、この反抗精神をそっくりそのまま、日本に持って来てしまつて、日本の天皇・イコール・ロシアのツアーといふふうにならへば、とんでもない間違ひでせう。ヨーロッパ思想の中に現はれた非常に激しい反君主的な思想精神をそっくりそのまま日本に持って来て天皇制を排撃する、さらにマルキストは日本で初めて天皇に直接的な危害を加へようとしたのですが、いふまでもなくそのやうなことは決して許すべきではない。太子はさういふふうには「これらの思想学術」をもつて「直ちに人生そのもの」、つまり日本人の人生をそれでもつてすべて決めてしまはうとなさつたのではない。

太子は摂政といふ位にお就きになつたのですがそれは同時に国民生活の運命を自分の肩に背負はれたといふことです。そのお覚悟が本当にお強かつたから、ただ教義がどうか理論がどうかといふ領域にうづくまりなさらないで、さういふ外国の思想学術を修め導いて文化を豊かにし、充実させるといふ。さういふ「信念體驗の事實を」重んじられたのである。黒上先生はさうおっしゃるのです。

聖徳太子のご思想の本質は、そのやうに国民生活の運命を荷って、外来の思想學術を日本文明の中に溶かし込んで、更に日本の文明を豊かにして行かうとなさった。さういふお心の威力にあるのです。そのやうな覚悟、あるひは使命感、さういふご精神が太子の御思想の中核にあるのです。

さういふ聖徳太子のご精神がどういふふうに表示はれてゐるのかといふことを一八六ページ以下の個所で直接に味はつてみませう。

「故にこの御精神を示させ給ふ三経義疏は、之を外的見地を以てしては經典註疏の知的作業を内容とする如くであるけれども、一切の教義と理論とを内的化し給ふ信念の表現は、自ら尋常経疏の形式と異り、その大御言葉は芸術的創作を偲ばしむる心的節奏を波うたすのである。」

『三経義疏』は、ただ外から、これは、義疏”であるといふふうにと考へると、解説書といふのだから、言葉の語義の説明にすぎないやうに見えるけれども、太子はそのやうな一切の教義とか理論をご自分の体験に生かしてゆかれるのです。従つてさういふ信念を表現された太子の大御言葉は、普通の經典註釈書の形式と違つて、芸術的創作ではないかと思はれるやうな、「心的節奏」すなはち心のリズムを波うたせてゐる。黒上先生はさう仰言つてをられます。

黒上先生のご本は、昭和初期のものですから割合に漢語が多いご文章です。やや文語体に近いやうな口語体で一種独特の味はひを持ってゐます。「その大御言葉は芸術的創作を偲ばしむる心的節奏を波うたすのである。」われわれはかういふ言葉を読むと、黒上先生が聖徳太子のお言葉のどういふところに深く感動してをられたかがよくわかります。次を読んでゆきませう。

「此に勝鬘經義疏に經典序説の文中、波斯匿王がその夫人と相語つて、『勝鬘夫人是
我之ガ女ハ。聰慧利根。通敏ニシテ易悟シ。若見シ佛者。必速解ズ法ニシテ。心得レ
無キ疑。』とある言葉に對し、次の如く釈し給ふ大御文を仰ぎまつるのである。

「聰慧利根とは、耳に善く聴くを聰と曰ひ、心に明かに察するを慧と曰ふ、聰察爽明なる之を利根と謂ふ。通敏にして悟り易しとは、表を聞きて裏に達する之を通といふ、善く聴くの致す所なり。照了深明なる之を敏といふ、善く察するの致す所なり。理に遇ひて即ち解する之を悟り易しといふ。利根の致す所なり。前の句は其の性能を談じ、後の句は其の功用を言ひ、共に相成するなり。教を熏ウくるは必ず善く聴くに由るが故に、聰を歎ずるを首はじめとなす。此は器已に具はることを明かすなり。必ず速かに法を解せんとは、一たび即悟して再教を待たざるなり。心疑なきを得んとは、神情開朗にして小乗の疑滯なきなり。』」

先程お話したところと重複しますが『勝鬘経義疏』の序説の文章の中で、「波斯匿王」、これは勝鬘夫人のお父さんですが、彼が夫人とお互ひに相談して、勝鬘が大乗佛教に帰依するやうに手紙を出すとき次のやうに言ふのです。

「勝鬘夫人は私の娘だ。だから性質が非常にしっかりしてゐて聡くて、悟りやすい。頭が良くて敏活だから教へを受けて悟りやすい。だから大乗の教へを受けたら、きつとすぐそれを理解して、大乗の教へに対して疑ひを抱くやうなことがないだらう。」

と言つて手紙を出した。經典のこの部分は一応はそのやうに解釈出来ます。しかし聖徳太子はそのやうに単純にはお読みにならなかつた。太子は次のやうにおっしゃるのです。「聡慧利根とは、耳に善く聴くを聡と曰ひ、心に明かに察するを慧と曰ふ」。おそらく太子は「聡」あるいは「慧」といふ文字を特によくご覧になつて、じつと長いことお考へになられたのだらうと思ふのです。さうして「聡」といふのは、人の言葉をよく耳に聴くことだ。さらにその聴いたことを心の中で明らかに察する。言葉の心を察するそれを「慧」といふのだと太子は考へられるのです。さらに「聡察爽明なる之を利根と謂ふ。」このやうに耳によく聴き心に明らかに察するといふことが爽やかで濁らない、それを「利根」といふのだ。「利根」とはただ根性や性質が鋭いといふやうなことではない。人の言葉を聞いてその心を察する力が爽やかで曇りがなく、本當にそれがよく出来るといふのが「利根」といふのだ。と言はれるのです。そのあと「通敏に

して悟り易し」といふことについての太子の御言葉がつづきます。「表を聞きて裏に達する之を通といふ。」「表」とは言葉ですから、言葉を聞いて心に達するこれを「通」といふのだといふふうに言ってもよい。いつたいどういふ心持ちからさういふ言葉が出て来るのだらうと深くその文章を読む。それは前に述べた「善く聴く」といふことよって出来るのだ。これを「通」といふ。それから「敏」とはどういふことかといふと「照了深明なる之を敏といふ」。人の心を照らすことが深く明らかである。これを「敏」といふ。これもまた前の「善く察する」相手の気持をよく察するといふことよって可能なのだ、これを「敏」といふのである。つまり「聴」から「通」が生まれ、「察する」といふことから「敏」が生まれるといふのです。次の「悟り易し」といふのは正しい道理にあへば、それを正しく理解することです。それは前に述べた利根によつて可能なのです。すなはち「易_レ悟」とはその「効用」を言ふのだといはれるのです。

その後で太子は「教を禀くるは必ず善く聴くに由るが故に、聴を歎ずるを首となす。」とつけ加へてをられる。我々は本当に心を集中して、優れた言葉を聴くことよつて教へを受けることが出来るのだ。さらに言へば、我々が何かしつかりしたものを求める心よつてはじめて聞くといふことが行はれる。さういふ意味から太子は「善く聴く」といふことを一番最初に置いてあるのだ「聴を歎ずるを首となす」と言はれるのです。ほかに聖徳太子はいろんな個所で「善く聴く」といふことを強調してをられるのですが、その「善く聴く」といふのは次の「善

く察する」といふことに続くわけで、優れた人の言葉をそれこそその人の声が聞えるまできく、人の教へはさういふ働きによって受けることが出来るのだとおっしゃるのですから、ここでは「聴を歎ずる」といふことが初めに来るのだと註釈されたのです。

「此は器已に具はることを明かすなり。」このことはさういふ勝鬘の教へを受ける器量といふものが、両親の手紙を受ける段階でもう具はってゐるといふことを明かすのだ。だから勝鬘は「必ず速やかに法を解せん」すなはちすぐ大乘の佛法を理解するであらうといふことになるのです。その經典のことばについて太子は「一たび聞きて即悟して再教を待たざるなり。」と註をどこしてをられます。一度聞いたら忽ち悟ってもう一度聞かうといふことがないといふのです。思ふに、人生で本当に感動する、わかる、といふのはたゞ一度のことだらうと思ふのです。もう一度聞かせてくれといふことはあるけれど、それは知的なことであって、人生にとって一番大切なことはたゞ一度の感動で決まるのです。あとはそれを自分で信ずればいいのです。信じるか信じないかが問題なのです。その人の言葉を自分が聞いて、わかった、と思ったときには自分の心がその人に吸収されてゐるのです。

山田輝彦先生はこの合宿の講義の中で、明治天皇の

時のまに散りゆくものか櫻花ここの日数人に待たせて

といふ御製を読まれて、散ってゆく桜花に寄せる陛下のお心を思へば、私も、ひと知れず死んで行つても、その気持が陛下の心に納められていくやうな喜びを感じるのだ、と言はれました。偉大な人の言葉といふのは、さういふ性質を持つてゐるのです。従つてその言葉が永久に残るわけで、その言葉の中に我々は吸収されて行くといふ、さういふ感動を我々は現実に味はふのです。その味はったことはまぎれもない自分の経験ですから、その自分の経験を信ずる以外に信ずるものはないのです。

最後の「心疑なきを得ん」といふ經典の言葉に対して聖徳太子は「心疑なきを得んとは、神情開朗にして小乗の疑滞なきなり」と註を加へてをられます。「神情開朗」の「神」は神様といふ意味でなく精神の「神」です。「情」は人の心、情けです。さういふ人の心が開けて、おれがおれがといふやうな自己中心の滞りといふやうなものがないやうになるのだ。小乗とは自己執着です。いつでも自分に依らうとする心ですね。我々はさういふものをいつも持つてゐるのですが、本当の言葉に触れて深い感動を受けたときには、もう自分も他もないやうになつてしまふ。

明治天皇の御製に

文みれば昔にあへるここちして涙もよほすときもありけり

といふお歌がありますが、本を読んで涙の流れるやうな感動を味はふやうなときには、我も人もない。「神情開朗にして小乗の疑滞なきなり」といふ気持になってゆく、このお歌に表現なさつてゐるのはそのやうなご精神だらうと思ふのです。

われわれはなかなか「神情開朗にして小乗の疑滞なきなり」といふふうにはなれませんけれども、このお言葉を心の中で誦してゐると、そのやうな心持を目指して生きて行かうといふ気持が湧いてきます。

亡くなられた岡潔先生は、この合宿教室にも二回おいでになりましたが、最初に岡先生に合宿に来ていただきたいといふことで、小田村先生とご一緒に岡先生のお宅をお訪ねしたことがあります。そのときに聖徳太子のことが話に出まして「神情開朗にして小乗の疑滞なきなり」といふお言葉が聖徳太子のお言葉の中にある、といふことをお話ししたら、岡先生が膝を叩くやうにして、「はあ、さうですか」と言つて非常に感動なさつたことを覚えてをります。このお言葉は太子が大乗佛教に心を開かれたその時の感動を現はしてゐるやうにも思はれますし、太子が国家の運命を担つて諸々の事業に心身を傾けてとりくんでをられた時のお心持を現はしてゐるやうにも思はれます。本当にすばらしいお言葉です。

これを更に黒上先生は、その次の文章で吉蔵師といふ大陸の佛教学者の書いた『宝窟』といふ『勝鬘經』の註釈書の中の文章と比較して、聖徳太子のお言葉がどういふ内容を持つてゐるかといふことを非常に詳しく説明してゆかれるのです。そこをずっと読んでゆきますと、われわれはこの聖徳太子のお言葉が聖徳太子のお心持をどんなにすばらしく表はしたお言葉であるかといふことがますますよくわかつてきて、太子に対する讃仰の心持を深くさせられるのです。

以上いろいろ申し述べましたが、日本文明の源泉にあつて、聖徳太子がどういふお心持で、日本文明の基礎の確立をされたか、我々はそのお心持を体して、現代の世界文明との国際的交流の中で生きてゆかなければいけないと思ひます。外国の思想の長所を取るべきところがあれば、それを取り、捨てなければならぬ所があればそれを捨て、且つ絶対に相容れない所があればそれを批判しながら、毎日の生活を送らねばならない。我々がいま生きてゐる時代はさういふ世界文明の潮流のうづまく時代なのですから、そこに立つて聖徳太子がかつて東アジアに於て、日本の独立を完成するために文化的基礎を確立なさったその御偉業を偲び、その御偉業の何百分の一か何千分の一か日本の運命の開拓にお役に立つ活動を皆様と共に、なんとかして果して行きたい。私はさう念じてをります。

短歌創作について

戸田建設(株)技師

青山直幸



東郷公園に立つ日本海々戦記念碑

はじめに

短歌創作の意義と心構へ

短歌創作の留意点

- (一) 体験に根ざした、切実な感動を詠むこと
- (二) 自分の感動を正確に表現すること
- (三) 一首一文の原則

— 歌に詠む気持を一点に集中すること

四 字あまり・字足らずについて

(五) 連作短歌 — 具体的表現の為に

は
じ
め
に

私は、紹介の中にありましたやうに、戸田建設といふ建設会社に勤務してをります、設計の技術者でございます。皆さんの中には、私のやうな一会社員が、どうして短歌導入講義をするのだらうと不思議にお思ひになる方もゐらっしゃるだらうと思ひます。実際私は専門の歌人でもありませんし、短歌を専門的に研究してゐる訳でもありません。ただ私は、この合宿教室で短歌創作の意義を教へて戴きました時から、日常生活の折々に短歌を詠み、自分自身の心を振り返るといふことだけは、今まで積み重ねて参りました。従つて、あくまで私自身の体験を中心にしてお話することになりますので、よろしくお願ひ致します。

さて、これからの時間、短歌創作をすることになってをりますが、おそらく皆さん方の大半は、かうした経験は、初めてではないかと思ひます。短歌創作が、この合宿に参加するはじめてから心の重荷になつてゐるといふ方もゐらっしゃると思ひます。私自身、正直なところ短歌を創作するといふことになりませんと、やはり気が重いのです。その私が、短歌を創作するのは初めてだといふ方々に、かうして御話をするといふのは随分乱暴な気もしますが、自分の思ひを五七五七七といふ歌の形式に何とか表現し得た時のさはやかさは、また何にも代へ難いもので

すし、皆さんにも、是非そのさはやかさを味はっていただきたいと思ふ一念で、お話をする次第です。

短歌創作の意義と心構へ

ところで、最近の若者は、何事に対してもあまり意欲を示さない或いは物事に熱中する、物事に感動するといふことが、非常に少ないと言はれます。『シラケル』といふ言葉が流行してをりますが、それも、一つの表はれだと思ひます。私どもが、合宿教室の中で、短歌創作を今日まで一貫して行ってきたのは、かうした情感が枯渇してしまつた状態から少しでも脱却して、私達日本人の祖先が培ってきた豊かな情感の世界を取り戻したいと願ふからに、他なりません。

私達の祖先は、千数百年の昔から、例へば万葉集に見られるやうに、上は天皇、大臣と呼ばれる高級官僚から、下は防人、その妻、東国の農民や、遊女に至るまで、身分や地位や男女や生国の違ひ、稀には、国籍の違ひにすら関はりなく、歌を詠んできました。万葉の時代に歌と言ひますと、短歌のみならず、長歌や旋頭歌（五七七五七七）、仏足石歌（五七七五七七）等も含まれます。それらを総称して、和歌といふのですが、私どもが、日常和歌と言ひます時には



五七五七七の短歌のことを指して居ります。それは、短歌以外の形式の歌が、時代が下りますと、衰退したにもかかわらず、短歌だけが、現代に至るまでその命脈を保ってきてゐるからです。すなはち短歌は、千数百年の歴史を持つ国民的芸術であると言っても過言ではないのです。

さて、先程、「情感の世界を取り戻す」と申しました。そのことは一見難しいことのやうですが、決してさうではない。それは私達の祖先が培ってきた心の働き、自然な心の働きを取り戻すことに他ならないのです。私達現代人は、心が動いても、それを素直にうけとめようとせず、つい様々な理屈をつけてごまかしたり、忘れてしまったりしてゐるやうです。かうしたことを繰り返してゐると、いつの間にか人間ならば当然心を強く動かされるべきことに遭遇しても、何も感じないといふことになってしまふのです。江戸時代の

有名な国学者、本居宣長の著書の中に、『源氏物語玉の小櫛』といふ、『源氏物語』を論じた書物がありますが、その中に、人間が人間としての情感（もののははれ）を知ってゐれば、必ず「感ずべきことにあたりて、感ずべき心を知りて感ずる」ものだと言つてをります。すなはち「感ずべきこと」人間であれば必ず心を動かすべきことに對して、ありのままに感受することが出来る心を持ち、そのことに感ずることが出来る、それが本当に人間らしい人間だといふこととせう。だが私達は、果たして「感ずべき心」を持ってゐるでせうか。「感ずべきこと」に當つても、素直に心を動かさうとはせず、自分で自分の心に壁をつくつて、あらゆる対象から目を遠ざけてしまつてゐるのではないでせうか。

それでは、かうした鋭敏な心の働きを取り戻すには、どうしたら良いのでせう。まづ少しでも心に何かを感じることがあつた時には、それを直ちに書き留める、つまり言葉にして残すことが大切です。さうした努力を積み重ねてゐるうちに、自然に言葉が整へられてくる。自分の感動が率直に言葉に表現できるやうになる。さうすると物事をありのままに直視する力も自然に備つてくるのです。私達の祖先は、遠い昔から、このやうに日々の生活体験の折々を歌に詠み込むことによつて、その情操を鍛へ合ひ、情感の世界を繰り広げてきたのです。

もちろん、実際に、自分の心に感じたことを五七五七七の定型に整へてゆく過程は、さう易しいことはありません。

創らむと心尽くせど己が思ひの歌にならずて心せかるる

この歌は、皆さんと同じやうに、以前、この合宿に参加した学生さんが詠んだ歌です。自分の思ひを言葉にしようと努めるけれども、なかなか適切な言葉が浮かんでこない。提出の時間も迫ってきてゐる。「心せかるる」とは、本当にその心境をうまく表現した言葉だと思ひます。皆さんもこれから、この学生さんと同じやうな体験をなさるのではないでせうか。（一寸注意しておきますが、この歌の最初に「創らむと」といふ表現がありますが、これは、あまり適切な言葉ではありません。歌は「詠む」といふのが、正しい表現だと思ひます。）

このやうに、私たちは自分の思ひを三十一文字に表現し得るまでには、厳しい言葉の取捨選択といふ過程を通らねばならない。しかしさうした過程を通して、皆さんは、今まで自覚しなかつた自分を発見することになるのです。皆さんはこれまで、自分の行ったことや自分の性格について反省されることは沢山あったにちがひない。しかし、自分の心に感じたことを真剣に見つめなほすといふ経験は、おそらくあまりなかつたのではないでせうか。例へば、旧知の友人に久し振りに会ったといふやうな大変嬉しいことがあつたとします。それを歌に詠んでみようと思ひ、言葉を連ねてみる。最後に「嬉しも」と書いてみたがどうもピンとこない。自分の

今の気持は、「嬉しも」といふ言葉では言ひ尽せないやうな気がする。もっと心の底から湧き上ってくるやうなものがある。しかし、それをうまく表現できない。自分は一体何に感動してゐるのであらうか。かうして、言葉を選んでゐるうちに自分の心の動きを克明に見つめてゆくことになるのです。このやうな体験を通して心と言葉が、本当に密接な関係にあるものだと感ぜざるやうになつて参ります。私達の祖先は歌を詠むことを「敷島の道」と呼んで参りました。敷島といふのは、大和即ち日本のことです。従つて「敷島の道」といふことになり、日本人が歩むべき道、歩んできた道といふ意味になりますが、この「敷島の道」といふ言葉は「歌の道」といふ意味でも使つてきたといふことは、私達の祖先が、日本人として生きてゆくことは、自己の心を磨く手だてとして、歌を詠むことと切りはなすことが出来ない、歌を詠むことはそれほど大切なことだといふことを端的に表はしてゐると思ひます。

先程述べましたやうに、歌を詠むことは、決して易しいことではありませんが、それでは、歌を詠むことは、いはゆる難解なこと——例へば哲学的な命題を解いてゆくこととか数学の難問の答を出すやうな——なのでせうか。明治天皇は歌の本質について、次のやうな御歌をお詠みになつてゐらっしゃいます。

おもふことうちつけにいふをさなこの言葉はやがて歌にぞありける（明治四十年）

「うちつけに」とは、率直に、ありのままにといふ意味、「やがて」は、そのままといふ意味でせう。思つてゐることをありのままに話す幼い子供の言葉は、そのまま歌にしても良い程に心打たれるものだといふ内容の御歌なのです。この御歌に窺ふことが出来るやうに、短歌創作のポイントは、決して技巧を凝らしたり、難解な言葉を連ねたりすることにあるのではなく、あくまで自分の思ひを、言葉は平易でも良いから、ありのままに表現することにあるのです。そのことを是非心に留めて戴きたいと思ひます。

短歌創作の留意点

(一) 体験に根ざした、切実な感動を詠むこと

盆すぎの午後のさ庭の朝顔のしほれし陰で梨をはみをり

この歌は、実は私が高校二年の時に詠んだ歌なのです。この合宿の四日目の午前中にご講義をして戴きます小柳陽太郎先生―私が高校の時、三年間担任をして戴きました―のお勧めで、

初めて歌を詠んでみたのです。当時、先生の御宅には、高校生が数人集まり、古典を輪読したり、歌の会をしたりしてをりました。そこに、私の歌を持参し、先生や友達に見て戴きました。この歌を詠むに当たっては、斎藤茂吉や島木赤彦の歌集を読み、私なりに、勉強したつもりでした。この歌もアララギ風に詠んだつもりで、内心まんざらでもなかったのです。ところが先生や友達の批評は、実に厳しいものでした。第一に、この歌の中心がどこにあるのかわからないといふこと、つまり何に感動してゐるのか、さっぱりわからないといふこと、第二に、説明的な言葉が多過ぎるといふことです。「盆すぎの」から「しほれし陰で」までは、確かにその場の状況です。それで結局この歌の主題は、何かといふと「梨をはみをり」つまり、梨を食べた」といふこと、それだけのことなのです。まさしく先生や友達の御指摘の通りでした。帰途につきながら、私は、思ひました。結局、本当に自分の心に切実な感動が無いのに、体裁の良い歌を出して、皆にいい歌だと賞めてもらいたいといふやうな余計な気持ばかりが、先走つてゐたのではなかったかと。「梨を食べた」等といふことは、歌にする程のことではありませぬ。学校や家庭生活の中でも、もっと自分にとって大切なこと、切実なことがあつたはずです。私は、自分の歌を詠む姿勢が、間違つてゐたと痛感致しました。

さて、この霧島の地で合宿があるのは、何年かぶりです。そこで、一つこの霧島にちな因んだ短歌を味はつてみたいと思ひます。それは、故寺尾博之さんの「霧島温泉にて」といふ題の歌で

す。寺尾博之さんは、旧制高知高等学校を経て、東京帝国大学農学部に進まれ、昭和十八年十二月二十一才で大学に籍を置いたまま学徒出陣なさった方なのです。学徒出陣を前にして、数人の友達とこの霧島温泉にやってこられて、心ゆくまで名残りを惜しまれました。寺尾さんはその折の経験を次のやうに詠まれたのでした。

霧島温泉にて

再びは見る日もあらしきりしまに友と眺むる月の影かな
ゆけむりの上に輝く月かげにうせにし友をしのぶ夜かな
再びはくる日もあらし霧島のいでゆに遊びし夜忘れめや
友どちと露天の風呂にひたりつつ木の間がくれの月を見るかな
友どちのねがほを見つつせせらぎの音聞きをればうづまく我が胸
つつがなくあれば今夜もともどもに遊びしものと友を恋ふかな
きりしまのいでゆの里に酒くみて語りし今宵とはに忘れじ

平明な言葉で詠まれてゐますが、一首一首に切実な思ひが込められてゐる歌だと思ひます。一首目の「再びは見る日もあらし」は、「再び会ふ日もないだらうといふ意味ですが、戦地に赴

くに当っての悲壮な決意を込めた言葉だと思ひます。又、上の句の悲壮な表現に比して、下の句は、本当に心のほぐれるやうな、安らかな表現です。ことに、「友と」といふ言葉は、何げない表現のやうですが、この言葉の中に数人の心知る友人達をいとはしむ気持が、深く込められてゐると思ひます。

二首目の「うせにし友」といふのは、亡くなった友といふ意味です。この時より前に、既に寺尾さんの友人の中には、戦争で亡くなった方がゐらっしゃったのでせう。湯煙の上に照り輝く月をじっと見てゐると、先きに亡くなった友のことが、無性に偲ばれてくるといふ、実に情感あふれる歌です。

三首目、「再びはくる日もあらず」といふ一首目と同じ悲壮な表現が繰り返されてゐます。かうして、友人達と、月と一緒に見ることは、二度とないだらう、作者の心の中には、友人らへの哀惜の念と戦地に赴く決意とが、重なり合ひながら、波のやうにおし寄せてきたのでせう。「忘れめや」といふのは、反語で、忘れようか、いや忘れまいといふ強い決意の表現です。かうして、心知る友人達と霧島の温泉に遊んだ夜のことを決して忘れまいと、寺尾さんは、心の中に、この一時の喜びを深くきざみつけようとしたのです。

四首目、「木の間がくれの月」とは、木陰に隠れたり見えたりしてゐる月といふ意味でせう。「露天の風呂」といふ表現と共に、実に具体的な表現で、情景が、ありありと浮んでくるやう

です。

五首目の「友どちのねがほを見つつ」といふ上の句の表現に注意して下さい。皆さんもこの合宿では、班の友達と一緒に寝泊りしてゐます。疲れて先に床に就いた友だちの横顔を見た時に、この合宿で初めて会った友だちなのに、不思議になつかしい気持が湧いてきて、本当に安らかに眠ってほしいなど、心がほぐれるやうな思ひをした方もいらっしやるでせう。寺尾さんも、傍で寝てゐる友の安らかな寝顔を見た時に、胸の底から、いひしれぬ愛惜の情が湧き上ってきたのでせう。「せせらぎの音聞きをればうづまく我が胸」と下の句へ続きます。せせらぎの音を聞いてゐると、自分の胸の中が渦まきやうであるといふ意味だと思ひます。この「うづまく」といふ切迫した表現に着目して下さい。この表現の中に、寺尾さんの激しい心の動きを感得することができません。学徒出陣で、戦地に赴く日を直前にひかへて、国の為に命を捧げようとの覚悟が、日に日に強くなつていく一方で、かうして本当に心を通はせ合つてゐる友人達と別れなくてはならないことが、悲しくてならない。この思ひを寺尾さんは、そのまましゃかりと胸の中に納めて、じっと見つめてゐらっしゃる。しかし、いつしかその二つの思ひが、抑へられなくなつて、胸の中をぐるぐると渦まき始める。かうした無量の思ひを「うづまく」といふ言葉に託されたのだと思ひます。「うづまく我が胸」と最後の言葉が、名詞で、いはゆる体言止めになつてゐます。体言止めは、安易に使ひますと、歌のしらべが壊れてしまひますの

で、余り使はない方が良いのですが、この場合は、作者の緊張した精神生活と、無量の情感がかういふ表現を取らしめたものと思はれ、むしろ力強く、丈高いしらべとなつてゐると思ひます。

六首目の「つつがなくあれば」といふのは、元気でゐるならばといふことで、戦争で亡くなったり、或いは病に臥して来られない友人達のことを思はれての言葉でせう。霧島の地に共に来た友人達のことのみならず、来られなかった友人達にまで、思ひをさせてゐらっしゃる寺尾さんの心の広さと友情の深さに皆さんも心を留めて戴きたいと思ひます。

最後の歌の「とはに」は永久にといふ意味、「忘れじ」の「じ」は、打消の意志を表はす助動詞で、忘れまいといふ意味になります。従つて、霧島の温泉の里に酒をくみ合ひ語り合つた今宵のひとときを永久に忘れまいといふことになります。友人達との厚い友情を胸にしつかりと刻みつけて戦地に赴かうとされる寺尾さんの凛々しい御姿が、浮かんでくるやうです。寺尾さんの歌を詠みますと、解り易い言葉ですが、切実な思ひが、実に卒直に表現されてゐて、その緊張したしらべが私達の胸に染み入るやうに伝はつて参ります。寺尾さんは、この歌を遺されて、その後海軍に入られ、そのまま終戦を迎へられました。終戦当時は、福岡の軍需管理部といふ所に勤務してをられました。しかしながら、軍人としての責務を痛感され、終戦の五日目（八月二十日未明）福岡市郊外の油山の中腹で上司の長島秀男中佐と共に、壮烈な割腹自刃

をされたのです。寺尾さんの歌にあふれる切実な思ひは、時の流れを超えて、私達の心を揺り動かさずにはおかないのです。

(二) 自分の感動を正確に表現すること

では、心に何か感じたことがあったとすれば、どのやうに表現していったら良いのかといふ話に移ることにします。初日の山田先生の御講義の中にも出て参りました、正岡子規の文章を讀んでみることにしませう。正岡子規は、明治三十一年、十回にわたって、『歌よみに与ふる書』といふ論文を発表し、当時の歌壇に対する痛烈な批判をしました。次に引用するのはその五番目に当る『五たび歌よみに与ふる書』といふ論文の中にある文章です。

「心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花

此躬恒の歌百人一首にあれば誰も口ずさみ候へども一文半文のねうちも無^{これなきだか}之駄歌に御座^{ござ}候。此歌は嘘の趣向なり、初霜が置いた位で白菊が見えなくなる氣遣^{きづかひ}無^な之候。(中略)

嘘を詠むなら全く無い事としてつものなき嘘を詠むべし、然らざれば有^{あり}の儘^{まま}に正直に詠むが宜^{よろ}しく候。」

この文章の初めにある歌は、凡河内躬恒おほしかうちのみつねといふ人の歌です。「心あてに」といふのは、あて推量にといふこと、従って、この辺だらうか、あの辺だらうかと推量しながら、折れるものならば折ってみようといふ意味になると思ひます。「初霜の置きまどはせる白菊の花」は、「初霜が降りて、どこにあるのか見分けがつかなくなってしまうた白菊の花よ」といふことでせう。しかし、どんなに霜が降りても白菊が見えなくなるなどといふことはありません。子規が、「嘘うその趣向なり」と断定してゐるやうに、この歌は事実を詠んだものではありませぬ。小倉百人一首の中に収められ、一般にも親しまれてゐるこの歌を子規は、駄歌と断定したのです。それはなぜか。この歌が、真実を正確に詠んだものではなく、ありもしないことが、もっともらしく詠まれてゐるからです。「嘘を詠むなら全く無い事とてつものなき嘘を詠むべし」。どうせ嘘を詠むなら、こんなござかしい嘘ではなく、とてつものない嘘を詠め、そうすれば、そこにはかへって健康な笑ひがありユーモアがある。しかし「然らざれば、有ありの儘ままに正直に詠むが宜よろしく候。」さうでなければ事実をありのままに正直に詠め、それが、歌を詠む際の基本的な態度だと子規は言ふのです。短歌には、御存知のやうに、様々な趣向や技巧がありますが、さうしたことは余り気にせずに、何よりも事実を正確に詠むこと、自分の気持ちを正直に詠むことを皆さんも心がけて戴きたいと思ひます。

③ 一首一文の原則——歌に詠む気持を一点に集中すること

次の歌は、皆さんと同じやうに、以前この合宿教室に参加した学生さんが、詠んだ歌です。

森の中せみの鳴く中汗をかき友と語りて坂を下りゆく

意味は、わかると思ひますが、一つの歌の中に様々な内容が詠み込まれてゐますので、何か漠然とした印象をもたれたことと思ひます。明日、班別で皆さんが詠まれた歌についてはお互ひに批評を行ふことになってゐますが、この歌についても、その時班別の相互批評で、いくつかの厳しい意見が出されました。私もその場にゐましたが、たとへば、「せみの鳴く中」と言へば、森の中であることが想像できるので、森の中せみの鳴く中」と同じやうな内容の表現を繰り返す必要はないのではないかと、「汗をかき」といふ言葉は敢へて入れなくてはならぬ程のことではない」といふやうな意見が出ました。要は、この歌の作者の目が、あちこちに行きすぎて、本当に何を詠みたいのか、焦点が定まらぬといふことなのです。その後、班員の皆で、この歌を直してゆきました。この歌の作者は、班の友達全員が、自分の歌に向つて、心を一つにして、適確な表現にしようと思つてくれる過程の中で、自分の性格とか生活態度が、正されてゆくやうな思ひを味はつたのではないでせうか。歌は、次のやうに直され

ました。

鳴きしきるせみの声聞き友どちと語らひながら坂を下りゆく

少しは良くなりましたが、焦点が「鳴きしきるせみの声聞き」と「友どちと語らひながら」と「坂を下りゆく」といふ三つにわかれて、まだ焦点が定まってるとは言へません。作者は、班員の努力に感謝しつつ、「もう一度その時の自分の気持ちを振り返って詠み直してみます。」と言ってくれました。この歌の場合は、「友と語りて」が、どうも主題のやうです。そこで、その点にもっとウェイトを置いて、「合宿で知り合ひし友とあふれくる思ひ語りつつ坂を下りゆく」とでも詠めば、内容が鮮明になってくると思ひます。短歌は、いくつもの素材を詠みこむのではなく、一つの主題を一つの文に表現する、つまり一首一文を原則とします。その為にはやはり気持を一点に集中することが肝要です。歌を詠むとなると、様々のことが、心の中を去来するものです。精神を集中して、自分の心に感じたことは何なのか、じっと見つめてみる必要があります。そして、詠みたいことが定まったら、一気に一つの文に表現してみることです。さうすれば、自然に歌の形に整へられ、歌の調べも出て参ります。

次の短歌は、明治天皇の御歌の数々の中でも、特に感銘深い御歌です。

さしのぼる朝日のごとくさはやかにもたまほしきは心なりけり
（明治四十一年）

「もたまほしきは」は、もちたいものといふ意味でせう。さはやかな心を持ちたいものだといふ御一念を見事に表現された御歌で、まさしく一首一文の好例と拝察致します。どうか皆さんも、声に出して、この御歌を拝誦してみて下さい。

四 字あまり・字足らずについて

短歌の形式は、もちろん五七五七七といふ形が原則となります。しかし、自分の思ひを表現してゆく時に、どうしても五七五七七といふ形にならないことがあります。何回も指を折って苦しむけれども、どうにもならない。さうした場合には、二通りのケースが考へられます。一つは、字あまりといふケースです。五七五七七の最後がどうしても七字にならず八字になってしまふといふやうな場合です。原則としては、やはり言葉を選ぶ努力を重ねて、七字にすべきなのですが、自分の思ひが七字ではどうしても言ひ尽せず、むしろ八字の言葉を使った方が、自分の気持ちに忠実であると判断した場合は、五七五七七の原則を破ることも許されます。その際には五七五七八とか五七五八八といふ形をとることになります。次の歌は、字あまりの良い

例です。鎌倉幕府の三代將軍で、悲劇の將軍と言はれる源実朝の歌集『金槐和歌集』の中に収められてゐる歌です。

ものいはぬよものけだものすらだにもあはれなるかなや親の子をおもふ

「よもの」は、四方よもの、世界中のといふ意味でせう。人間のやうに言葉を話せない、世界中の動物達でさへも、親は子を懸命に思つてゐるもので、その姿には、本心に心打たれるものだ。実朝は、おそらく、ある動物の親がその子に懸命に尽くしてゐる光景をまの当りに見たに違ひありません。その時の感動を「あはれなるかなや」といふ言葉で表現したのです。普通ならば「あはれなるかな」と七字で表現するところですが、実朝は、その表現ではもの足らず、感動の助詞「や」をつけて、八字としたのでせう。最後の「親の子をおもふ」も、八字ですが、ごく自然に歌はれてをります。飾り気がなく、素朴な表現ですが、実朝の心情が窺へる良い歌だと思ひます。

さて、もう一つは、字足らずといふケースです。これは、例へば、五七五七七ではなく、四七五七七になったり、五七五七六になったりする場合です。さうした歌は、実際に口に出して誦んでみるとよくわかりますが、五七五七七の中に一箇所でも字足らずの部分があると、全く

くづれてしまふのです。字足らずは、短歌の重要な要素である調べ（律动感と言つても良いでせう）を破壊することになりますので、出来るだけ避けたいがよいと思ひます。

(五) 連作短歌——具体的表現の爲に

先程、一首一文といふことを申しました。短歌の一首一首については、この一首一文の原則を守らなければならぬ訳ですが、様々な思ひを歌に詠みたい場合、或いは、歌の素材がたくさんある場合、時間の経過に従つて情景や自分の情感が変化してゆく場合等は、どうしたら良いのでせうか。さうした場合は、連作といふ形式をとれば良いのです。連作といふ形式をとることにより、様々な思ひが、一つ一つほぐされて、一首一首の歌がより具体的なものになってきます。それでは、連作の例をご紹介します。以下に掲げる連作は、先程も出て参りました正岡子規の作です。正岡子規は、連作といふ形式を身を以つて定着させた人でもありません。子規は、若くして脊髄カリエスといふ大変な重病にかかり、体中に穴があくといふ悲惨な状態にまで病状は悪化するのです。死去の前数年間は、一日中床に就いたままといふ状態でした。しかし、さうした中で、子規は実にはつらつとして、短歌革新といふ大事業を敢行してゆくのです。以下の歌は、「病床即事」といふ詞書ことばがきがついてをり、病没の年、明治三十五年の二年前に当る明治三十三年六月七日の夜に詠まれたものです。

病床即事

ほととぎす鳴くに首あげガラス戸の外とのも面を見ればよき月夜なり
ガラス戸の外そとに据ゑたる鳥籠のブリキの屋根に月うつる見ゆ
ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびけるみゆ
ガラス戸の外もの月夜をながむれどランプの影のうつりて見えず
紙を以てランプおほへばガラス戸の外そとの月夜のあきらけくみゆ
浅き夜の月影清み森をなす杉の木末こずみの高き低きみゆ
夜の床とこに寝ながら見ゆるガラス戸の外あきらかに月更け渡る
小庇こひさしにかくれて月の見えざるを一目を見んとゑざれど見えず
照る月の位置かはりけん鳥籠の屋根にうつりし影なくなりぬ
月照す上野の森を見つつあれば家ゆるがして汽車行きかへる

この子規の連作を読んで、皆さんどのやうに感じられましたか。一首一首の歌が実に正確に、具体的な表現で詠まれてゐることに気づきませう。たとへば、二首目の「鳥籠のブリキの屋根に」など、本当にこまやかで正確な表現だと思ひます。又、四首目は、ガラス戸の

外の月夜を見てゐるのだが、部屋の中に置いてあるランプの光がガラスにうつつてよく見えな
いといふ内容です。「ランプの影のうつりて見えず」といふ表現の適確さに驚くばかりです。
そして、次の歌では、「紙を以てランプをおほへば」と、子規の動作の一コマが、本当に克明
に表現される。又、八首目の歌は、さらに、迫真の表現となつてゐます。「一目を見んとゐざれ
ど見えず。」小庇にかくれて見えない月をせめて一目でもとゐざるやうにして体を動かしてみ
るが、それでも見えない。最後の歌は、本当に絶唱とでもいふべき歌です。月に照らされた上
野の森を見てゐると、時々夜のしじまを破るかのやうに、自分が寝てゐるこの家をゆるがせつ
つ、汽車が通つてゆく。情景が絵のやうに鮮明に浮んで参ります。子規は、おそらく自分の命
のさう長く長くないことを自覚してゐたでせう。しかし、そのことで、くじけるやうな精神の持主
ではなかつた。残された日々を力の限り生きんとしたのです。さすればこそ子規は、目にふれ
る、耳に聞こえるすべての事象に限りない思ひを寄せたのでした。ほととぎす、月、鳥籠、森、
汽車……私達が、さほど気にも留めない事象に、子規は、あらん限りの愛情を注いだのです。
「汽車行きかへる」といふ言葉は、実に余韻のある表現ですが、子規の無量の思ひが込められ
て、私達の心の奥底にまでしみ通るやうな気が致します。私達には、この連作のやうな、緊張
した、清澄なしらべをもった歌を詠むことなど、容易にできるものではありませんが、心に感
じたことを一つ一つ丹念に、正確に、思ひを込めて連作に詠んでゆけば、きっと良い歌が、生

まれるものと信じます。

これから、皆さん、いよいよ短歌創作に取り組む訳ですが、どうか自分の心に感じたことを飾らずに、卒直に表現することを心がけて、しっかり取り組んで戴きたいと思ひます。

やむを得ざるの誠

—吉田松陰を中心に—

福岡県立修猷館高校教諭

小

柳

陽

太

郎



東郷公園より大島を望む

やむにやまれぬおもひ

誠心そぞろにやまず

動処において本心を見る

至 楽

松陰における学問と人生

本居宣長と小林秀雄

やむにやまれぬおもひ

本日は「やむを得ざるの誠」といふ題にさせていたゞきましたが、このことばを口にしますと、すぐ思ひ出すのが、吉田松陰の

かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬやまとだましひ

といふ歌です。松陰は安政元年三月、下田の港でペリーの艦に乗りこまうとして失敗、自首して縛につき江戸に護送されますが、この歌は越えて四月二十四日、その時、郷里の萩にゐる兄、杉梅太郎にあてて書かれた手紙の中に記されてゐるのです。その手紙の中で松陰は、この度「海外に闖出ちん(許しを得ないで渡航すること)するの典を犯し」、捕へられるところとなつたが、それは「国の為に力を効いたさん」とする衷情より発したもので、世人がいかに謗らうとも「吾れに於て何ぞ傷まん」と申してをります。しかし、さうは言ひながらも「のりかた矩方(松陰)不幸にして復た父兄に見ゆるに由よしなし、不孝の罪何を以て謝せんや。敢へて書を上たてまつつて永訣を曰す。」と述べてゐるのです。自らの行動に悔はないものの、父母の心を傷ましめた不孝の罪を

謝し、ここに最後の別れを告げるといふのです。このあとにこの歌が出てくるのです。

「矩方向さきめんげうに面縛めんばくして（両手を後に縛られ）捕に就き、輿に坐して泉岳寺の前を過ぐ。義士（赤穂義士）の事を思ひ歌を作つて曰く

かくすればかくなるものとしりながらやむにやまれぬやまとだましひ」

日本人が昔から生きてきた道は、この「やむにやまれぬ」おもひから発したものであったとして、赤穂義士との間につながる自己の心境をこの歌に託したのです。このやうにすればこのやうになる、知的な判断からすればそれが失敗に終ることは目に見えてゐる。しかし敢へて自らを励まし、その困難な中にとびこむ以外に道はない。さういふ時が人生の中には必ずあるのだ。知的判断を拒絶して、心の奥底から湧き上ってくるおもひのまゝにこの身を委ねなければいけない時がある。そのやうな生き方を大切にしてきたのが日本古来の精神ではなかつたか。

一昨年、木内先生がその御講義の中で、日本固有の文明といふのは、古事記、万葉に見えるやうな心情をもつた民族だけが生み出す文明だとおっしゃいましたが、記紀万葉の精神とはまさしく、この知的判断を拒絶して、心の動きそのものに身を委ねる精神だと思ふ。そこには原因を考へ、結果を考へて躊躇する「心のたぢろぎ」といふやうなものは一切ない。ぐんぐん前に進んでゆく、さういふ躍動する精神が、長い間日本の民族の心を貫いて生きてきたと思ふのですが、それが松陰先生の歌に見事に表はされると思はれます。



そのやうな精神は松陰全集のいたるところに示されてゐますが、ここでは「講孟餘話」の一節をとりあげてみたいと思ひます。「講孟餘話」とは先程申し上げましたやうに江戸に送られた松陰は、その年の十月、郷里の萩の野山獄に入れられるのですが、そこで囚人を相手に孟子の講義を始める、その記録なのです。

（その間の事情については「日本への回帰・第十四集」に収められてゐる奥富さんの「境順なる者は怠り易く、境逆なる者は励み易し―獄中における吉田松陰―」をご参照下さい。）

誠心そぞろにやまず

次に引用するのはその「講孟餘話」、告子上篇の第四章の一節です。ここでは孟子の弟子告子が、孟子にむかつて仁とは何ぞや、義とは何ぞやといふ質問をなげかける。それに対して孟子が答へるのですが、松陰

先生は告子の質問に対して自分なりの解答を用意する。それが次の文なのです。

「凡そ人臣たる者未生みしょうの前より君恩に生長し、一衣一食より、一田一廬より、君恩に非ざるはなし。況んや其の重禄高位を世々にするをや」

一日一廬の廬とは庵のこと、粗末な家でせう。一衣一食、すべて君恩によってめぐまれないものはない。まして先祖のころから代々高禄を食み、高い位についてゐる者はなほさらのことであらう。

「身體髮膚、父母の賜ふ所といへども、父母、祖考（祖父）より皆君恩に生長する所なれば、頂いただきより踵きびすに至る迄、皆君の物に非ざるはなし」

かういふ文を読むとき特に注意していただきたいのは、松陰はそのことを単なる考へ方として身につけてゐたといふのではなく、そのことを身をもって感じてをられたといふことです。この日本では、万世一系の天皇さまをいたゞいて生きてきた。従って自分たちの遠い祖先をどこまで辿っていても、その祖先は天皇さまの臣下であった筈だ。さういふ君臣の間が有機的なつながりの中で長い歴史を生きてきた。それが日本の特質であるといふのが松陰の確信でした。従って、最初の「未生の前より君恩に生長し」といふのも単なる観念ではなく、日本の国柄に裏づけられた事実であるといふ、不動の信念から生れた言葉だと思ふのです。

「瞑目めいもくして此の身、根本の来由（よってきたるところ）を思へば、感激の心悠然として興り、

報効 (恩に感じて努力する) の心勃乎として生ず。」

従って

「一身を水火に投じ、鋒鏑ほうてきに嬰かかりなば、(敵の刀や弓矢に斃れることがあれば)、吾が責を塞ぐべきか、直諫極論面折めんせつ廷争ていさうせば、(面折は相手の目の前でその非を責めること、廷争も政治の中枢部にはいって、政治の誤りを正すこと)、吾が罪を免かるべきかと誠心坐そぞろに己むこと能はず。此れ即ち義なり、此れ即ち仁なり」

自分はたゞならぬ君恩に包まれて生きてゐる。その恩に報いるためにはどうすればいいのか、身を水火に投じ鋒鏑にかゝる―すなはちこの身を捨てる、我が身を犠牲にする、或ひは普通の人なら黙ってやりすごすところを、あへて進み出て政治の誤りを正すために全力をつくす、さういふ生き方以外に恩に報いる道はないのではなからうか。そのやうな「誠心」―切迫したおもひ―が「坐ろに己むこと能はず」―先程申しましたやうな、知的な判断では到底抑へやうもないほどに心の底から激しく溢れてくる。それが義であり、仁である。―松陰はさう断定するのです。告子と孟子のやりとりについては、孟子の本文を見ていたゞければわかりますが、仁とか義について随分観念的な議論がつゞきます。しかし松陰はそのやうな議論をすべて切り捨てて、「誠心坐ろに己むこと能はず」として、それを仁であり、義であると言ふのです。すなはち仁や義は「君恩に報いなければならぬ」義務心ではなく、「君恩に報いぬいではを

「誠心だと言ふのです。」

さらに松陰は次のやうな話をつけ加へる。

「吾が友人某なる者、膽氣（ものごと）に恐れぬ勇氣ありて酒を使ふ（飲む）。」
ところがその男が

「曾て江戸に在り一酒樓に大会痛飲し、慷慨の餘、大いに酩す。」

皆を集めて痛飲し、世を憤り歎いてゐるうち、すっかり酔ってわからなくなつてしまつた。酩とは酒びたりになつて我を失ふことです。その時、この友人には一人の召使がついてゐたのですが、

「其の僕、年七十餘の老翁にて、某（その友人）の未だ生れざるより己に家に僕たる者なりしが、痛哭して云はく、吾が主公、平日彼れが如く狂暴ならず、唯だ酒のみ崇（た）をなすとて、悲感坐を動かせしことあり。余今に至りて之を忘るゝこと能はず。」

私の主人は決して狂暴な人物ではない。たゞ酒のためにこのやうになつたのだと言つて声を放つて泣いたといふのです。一座の人はその老翁のまごころにはげしく心うたれた。自分はその折の情景を未だに忘れることが出来ないといふ。そのあとで松陰は

「是れ我が皇国人固有の忠義にて、古より忠臣義士の心是れに過ぎず」といふのです。さらに

「老僕の主人を憂ふるは、即ち其の子を親愛するに異なることなし。是れ仁なり。」
仁とはその老僕が我が子のごとく主人の姿を憂へたその心そのものを言ふのだ。

「只だ主人なれば痛哭するのみにして、其の子を呵叱かしつぱり罵詈する如くなることを得ず、是れ義たる所以なり」

人はこのやうに溢れる心のまゝに動くべきだとはいへ、その行動には人間としての道筋があり、節度がなければならぬ。従つて、老僕ははげしく泣くだけで、主人を叱りつけたりはしなかつた。それが義といふものであらう。

だがそれは日本にのみ許されることであつて、中国では必ずしもさうはならないと松陰は言ひます。

「支那人は然らず。君臣は義を以て会ふと云ひて、道会へば服従し、不可なれば則ち已む。三諫して聴かざれば其の国を去る」

何故そのやうになつたのか。それは、日本と中国とは君臣の関係が本質的に違ふからだ。先程も申しましたやうに、日本では君臣のつながりは悠久の古にさかのぼる。従つてそこには肉親の情としか言ひやうのない情感のつながりがある。その情感が日本人のものの考への一番奥底にあるために、あらゆる人間関係が肉親の情でつながってゆくのだと言はれるのです。

勿論中国の場合でも君臣の間に、非常に心細やかな交りを結んだ人は沢山ゐた。松陰もその

ことは充分承知してゐたし、さういふ意味で数多くの中国の先人を師と仰いでをられた。しかし中国の場合、それがどんなにすばらしくとも、結局は「部分」に終るといふのです。その場その場では心打たれる感動的な場面も数多くあるけれども、その忠義を尽した国は長く続くことなく、革命によって次々に滅びてしまふ。すなはち、歴史そのものが中断されてしまふために、日本のやうに一貫して心が伝へられることなく、いはゞ真心が末通るといふ経験をもつことが出来ないのです。そこに中国と日本の国柄のちがひがある。さういふ意味からしても、やむにやまれぬ情愛の発露の中に、人間関係を見てゆかうとされる松陰先生の人生観は、この日本の国柄と分ちがたくつながつてゐるのです。

動処において本心を見る

同じ「告子上」からもう一つ、その第八章を引用しておきませう。ここでは人々は自らの性を正しく養ふためには、平旦の氣——夜明け方の清らかな氣分を大切にしなければならぬといふことが記されてゐますが、このことについて松陰は次のやうに述べるのです。

「凡そ浩然の氣を養はんとならば、先づ平旦の氣の清明にして、未だ外物の欲を交へざる所を基本として漸々（次第に）長養すべし。何となればさわ噪ぐ時はみだ氣擾れて昏濁する故、静にして

清明なる所を養ふべしとなり。後儒（後世の儒者達）静坐等の工夫も是れ等の処に原もとづき、外物に蔽はれざる所の本心を認め出し、長養せんとなり。」

浩然の気を養ふためには、清明にして外物の欲を交へない、すがすがしい夜明の気持を基本にして養ひ育てなければならぬ。後世の儒学者達、特に宋時代の朱子を中心にした学者たちが、静坐をして心を静め、心を整へるといふことを重んじたのも、このやうな考へに基づいて、外物に蔽はれない本心を育てようとしたのである——それはたしかに大切なことだらうと思ふ。しかし

「余別に又一説あり」

自分にはもう一つ別の考へがある、といはれるのです。それは

「静処に於て本心を認むる固もとより善し。又動処に於て本心を認むる、更に善し」

といふのです。静かなところに人間の本心があるといふとらへ方は決して悪いことではなからう。しかし、逆に動いてゐるところにこそ本心がある。そのやうな見方が自分にはさらさらばらしいことだと思はれる。

「或は書を読みて意中の人に遇ひ、意中の事を見るか、同志の人を会し、劇談豪論するか、或は風雪を冒し山野を跋涉するの類、都すべて吾が心氣力を発動せしめたる後は、必ず浩浩勃勃々、勇往銳進の勢禦ふせぐべからざるものあり。」

書物の中で意中の人とめぐりあひ、又は我が意を得たりといふ事柄にぶつかつて胸おどるやうな経験をするか、或は同志の人々を集めてはげしく議論をたゝかはせ、或は吹きまくる風雪の中、山野を歩きまはるなどといふやうに、自分の心中にひそむ氣力を十二分に動かすことが出来たあとは、必ず、浩々勃々、自分のめざすところに全力をもつて突き進んでゆく勢は、到底とゞめることが出来ないやうなものがあるはずだ。そのゆれ動きやまぬ心の中にこそ人間の本心はある。——このあたりの松陰の文章そのものがまさしく「浩々勃々、勇往銳進の勢禦ぐべからざるもの」がある。文章の内容と文章の調べが見事に一致してゐる。このやうなものこそ、本当に生きた文章といへるのではないでせうか。

ともあれ松陰にとつては人の本心といふのは、人の心と心がふれあふところ、はげしく火花が散るところにあった。そこに松陰の思想の核心があると思はれてなりません。

昨日皆さんは歌を詠まれたけれども、短歌導入講義の中で青山君もいはれたやうに、歌を詠むときには自分の心と向きあはなければならぬ。だが心は常に動いてゐる。その心を概念的に整理してゆくのではなく、揺れ動く、それを言葉として表現するのが短歌の創作なのです。いはゞ心の波長と言葉の波長がびつたり合った時に歌ひはらしたといふ、解脱感ともいふべき喜びを感じることが出来るのです。さう考へてみると、短歌の創作とはまさしく「動処に於て本心を認むる」工夫そのものではないか。日本人は昔から短歌創作の道を「しきしまのみち」

として大切にしてみました。そのことと松陰の人生観が符節を合せるやうな趣があるのは、本当にすばらしいことだと思ふのです。

至 楽

同じやうなことです。孟子尽心下の第六章について松陰が書き記した個所を読んでみませう。その孟子の本文では、古の聖王舜帝のことをとりあげ、舜は実に偉大であった。彼はひどい貧困の中に身をおいてゐたときも、そのあと帝位についたときも、何一つ環境に左右されることなく悠然とした生き方を貫くことが出来たといつて、絶賛してゐるのです。

このことについて松陰は次のやうに言ふのです。

「朱註に云はく、聖人の心は貧賤を以て外に慕ふことあらず、富貴を以て中に動くことあらず、遇ふに随ひて安く、己れに預ることなし。性とする所の分定まるが故なりと」

朱註とは先に申しました宋時代の朱子、その朱子が孟子に加へた註のことです。その中で朱子は聖人の心は貧賤であつても外に求めることなく、富貴であつてもそれによつて心が動揺することはない。どのやうな境遇にあつても心安らかに、自分といふことにこだはることなく生きてゆく。それは自分の本性は何かといふことをしっかりと見定めて生きてゐるからだ。――

といふのです。ほゞ孟子の言はんとするところを忠実に解説したといふべきでせう。

しかしこゝでも松陰は独自の見解を述べるのです。

「貧賤にても慕はず、富貴にても動かさずといふは枯禪に似たり。余は則ち謂ふ、舜は一種の至樂あり。故に貧賤にても慕ふに違いとまあらず、富貴にても動くに違いとまあらずと云ふべし」

朱子のいふ、貧賤にも富貴にも心が動くことがないといふのは、一寸見たところいいやうだが、実は枯禪——禪の本来の精神を失つて、たゞ上っ面だけ悟りすましたやうな禪の坊さんのポーズをいふのでせう——その枯禪のやうなものだ。そこには生きた人間の心はない。自分は舜の心はそれとは違ふと思ふ。舜がどのやうな場合にも心を動かさなかつたのは、舜には「一種の至樂」があつたからではないか。非常に深い楽しみ、人間としての道をふんでゆく限りない喜び、それが心中深くたゞへられてゐたからこそ外界の変化に心が動かかなかつたのではなからうか。動かないといふのは動くまいとしたのではなく、動くひまがなかつたのだと松陰はいふのです。

人間であれば貧賤をいとひ、富貴を慕ふのは当然でせう。そのやうな人情の自然にそむく行為を松陰は認めようとはしなかつた。舜もまたそのやうな人情を否定したのではない。たゞそんなことに心を動かされるよりも、もっと大きな、もっとすばらしい楽しみを舜は知つてゐた。だから「貧賤にても慕はず、富貴にても動かさず」といふ結果になつたのだといふのです。

このやうな着眼は実にすばらしいと思ふ。しかし、人々はおほむね朱子のやうな見方しかないものです。例へば論語の中に、孔子が「粗食をくらひ、人と飲み、肘をまげて之を枕にす。楽しみその中にあり」といふ有名な言葉がありますが、この場合も粗衣粗食に甘んじた孔子は、われわれ凡俗とは違ふといふ見方しかしい。しかし孔子もちゃんと「楽しみその中にあり」と言つてゐるのです。その楽しみがあればこそ、粗衣粗食も気にならないのでせう。松陰の言葉は、まさしくこの孔子の「楽しみ」に通ふのです。

松陰における学問と人生

以上講孟餘話の言葉を通して、内からつき動かしてくるやむにやまれぬ人の心を、松陰先生がいかに大切にされたかを見てまゐりましたが、さういふ躍動するおもひで歴史にふれたとき松陰の目に歴史がどのやうなものとして映つたか、門下生の天野御民といふ人は、そのことを次のやうなことで書き残してゐます。天野御民が松下村塾に学んだのは十七歳、当時松陰先生二十八歳のころのことです。

「天野御民曰く、先生門人に書を授くるに至り、忠臣孝子身を節に殉ずる等の事に至る時は、満眼涙を含み聲を顫はし、甚しきは熱涙點々書に滴るに至る。是を以て門人も亦自ら感

動して流涕するに至る。又逆臣君を窘くろしますが如きに至れば、目眦もくし裂け、聲大にして怒髪逆立するものの如し。弟子亦自ら之を惡むの情を発す。」(松下村塾零話)

松下村塾に漲つてゐた熱氣とでもいふべきものが、鮮やかに蘇つてくるやうな文章です。いのちあるものがいのちあるものにふれるといふことはかういふことなのか。躍動する生命と申しますが、それもこのやうな言葉の一つ一つをたどってはじめて理解出来るものだと思ふのです。

松陰先生にとって学問といふのは、このやうにすぐれた先人と遇ふ喜びを心の中にたしかめることであり、教育とは、そのあふれるやうなよろこびを人々に伝へるいとなみであった。さう思へば現在これだけ学校の数も多く教育が盛んだといふけれども、本当に学問をする場所、教育の行はれてゐる場所は一体どれほどあるのだらうかと思はれてならないのです。

これと関連してもう一つ御紹介しておきたいことがあります。それは一番最初に申し上げました、下田踏海が失敗して下田の牢に入れられた折のことです。以下「幽囚録」といふ先生の文章によれば次の通りです。

その時先生は金子重輔と二人、獄に入るのですが、獄は只一畳敷、その一枚の畳の上に二人が膝を交へてすはるのです。「頗る其の狭きに苦しむ」と書いてありますが本当にさうだったでせう。ところがその狭く苦しい中で先生は、番人に借りて、三河風土記、真田三代記などを

読むのです。さらに「皇国の皇国たる所以、人倫の人倫たる所以、夷狄の忌むべき所以を日夜称説す」る。日本の国の国柄のすばらしさ、人間の人間たる所以、日本を侵略しようとする外国の動き、そのやうなことを朝に夕に高い声で獄の番人に説くのです。かくて番人も松陰のげしい心に動かされる。松陰は「獄奴蠢爾しゅんじといへども、また人心あるもの、涙を揮って吾が輩の志を悲しまざるはなし」と書き記してゐます。獄の番人は身分の低いつまらぬ男ではあつても、人間としての心情を失つてゐない証拠には、誰もがみな涙を流して自分の志を悲しんでくれたといふのです。僅かに一枚の畳、その畳の上で牢の外の番人にむかつて人として生きるべき道を説く、これはもう教育などといふ甘つたるいものではない。己れの中に迸るものを周囲の人に訴へないではをられない、生命の活動そのものだといふ他はないのです。

松陰はさらに護送されて三島の宿に赴くのですが、ここでも「番人ら寝ずの番をなす故に、またために大道を説き聞かすること下田の獄にある時の如くにして、更に快したたなり」と認め、さらに「余、生来の愉快この時に過ぐるはなし」と書き記してゐるのです。

松陰の面目、まさに躍如たるものがありますが、たゞ注意していたゞきたいことは、このやうな個所を読んで、松陰といふ人は大変な情熱家だったのだなといふやうな言葉で片付けてはいけないといふことです。たしかに松陰は激しい情熱家であつた。たゞその情熱は、松陰といふ一個人の性格として現はれたものではなく、最初にお話しましたやうに、記紀万葉以来、民

族の心に脈々として伝へられてきたものであったといふことが大切なのです。さらに講孟餘話に見られるやうにその情熱が古典に接したとき、すぐれた学問の世界を開く原動力になり得たこと、さらに言ふならば、そこに開かれた学問の力が、逆に進るやうな松陰の情熱を支へてゐたことに特に注目していたゞきたいのです。学問と人生が見事に一致した姿を、私達は松陰の短い生涯の中に見ることが出来る。それが松陰といふ人物を理解するポイントだと思はれます。

本居宣長と小林秀雄

最後に揺れやまぬ心を大切にしてきた日本の文化伝統の中から、本居宣長のうたと、その歌について書かれた小林秀雄氏の文を引用しておきませう。

宣長の歌は「玉梓百首」といふ歌の中の二首です。

事しあれば　うれしかなしと　時々　うごくころぞ　人のまごころ
うごくこそ　人の真心　うごかずと　いひてほこらふ　人は岩木か

何か事があれば、或はうれしい、或はかなしいとその折その折に動くのが人のまごころといふものであって、もし、いかなることにも心が動くことなく、しかもそれを誇るがごときことあらば、その心は岩木といふべきか。到底人間の心とは思はれぬといふことでせう。これはま

さしく松陰先生の「貧賤にても慕はず、富貴にても動かずといふは枯禪に似たり」といふことばと全く同じでせう。宣長のうたの「いひて誇らふ」といふところは、源氏物語玉の小櫛の中で「すべての人の心といふものは、からぶみに書けるごと、一かたにつきぎりなるものにあらず。深く思ひしめる事にあたりては、とやかくやと、くだくだしくめ、しくみだれあひて、さだまりがたく、さまざまのくま多かる物」だと述べてゐるところからしても、中国思想、所謂「からごころ」に対する批判がその中心をなしてゐるのでせう。そのやうな中国の考へ方に対して、日本思想、すなはち「やまとごころ」の性格を一言にしていふならば「時々うごく人のまごころ」を限りなく大切にしてきたことだ、宣長はさう言つてゐるのです。

さらに小林秀雄先生は、その著「本居宣長」の中で宣長の歌にふれながら、次のやうに記してをられます。

「人の有るが儘の心は、まことに脆弱なものであるといふ、疑ひやうのない事実の、しっかりした容認のないところに、正しい生活も正しい学問も成り立たぬといふ彼の固い信念、そこに大事がある。『うごくところぞ人のまごころ』と歌はれてゐるところは、動かなければ、心は心である事を止める、動かぬ心は『死物』であるといふ、きっぱりとした意味合なので、世に聖人と言はれてゐる人が、いかに巧みに『不動心』を説いてみせても、当人の『自慢ノ作り事』を出られないのは、死物を以て、生物を解かうとする、或は解けるとする無理から来る」

自慢とは現在使ふ意味とは違って、ほしいまゝにおごりたがぶって行ふ、自分勝手にやるといふことです。「不動心」とは孟子に出てくる言葉なので、ここにも孟子を中心にした中国思想に対する批判が見られます。

「自分（宣長）の学問では、死物は扱はない。扱ふものは、人の生きた心だけである。従つて、学問の努力の中心部では、生きた心が生きた心に直かに触れて、これを知るといふことしか起らない。其処に、『学びやうの法』について、『一人わたりの理』を説くことを嫌つた宣長の秘められた真の理由があつた、と言つていいだらう」

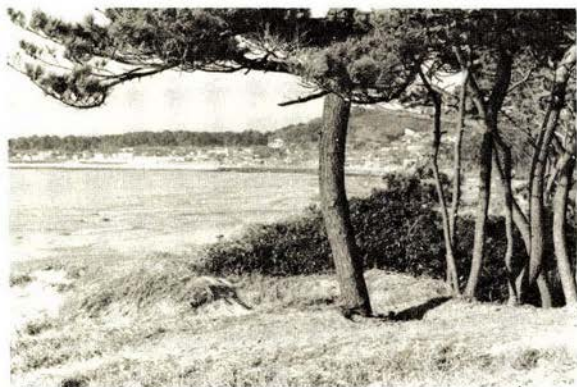
「学問の努力の中心部では、生きた心が生きた心に直かに触れて、これを知るといふことしか起らない」といふことばは大切です。勿論学問の末端部ではさまざま分析的なことも必要でせう。しかし学問の中心部はさうであつては困る。現代の学問の世界では、末端の部分では実にすばらしい業績が産み出されてゐる。しかし最後の「ここ」といふところには行かない。行かないといふよりも、その一番大切なところ、「生きた心が生きた心に直かに触れる」といふところを学問の対象から外してしまつてゐるやうに思ふのです。心が心にふれる世界、すでにそこは主観の世界ではないか、それは各人が自分の心で味はへばいい。さういふのです。それが現在、日本の大学で行はれてゐる学問のすがたです。かうして細かな研究は積み上げられてゆくけれど、実はいよいよこゝから学問の中心部にはいるといふ、その手前でストップして

しまつてゐる。何故さういふことになつたのか、それは大きく言へば西洋で発達してきた科学を学問そのものだと思ひこんだための誤りだと思ふ。科学は決して学問とイコールではない。本當の学問には西洋の近代科学では蔽ひつくせない、もっと深い世界がある。その世界を蘇らせ、その生き生きとした学問の世界の中で、本居宣長や吉田松陰に見られるやうな、躍動する精神を学んでゆかなければいけない。それは現代の日本に生きる、特に若い方々に与へられた大切な使命だと思ひます。

“畏敬のこころ”を
身につけずんば
日本国民にあらず

国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授

小田村 寅二郎



宗像海岸・その1

は じ め に

大日本帝国憲法の三つの前文に見る明治天皇の大御心

吉田松陰先生の最期

今次大戦に命ささげた青年の心

は
じ
め
に

今日は「畏敬のころを身につけずんば日本国民にあらず」といふ大変きびしい題をつけさせていたゞきました。「畏敬のころ」とはいふまでもなく畏れ敬ひかしくむ心といふ意味ですが、かういふ心は聖徳太子のお言葉を借りますと「共に是れ凡夫のみ」といふ、自己を非常に欠点のある人間として自覚しなければ生れてこないものです。しかしこのことについては、あとでいろいろお話いたしますが、大切なことはそのあとの「身につけずんば」、それを身につけなければといふところだといふことを心にとめておいて下さい。すなはち現代の学校ではこの畏敬のころについては全く教へようとはしない。しかし子供たちは聡明ですから、教へられなくても、敬ふべきものがあることについては、一応頭では理解してゐるでせう。しかしそれを身につけることは、それを全く欠落してしまつてゐる。そのために、子供たちを日本国民として育てるといふことは全く行はれてゐないといつても過言ではないと思ふのです。

例へば天皇さまのことについて考へる場合も、歴代の天皇方はすばらしい御歌を残してをられるし、立派なお方だといふことはよくわかる。しかしそれがわかつて、そのことと天皇制の問題はちがふと考へるのです。天皇さまのお歌を通して「畏敬のころ」が「身につけて」

をれば、そこに自ら天皇に対する考へもとゝのへられてくるはずですが、さうではなく、頭だけで考へてしまふために、天皇制といふ、ピラミッドの頂点に天皇が主権者として立ってゐるやうな制度よりも、一人一人が共通な国の主権を分担してゐる、さういふデモクラシーの方がいいといふやうに考へてしまふのです。すなはち、天皇を中心にしてこれ迄続いてきた政治と、デモクラシーといふ制度の中で運用されてきた政治と、それぞれの具体的内容を比較しようとはしないで、人々はたゞ両者の概念規定だけをもてあそんでゐるのです。私にはそれは天皇に対する畏敬の心が、たとへ頭では一応理解されてゐても、身についてゐないために生じる思想的な混乱だと思はれてならないのです。

大日本帝国憲法の三つの前文に見る明治天皇の大御心

ではこれから「畏敬の心」をもって生きてきた先人の姿を、いくつか仰ぎながらお話をすゝめていませう。その第一に明治天皇のことについてお話ししておきたいと思ひます。皆さんは明治天皇といへば、単に国民の上に君臨した姿しか教はってゐないと思ひますが、天皇は国民の誰よりも「畏敬の心」をもって生きてこられた方なのです。ここでは、明治二十二年二月十一日、帝国憲法が発布されたとき、明治天皇さまは三つの文章を前文としてお書きになった、



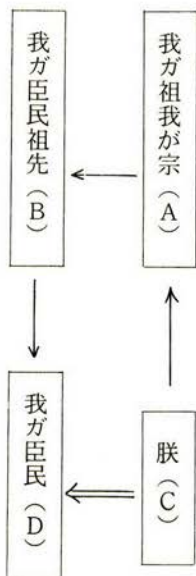
その文章を読みながら、天皇さまがどういふ御気持で憲法を發布されたかをお偲びしたいと思ひます。その一つは「大日本帝国憲法発布の勅語」、今度このやうな憲法が作られたので、国民よ、皆ともにこれを履行しようではないかといふお呼びかけのお言葉です。

「(前略) 惟^{オモ}フニ、我が祖、我が宗(A)ハ、我が臣民祖先(B)ノ協力輔翼ニ倚^ヨリ、我が帝国ヲ^{チノ}肇^{ウツ}造^ツシ^①、以テ無窮ニ垂レタリ^②、此レ我が神聖ナル祖宗(A)ノ威徳ト、並ニ臣民(B)ノ忠実勇武ニシテ、国ヲ愛シ公ニ殉^シヒ、以テ此ノ光輝アル国史ノ成跡ヲ^{セイセキ}暗シタルナリ。朕(C)、我が臣民(D)ハ、即チ祖宗(A)ノ忠良ナル臣民(B)ノ子孫(D)ナルヲ回想シ……(後略)」

「惟フニ」とはつらつら思ふに、といふことでせう。

「我が祖、我が宗」の祖とは皇祖、即ち今日に至るまでのすべての御先祖のこと、それを(A)と名付けます。「臣民祖先」とは臣民、すなはち今生きてゐる国民の祖先、それを(B)とします。その祖先達の「協力輔翼」によって、「我が帝国ヲ肇造シ」、我が大日本帝国をはじめてお造りになり、「以テ無窮ニ垂レタリ」、爾來何千年といふ月日が経過して今日に至った。「此レ我が神聖ナル祖宗(A)ノ威徳ト、並ニ臣民ノ忠実勇武ニシテ」、臣民は今の臣民ではなくその時々々の臣民ですから(B)、その臣民が「忠実勇武ニシテ、国ヲ愛シ公ニ殉ヒ」、殉ふといふのはこの字から推して、国のためには命を捨てることも惜しまなかつたといふことでせう。「以テ此ノ光輝アル国史ノ成跡ヲ貽シタルナリ」——ここまでお読みになれば、日本の国が今日あるのは、天皇のご祖先の御威徳もさることながら、それを助けてきた日本国民の力であるといふニュアンスがはるかに強く出てゐることにお気づきでせう。

そこで「朕」、すなはち自分は(これをCと名付けます)、「我が臣民ハ」これは今の臣民ですから(D)とします。その臣民は、「即チ祖宗(A)ノ忠良ナル臣民(B)ノ子孫ナルヲ回想シ……」、と続くのです。その関係を端的に申しますと、C(朕)がD(臣民)を見るのに、このDは自分の祖先のAの時に忠良な臣民であったBの子孫であることを回想し、といふことになります。図で描けば次のやうになります。



CがDを考へる際に、まずAを考へ、Aに協力してくれたBのすばらしい努力を考へ、そのBの子孫が今自分の前にゐるDであるとおっしゃってゐるのです。そのやうな天皇の御心の働きを偲んでいたゞきたいと思ふのです。

次に「大日本帝国憲法発布の上諭」、「上諭」といふのは天皇さまが国民におさとしになる意味で、勅語と同じですが、勅語をさらに補足するといふ意味があるやうです。その中にも同じことが出てゐます。

「朕（C）ガ親愛スル所ノ臣民（D）ハ、即チ朕ガ祖宗（A）ノ惠撫慈養シタマヒシ所ノ臣民（B及びD）ナルヲ念ヒ……」

ここにも自分が親愛する国民は、天皇さまの御祖先が心をこめて大事にされた臣民の子孫であることを念ふとおっしゃってゐる。しかもここに使はれてゐる「念」は念佛の念、精神を集めて思ふといふ気持がこめられてゐるのです。或る人が現実に自分を律してゆく時に、目に見えない大勢の人が自分に寄せてくれる陰の力を偲ぶことが出来るなら、誰しもさういふ心の働きはすばらしいと思ふでせう。さういふ人間のごく普通の倫理からしても、この天皇さまのお心は本当にありがたいと思ふ。そこには一般に帝国憲法について言はれてゐる、自分勝手に憲法をおしつけてゆくやうなセンスは全く見られないことに気づいていたゞきたいのです。たしかにこの憲法は国会で審議して、国民の総意を結集したといふ普通のデモクラシーの形はとつてゐない。それで押しつけだといふ人がゐるけれども、この文章が示してゐるところは、日本の国に生き続けてきた無数の国民の存在を心に浮べ、その気持を集約しながら、これならこれら無数の過去の人々が賛成してくれるに違ひないといふ確信なのです。

最後に「大日本帝国憲法及び皇室典範制定の御告文」オツゲブミを読んでみませう。

「皇スメラフ朕レ謹ミ畏ミ、

皇祖

皇宗ノ神靈ニ誥ゲ白サク。皇朕レ天壤無窮ノ宏謨ニ循ヒ、惟神ノ宝祚ヲ承継シ…（略）
自分は今、古の御祖先が天地とともに窮りなからむと仰せられた、この日本の国の広やかにして大いなるはかりごとに従ひ、神代からつゞいてきた天皇の位を受けついでる。

「皇祖

皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ、典憲ヲ成立シ、條章ヲ昭示シ、」

典憲とは皇室典範と憲法、その二つの基本的な法を成立せしめ、その各条の文章を整へ、

「内ハ以テ子孫ノ率由スル所ト為シ、外ハ以テ臣民翼賛ノ道ヲ広メ、永遠ニ遵行セシメ、」

「子孫ノ率由スル」とは、天皇さまの御子孫がよるべきところ、それを明らかにし、「外」

とは国民の方です。その国民が天皇の政治をお助けする道を広め、それを永遠に続かせようとし、

「益々国家ノ丕基ヲ鞏固ニシ、八州民生ノ慶福ヲ増進スヘン。茲ニ皇室典範及ビ憲法ヲ制定ス。」

丕基とは、大いなる基といふことです。

「惟フニ此レ皆

皇祖

皇宗ノ後裔ニ貽シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナラズ」

「洪範ヲ紹述ス」とは、ひろやかなお示しをうけつぐといふことです。

「而シテ朕ガ躬ニ逮デ、時ト俱ニ舉行スルコトヲ得ルハ」

かういふ成文法として実行することが出来るのは

「洵ニ

皇祖

皇宗及我ガ

皇考ニ倚藉スルニ由ラザルハナシ」

皇考とは天皇の御父様、孝明天皇さまのこと、天照大神以下、孝明天皇に至る歴代の天皇方の御霊の協力によらないものはない。それで

「皇朕レ仰デ

皇祖及

皇考ノ神佑ヲ禱リ、併セテ朕ガ現在及将来ニ、臣民ニ率先シ、此ノ憲章ヲ履行シテ愆ヲザラムコト誓フ。庶幾クハ

神靈此レヲ鑒ミタマヘ。」

明治天皇はたゞひたすら、神佑——神々の助けを祈ってをられるのです。自分とさらに自分

の子孫がこの憲法を国民に率先して必ず守りますから、どうかご祖先のみ霊よ、お守り下さいませと、たゞ祈ってをられる。国民にこのやうにしなさいといふやうなことはどこにもない。その畏敬に満ちた天皇さまの御心が政治の中心にある。それが日本の政治のすがたなのです。

このことは憲法に限らず、五箇條の御誓文の場合も全く同じなのです。御誓文といふのを、天皇が国民に誓ったなどと考へてゐる人が多いやうですが、とんでもないことで、御誓文のあの御言葉にある通り、天皇さまが、天地神明にお誓ひになつたのです。

以上述べてきた天皇さまの御心はまことに貴重な、長い人類の帝王の歴史にも全く類を見ないお言葉ではないでせうか。現在憲法改正についていろいろ議論がありますが、帝国憲法といふのがこのやうに深々とした畏敬の御心の中に生み出されてきたといふこと、それは世界にも比類ない文化価値を含んだものであるといふことだけは忘れないでいたゞきたいと思ふのです。

吉田松陰先生の最期

次に、吉田松陰先生が処刑された最後の日の様子について御話いたしませう。

先生最後の日、その日は安政六年（一八五九）、十月二十七日、先生三十才の齡でした。その日、早朝、処刑の呼び出しの聲がかゝるや、先生は懐紙をとり出して一首の歌を記します。

此程に思ひ定めし出立をけふきくこそ嬉しかりける

思ひ定めた死であればこそ、むしろ処刑への呼び出しは先生にとって嬉しくさへあったのでせう。それからゆっくり朝食をとって、午前九時ごろ獄吏につれられて評定所に赴かれます。その時、前日の夕刻に書きあげられた「留魂録」、その一番最初に記された歌、

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂

その歌を朗々と誦しながら評定所に行かれたと記録されてゐます。評定所における先生の挙措については、当日、長州藩を代表して判決に立会った小幡彦七が次のやうに書き記してゐます。

「奉行等幕府の役人は正面の上段に列坐、小幡は下段右脇横向に坐す。やゝあつて松陰は潜戸から獄卒に導かれて入り、定め席に就き、一揖（一礼）して列坐の人々を見廻す。」その時

の松陰の姿は「鬚髮蓬々」、鬚も髪もぼうぼうとして「眼光炯々として別人の如く一種の凄味あり。」といふ有様でした。そのあと「直ちに死罪申渡しの文読み聞かせあり、『立ちませ』と促されて、松陰は起立し」小幡は自分の藩の役人ですから、そちらの方をむいて「微笑を含んで一禮し、再び潜戸を出」てゆくのです。「その直後朗々として吟誦の聲あり。」その時松陰が吟誦したのは次の絶句でした。

吾今為國死

吾れ今國の為に死す

死不負君親

死して君親に負かず

悠悠天地事

悠悠たり天地の事

鑑照在明神

鑑照は明神に在り

いま自分は國の為に死んでゆく。しかしそれは、天皇にも毛利の藩主にも両親にも負いたとは思はない。その人々のかなしい気持はわかる、けれどもそれに負いたとは思はない。天地は悠悠と流れてゆく。それを思へば自分の死などといふものは、意に介するに足りぬことではないか。さらに明らかにものごとを見通される神さまがをられるではないか。たとへ現実はどうであらうとも、正なるものは正、邪なるものは邪、善は善、悪は悪として、狂ひなく天地の間

のものごとは動いてゆく。すなはち、正しいものは何時かは必ず貫かれるといふ確信がよまれてゐるのです。その詩を朗々と誦してゆかれる。「時に幕吏等なほ座に在り、肅然襟を正して之を聞く」。松陰の気迫に文字通り圧倒されたのでありませう。幕府の役人たちは、身じろぎもせず襟を正して先生の吟誦の声に耳を傾けるのです。「小幡は肺腑を扶えぐらるる思あり。護卒亦傍より制止するを忘れたるもの如く、朗誦終りて我れに帰り、狼狽して駕籠に入らしめ、傳馬町の獄に急ぐ。」

早駕籠で、獄舎に戻ったのが午前十時すぎ、獄の廊下で袴紋付の上に荒縄をかけられ、愈々刑場に引き立ててゆかれる時、先生は同囚の志士達への最後の告別として、先程の「身はたとひ……」の歌と、「吾今為國死……」の辞世の詩を吟誦し、それが終わったあと、各室の人々に目禮して立ち去られたのです。その時囚人の一人であった水戸の志士、鮎沢伊太夫は「右ノ詩（「今我為國死……」）ヲ吟ズルコト從シヨウヨク容トシテイサキヨク人々実ニ感ジケル余リ、人々歌誦テ弔ヒケル」として、次のやうな歌を書きとゞめてゐます。鮎沢伊太夫の歌は

ますら男の死でのかどでのいさましきうれしき聲に語るからうた

「いさましきうれしき聲」といふことばの中に、死を前にして明るく朗らかに詩を吟ずる松

陰の躍るやうな生命の律動が偲ばれます。

京都、鷹司家の諸太夫、小林民部の歌

わし鷹のたけき心をむらすゞめむらがりしとて知りぬべしやは

「むらすゞめ」とは幕府の役人たちでせう。彼らがいかに集って調べてみても、松陰のすぐれた志などわかるはずはあるまいといふことです。

水戸の堀江克之助の歌

かみの為下を哀むますら男のひかりを残す死出の言の葉

松陰の最後の歌の中には、国のため、君のため、親のためにつくし、国民のために心を砕いて生きて来たますらをの最後の光が輝いてゐるといふことでせう。

さらに、当時の学者であった依田学海が八丁堀の同心吉村平三郎といふ人から聞いたこととして、松陰先生の最期を次のやうに書きとゞめてゐます。

「過し日死罪を命ぜられし吉田寅二郎の動止には、人々感泣したり。奉行死罪のよしを読聞

かせし後、「畏り候」よし恭しく御答へ申して、平日、廳に出る時に介添せる吏人に労をかけ候よしを言葉やさしくのべ」普段自分の身の周りを世話してくれた役人にやさしい言葉をかけ、「さて死刑にのぞみて鼻をかみ候はんとて心しづかに用意して、うたれけると也」

以上が死刑にのぞんだ先生の御姿ですが、この従容とした御姿にふれて、平三郎は次のやうに申します。

「凡そ死刑に処せらるゝものは是迄多しと雖も、かくまで従容たるは見ず、多くは死をよみ聞かせらるゝ時、上氣して面色赤く、刑場に赴く時は腰立たず、左右より手を取り行くに踵くびす地につく事なし」

いかに先生の御最期が立派であつたか、この一文に偲んでいたゞきたいと思ひます。

このやうな実話を、皆さまはどういふお気持ちでうけとめられるでせうか。イデオロギーに固執してをられる方には、何の気持も呼びおこさないかもわかりませんが、「心」に感ずる力を養ひたいと努力してをられる方、さういふ方は、今日の題にかゝげました「畏敬のころ」の尊さを知らうとしておられる方だと思ふのですが、さういふ方々にとっては右の実話は同じ人間の中にも、こんなにまで立派な死に方ができる人がゐるのかと深い感動をよび起さないではをられないと思ふのです。このことは一昨日、木内先生が「神を直観できない者はダメだ」とおっしゃった、さういふ生き方とも通じあふものでせう。「畏敬の心」を求めてをられる方、

「神を直観する力」を身につけやうとしてをられる方、さういふ方々には、この松陰先生の御最期は、必ず深い感銘をあたへずにはをかないはずだ、さう思はれてなりません。

今次大戦に命ささげた青年の心

さて、私達国民文化研究会では、昨年、「いのちささげて」といふ書物を正、続二篇、出版いたしました。その中には戦時中に戦争で、或は病気で、さらには終戦直後自決された方もふくめて、若いのちを捧げられた四十六名の方々の残された遺歌や遺文が収められてゐます。この方々は、戦前私たちといろんな機縁につながってともに学んだ方々ですが、若しこの方々が今生きてをられたら、この祖国の危急にあたって、どんなにかすばらしい活躍をしてをられるだらうと、亡くなられた方々を偲ぶ切なるおもひにかられて、やっと、このほど出版の運びになったのです。

このやうに戦死者の遺文を集めたものには、皆さま御存知の通り、戦後、東大出版会から出された「きけわだつみのこゑ」と「はるかなる山河に」があります。そこに収録された文章はたしかに立派なのですが、それらの書物の編集意図は、反体制、天皇制打倒の考へをもった人たちが、自分たちに都合のいいものだけ集めようとする露骨な意図によって貫かれてゐます。

これ位戦死者に対する冒瀆はないので、この書物が世に出た時は、本当に悲しいおもひをしました。そして当時の学徒たちは、この本が示すやうなものでは決してなかった。大勢の学徒はもっとすっきりした気持で出陣し、戦死してゐる筈であるし、そのやうな資料が私達の手許には沢山残ってゐるので、私たちが死ぬ前に、何とか世に残してゆかうではないか、さういふ思ひで編纂したのです。

ここでは、この書物の内容について深く御説明する時間はありませんが、たゞ一言だけ、この諸君が肌身はなさず手に持つてゐたものは、皆さんがこの合宿でお読みになった黒上正一郎先生の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」と「明治天皇の御製集」の二冊だったことをお伝へしておきたいと思ふ。聖徳太子と明治天皇については、今さら申し上げるまでもないと思ひますが、日本の文化を導いていたこの偉大な御二方の御言葉や御歌にふれ、それをしほりとして仰ぎつゝ、永遠に日本の国を守って行かうと誓ひ会った仲間が、深い友情に結ばれて生きてきたのです。病床にたふれた友は戦地の友をばげまし、戦地の友は銃後の友を偲びつゝ、生と死をつないで生きてきた青年の姿がこゝにあると思ふのです。時間もございませんので、こゝでは、この合宿二日目に登壇していたゞきました夜久正雄先生が、月刊の「国民同胞」の八月号にお書きになった文章を読ませていたゞきます。これは「いのちささげて」の続篇が出来たときの感想をお書きになったものです。

「続いのちささげて——戦中学徒、遺詠遺文抄——」を読むと、親しかった友人たちの言葉に、いまさらのやうに叱咤され激励され教へられる。それは、この人たちが「いのちをささげた」といふ事実によるが、それだけではない。「いのちをささげる」意味に深い省察を加へてゐるからである。国をまもるといふことの意味をいのちがけで考へてゐるからである。国をまもるといふことについて、当時の青年は心をつくして思想し実行したのである。」

「いまさらのやうに叱咤され激励され教へられる」——さういふ夜久先生の御言葉を読んできますと、この、いまはなき方々の文章が永遠に生きてゐることを実感いたします。文章が生きてゐるといふことは、魂が生きて、いま我々のそばにゐてくれるといふことです。さらに夜久先生は、それらの方々は「いのちをささげる意味に深い省察を加へた」方であるとおっしゃつてゐる。一般にはあの時代、人々は軍国主義の政府にだまされて戦地に赴いたといふ。しかしこの文章に見る限り、それがいかにでたらめな、死者に対する冒瀆であるか、それを夜久先生はきびしく指摘されるのです。

さらに先生は、「国をまもるといふことについて、当時の青年は心をつくして思想し、実行したのである」と書いてをられます。たしかに現在は戦争は行はれてゐない。しかし戦時中であらうと、国を守るとはどういふことかといふことを思想し実行するのが、学生の任務であり学問の目的ではないのか。同年輩の青年たちが社会に出て勤労生活を送つてゐる間、大学で勉

強してゐるといふことの意味はそこにあるのではないか、私はさう思ふ。与へられた大学のカリキュラムをこなして、単位をとつて卒業してゆく。それが大学生生活のすべてだと思つたら、皆さんの一生は本当にもつたないじゃないか。十八才から二十二才といふのはあなた方の一生を決定する時なのです。小林秀雄先生も「人間は二十才の初めに考へたことを、四十や五十になつても同じやうに考へるものですね」といつかおっしゃつたが、本當にさうだと思ふ。私も六十五才になりましたが、高校時代の友人は、社会に出て偉くなつた者も多いが、その人間の生き方、生きざまといふのは二十代とちつとも變つてはゐない。さういふことからしても、いま君たちは人生の一番大切なところに立つてゐる。もっとも、大学が本當のことを教へるなら別です。しかし大学が教へてくれるのは概念的な知識だけではないか。知識よりもつとつと大切な心、それは一人一人が鍛へるより他に道はないのです。

そして夜久先生の文章は次のやうに続きます。

「青年時代の数年に全身心を傾けて人生の真実——生きることの意味を——すなはち、いのちささげて死ぬことの意味を——求め求めた心のあと、これが彼らの文章である。一緒に励んだ、若かつた時の友人の遺文を読んで教へられ励まされるのは、つらくもあるがありがたい。六十を過ぎた私などに書けませず、書きも出来なかつたすばらしい文章にみちてゐる。若い人たちに是非読んでほしい。」

以上、明治天皇の大御心、吉田松陰先生の御最期、そして戦争にいのちささげた青年の姿と
辿って参りましたが、そこに一貫してゐるものは、畏敬の心を深くたゝへながら人生を送って
きた日本人の姿であり、そこにこそ、日本文化、日本精神は生きてゐる、私はさう確信してを
ります。この畏敬の心を身につけようとしなない教育や学問、それらはすべて我々にとって第二
義的なもので終ってしまふのではないか、我々は人生の一番大切な時期において、学生生活の
中から第一義的なものが見失はれてしまつてゐるのなら、一人一人の自覚において、数々の先
人が残された言葉に学びながら、第一義的な学問を学び、教育の世界をおしひろげて行かなけ
ればならない。さう信じてをります。



講

義

これからの世界のなかの日本

―近刊『新しい健康な経済学』

に触れながら―

世界経済調査会理事長

木 内 信 胤



はじめに

私の日本論

日本人の問題の解決の仕方

新しい日本文明

これからの世界の中の日本

過去一年間の動き

共産主義の崩壊

東京サミット

財政と新経済・社会七ヶ年計画

新しい健康な経済学

言語と日本固有の文明

は　じ　め　に

過去三・四年、この「合宿教室」で私は「新しい日本の誕生」といふ表題の下に、日本は「いよいよ新出発を為すべき廻り合はせになってきた」といふ話をして来ました。考へ方の要点は、
(一)日本は、明治以来百十数年に亘って走りつゞけて来た「自己を西欧化する」といふ道を、非常な成功裡に完走し終った。

(二)一方、「近代西欧文明」の作り主である欧米諸国においては、その文明が概ねその任務を完了して、一種の行き詰りに到達したことによって、「社会の乱れ」が出て来た、といふ二点を中心とするものでした。

まづ、第一点の日本が西欧化の道走り終はるまでには、いくつかの節がありました。維新から日露戦争までは「富国強兵」が実現しなければ、日本もやられてしまふと考へたひたむきの努力でした。日露戦争は、その最後の日本海々戦が、世界の海戦史上に類を見ないすばらしい勝ち方であったので、日露戦争の全体も楽々勝ったやうな印象を国民は持つことになりましたが、実はさうではなく、日露戦争は本当に危ない戦争であった。だからこそ真の挙国一致でもあったのです。その日露戦争までが一段落で、あと日本は五大国或いは六大国のひとつと呼

ばれるやうになり、当時の言葉でいふ「列強」の一員としての道を歩むのです。当時の列強は、何か理由さへあれば、時には理由がなくても、人の国を取ってもよかったので、その極端な例は、遠い昔のジンギスカンあたりを考へればよくわかると思ふのです。世界の歴史においてはさういふ列強意識の時代がずっと続いて来たのであって、「他人の国をとってはいけない、平和こそが一番大切だ」と言ひ出したのは最近のことなのです。日本も当時の列強意識に立ったから、ロシアから樺太をもらひ、満洲に權益を得、やがて韓国を併合する。この韓国といふひとつの国を取ったといふことは非常な問題を起しましたが、ひとの国を取ったことそれ自体は、当時の世界思想から言へば悪いことではなかった。たゞあとの結果は悪かったですね。そのあと大分たつてから満洲国を建設し、支那事変、大東亜戦争を起こしていくといふのが日本の列強時代です。戦争に負けたのが一九四五年で、これで一段落です。その後、日本は自分の国を非常にだめな国だと意識するやうになった。もっとも明治以来、日本人は人の国の真似をしてきたわけで、その真似をしたと思ふ相手は、自然に偉いものに見えてくる。だから欧米を非常に崇拜し、自己をだめなものと思ひ、さうして自分に鞭打つて来てきたのです。それは明治以来ずっとさうなのですが、敗戦後は、左翼思想の影響もあってそれが特にひどくなり、日本は全く日本らしからざることになった。ところが、さういふ意識の下でやってみた日本が、気がついてみるといつの間にか素晴らしい日本になってゐたといふわけなのです。



第二点の「近代西欧文明」の行きづまりですが、近代西欧文明の任務は何かといふことは、軽々には言へませんけれども、その任務を概ね完了したらしい。完了したことによって「一種の行き詰りに到達した」といふことは認めざるを得ませんね。実感としてさう思ふのですが、戦争に負けた当座、いかにアメリカが立派に見えたことか。また本当に立派でもあったのです。ところが現在ではそれがもう決して立派ではない。それは彼らが行き詰ってゐる証拠で、その結果、社会の乱れ”が出て来た、といふことなのです。

以上の二点を中心として日本は新出発をするわけです。

私の日本論

次に昨年私が書いた「私の日本論」といふ論文につ

いてお話しませう。この頃日本でも有名になったハイエクといふえらい方がをられます。この人が中心になって一九四七年に出来たモンペルランソサイエティといふ会があるのです。私は一九五八年から、その会員なのですが、その会が昨年香港で、アジアで初めての総会を開きました。私にも何か論文を出せといふことで書いたのが、「私の日本論」といふ論文です。要旨は、いまの日本は、実に不思議といふほど巧みに、政治や経済の困難な問題を解決してゐる。これからもさうであらう。それは、日本国民がいま一樣に身につけてゐる文明の力である。その文明とは「新しい日本文明」と名付けるべきもので、それは日本固有の文明が、印度文明、支那文明を受け入れて、三者の融合文明を作った。そこに明治以来、西欧文明を受け入れていままでのそれとの新しい融合文明を作った。それが我々がいま身に付けてゐる文明で、その力が偉大なのである。この事実、それを日本国民が自覚するのに、あと二年はかかるまい」といふものでした。

この論文は昨年九月の発表ですから、今日の時点で見れば、あと一年と一ヶ月です。あと一年の間に、我々日本人は「新しい日本文明」を身につけてゐるといふ自覚がほぼ十分に行き渡るだらうと思ひます。そのあとの日本が本物の日本です。その自覚のないうちは、まだ本物ではないのですが、すでに実体はある。しかし実体はあってもそれが自覚されて、はじめて本物になるのです。その為、あと二年はかかるまいと、私は予言してゐるのです。

この論文のことをもう少し詳しく説明しておきませう。

△日本人の問題の解決の仕方▽

この論文の執筆は昨年七月でしたが、当時の日本は大出超で、海外の諸国から非難を受け始めてすでに一年半を過ぎた頃でした。即ち、五十二年度、五十三年度と日本は大幅の黒字でした。私は、何故日本が大幅出超になったのかを、この論文で説明したのです。明治の日本は富国強兵が理想でしたが、輸出が伸びなければこの目標は出来ない。当時アメリカ人が買ってくれるのは生糸とお茶でしたから、この二つの商品を作ることと徹底的な努力をした。戦後の日本は重化学工業品の輸出を志して、一躍大重化学工業国となった。日本の輸出品は優秀であったからどんどん出るやうになり、結果的に向ふを苦しめた。しかし大出超になってまだ二年、急に止めろと言はれても、さうは行かない、といふことも私は説明したが、それよりも、日本品はなぜ競争に勝つのかを説明した。いま日本は赤字に転じてゐますが、この事実を加へればなほ日本の素晴らしさははっきりする。

日本人は、大輸出をやらうと思へばやれる。過ぎたとなれば、誰が何を言ふでもないのに、いつの間にか赤字に転換してしまふ。これが日本が不思議な国たる所以で、普通の国には出来ないことを、なんといふことなしにやってしまうのです。その「なんといふことなしに」とい

ふのが大事な点なので、理屈がわかってやるのではない、なんとなくわかって、なんとなくやってしまふ。それが日本なのです。それが日本文明なのです。

他の経済問題に關してもさうです。日本は世界に珍しいインフレのない国です。いつさうなったのかといふと、誰も説明しないのですが、事実さうなつてゐる。昭和四十八年の石油ショックについても、それから起つた不況についても同様で、物価は暴騰し、不況だ、不況だと言つてゐたけれども、いつの間にか不況は消えてたし、インフレもなくなつた。

政治問題でも、例へば左翼思想といふものは、日本ではなんとなく退潮するでせう。その間に殺し合ひと言つた惨らしい事件はほとんどない。赤軍が軽井沢に立て籠もつたぐらいが大事件であつて、本当に惨らしい事件はゼロです。

国鉄は違法ストをやつて八日間もぶつ通して汽車を止めたけれども、大して叱られないのです。当時は玉虫色の合意文書といふものを作つてなんとなく収めた。それ以来、国鉄はストらしいストは出来ない。しかし、ストを止めたと言ふのは辛いから、ストをやつたことにするためのストを辛うじてやつてゐる。これが日本的解決です。これは聖徳太子が「和を以て貴しと為す」と仰つた伝統をひいてゐると言つてもいいでせう。日本人は、人を追ひつめてひどく困らせるやうなことは滅多にやらないのです。そんなことで政治、経済上のいろいろな困難な問題を解決してきたのですが、これからもさうで、なんとなく解決して行くでせう。そして、

それは日本国民が今一様に身につけてゐる「文明の力」だ、といふのが私の論文の次の論点です。

「一様に」といふのは、日本は知識程度が非常に均分で、偉大なる中間層を持つてゐるのです。例へばアメリカだったら、非常に偉い人は少しゐるけれども一般の大衆は、ひと口に言へば馬鹿です。日本に馬鹿はほとんどゐません。だから私は方々で講演してゐますが、鹿児島で講演しようが、北海道で講演しようが、大阪でやらうが、同じことを言つて間違ひなく通じます。たゞ、初めて会ふ人には少しゆっくり丁寧に話す必要があるといふだけで、話の程度を変へる必要は全然ない。ところがアメリカは偉い国に見えますが、アメリカ人を全体として捉へたら、実際ひどいものなのです。

この偉大なる中間層であるところの日本国民が、一様に身につけてゐるのが、「新しい日本文明」と名付けるべきものなのです。

△新しい日本文明▽

この「新しい日本文明」の源には、日本固有の文明があります。

日本固有の文明といふのは要するに、古事記や万葉集に表はれてゐるああいふ心情をもつた民族が団結して、皇室を中心に、非常に平和な統一国家を作つた。統一国家を作つたといふこ

とは、ひとつの文明を持ったと言ふことですが、その日本固有の文明とは、当時の人々が作り出したもろもろの思想であり、制度であり、考へ方であり、或ひは生計の道などであったのです。さらに具体的に言へば、当時どういふ農業をやつてゐたとか、治水をどのくらゐやつたとか、外敵にはどう対抗したとか、それらのことも含めて、日本固有の文明と呼ぶのですが、そこへ漢字といふものに乗つて、印度文明と支那文明が同時に入つてくる。この両文明は、相互に、まるで性質が違ふ。

印度文明とは一口に言つて、人間の「心」といふものを或いは「我」といふものを、専心に研究した文明と言つていいのでせう。非常に瞑想的ですが、何を考へたのかといふと、自分の心を観察した。その結果は、「無我」にならなければダメだ、といったことになる。目に見えるものは、実は、一切存在しないのだ、ともなる。さういふのが彼らの文明の特徴です。心外無一物といふ仏教語がありますが、さういふことなのです。大乘仏教の經典は、お釈迦様の時代から五百年ほど経つたあとで書かれたものですが、私は大乘仏教が印度精神の精華だと思つてゐます。大乘仏教の「論」あるいは「經」は沢山ありますが、私はそんなに經典を読んだわけではない。だが、読まなくてもわかる、といふことがなければ世の中の事は、実はわからなのです。ある場合は、読まないでもいいのだといふことを知つてゐなければ、世の中は落ち着いて生きてゐられませんね。それはともかくとしても、「心」を専ら研究して、外界は無に等し

いといふのが、印度文明だといってよいでせう。

ところが一方の支那文明は、それと全然違ふので、世の中の人間が、争ったり、仲良くなったり、国は乱れたり、治まったりしてゐるその姿が、面白くてたまらないといふわけで、それを巨細に研究し、人間の心の動き、或いはグループの動きといふものを如実に理解しようとした。これは歴史眼です。印度文明を哲学の文明といふならば、支那文明は歴史学の文明なのです。だから、支那文明のエッセンスは「史記」とか「易経」とかに現はれてゐると思ひます。儒教といふ素晴らしいものが中国から出たのは事実ですが、儒教が支那文明の精華だとは、大乘仏教が印度文明の精華だといふ意味では言へないと思ひます。

この印度、支那両文明を、漢字といふものによつて日本人は両方とも取り入れるのです。奈良の平城京といふのは西安流ですし、大宝令にしろ、日本書紀にしろ支那流をどんどん取り入れた。しかし一方で聖徳太子を先達として仏教に飛びついた結果、日本は仏教国になる。平安朝には最澄、空海といふ二人の大変に偉いお坊さんが現はれ、鎌倉時代に入ると、法然、親鸞、栄西、道元、日蓮といった人が出て来て、仏教は完全に日本化されたと言はれてゐます。

支那文明の方は、盛んに取り入れはしたけれども、思想的に目立つことはなかった。それが徳川の時代になって儒教といふものが急に盛んになる。儒教は治国平天下の技であつて、日本国を統一して平和に保たうとするには非常に頼りになる教へですから、儒教は徳川幕府によつ

て奨励される。中江藤樹、伊藤仁斎、荻生徂徠といった偉い人がでる。一方、かうした儒教の興隆に対抗して国学が興る。前奏曲として契沖とか賀茂真淵とかがゐるわけですが、何といつても国学は本居宣長によって大成されたと言へるでせう。この国学の復興といふ事がなければ、今の日本国はない。なぜなら、国学と儒教といふ二本の柱に支へられなければ、吉田松陰、橋本左内等々の幕末の志士は出て来なかつたであらうからです。そこには仏教の影響もあります。また武士道といふのも徳川時代の儒教の産物であつて、まさに熾烈な思想の高揚があつた。それが非常ないいところへ来たときに、黒船が現はれるのです。廻り合せですね。

かうして徳川末期には、日本固有の文明が、印度文明、支那文明を受け入れて、三者の融合文明を作つてゐた。そこへ黒船が到来したから国民は立ち上がつて明治維新となる。この明治維新は全くの離れ業で、尊王攘夷で固つてゐたものがたちまち開国になつたり、元のことは忘れたやうに、西欧文明を受け入れてゆくのです。

この西欧文明といふのが、今までの印度、支那文明と全く違ふので、大ざっぱに印度文明は心を対象とし、支那文明は社会を対象としたといふならば、ヨーロッパ文明は自然界を対象とした。それも自然界に対する征服的な態度の文明です。そこから近代ヨーロッパのいはゆる科学技術文明が出て来るのです。

ヨーロッパにおいては、十四、十五世紀のルネッサンス、十六世紀の宗教改革といふのが近

代の夜明けで、それから、実証主義、啓蒙思想などが現はれ、近代文化が生れて来るわけですが、この近代技術文明といふものが与へた力をもって、ヨーロッパは全世界を征服するわけです。その中で独立を守った国は、西ではエチオピア、東ではシャム、今のタイ、それから日本です。中国は半植民地と言はれたので、独立国といふには聊か難がある、といふ状態になる。日本人はこのヨーロッパ文明を、なり振り構はず一生懸命に勉強したその結果列強の一員となり、大戦争を戦ふに至る。これが明治以降の歴史ですね。

戦争に負けて以来三十四年、今日になって気がついてみたら、向ふは駄目になって来たが、こっちはいよいよ素晴らしくなつて来た。わけはよくわからないけれども、これからもいよいよ素晴らしくなりさうだ、といふのが今の状態です。これはヨーロッパ文明も完全に取り入れて、既に持つてゐた三つの文明（日本固有、印度、支那）と融合して、四者をついにした新しい融合文明を作り得たといふことの結果なのです。

融合体を作るには、その統括者が必要ですが、統括者は、前の印度、支那との融合文明の場合も、今度の場合も、日本固有の文明です。国民はまだそれを自覚するには到つてゐません。まだヨーロッパを学んでゐる最中の人も多いから、ヨーロッパ流のことばかり考へ、ヨーロッパ流のことばかり言つてゐる。しかし実際には、さうではないものがちゃんとある。そして時あつて「これが本当の日本だ」といふのが出て来るのです。といふのは、世の中といふものは「重

層構造」であって、目に見えない、マスコミには出て来ない深い層で、表層とは別な変化が進行してゐる。例へば、表層でだめな事件が進行しますと、目に見えない深層で、その表層の出来事に憤慨し、なんとかよくしようと思欲を燃やすといふことが、同時に行はれる。それがある程度に達すると、表層の悪いところを押し飛ばして、表層に出て来る。今、日本は悪いところを沢山持つてゐますけれど、これは上っ面のことであまり気にすることはありません。ただヨーロッパ文明だけが文明だと思つてゐるならば、それは違ふといふ自覚が出て来なければまづいですね。その自覚は出て来始めてゐるので、あと一年余で間違ひなく、その自覚は十分なところに来るだらうと私は思つてゐるのです。

この間、ボーゲルといふハーバード大学の教授が「ジャパン・アズ・ナンバーワン」といふ本を出しました。書いてある内容は実は、日本人でものを本当に知つてゐる人からみるとつまらない。しかしボーゲルといふ人の本は、いはゆる「日本論」ではないので、日本のいいところをピック・アップして、アメリカ人を叱つてゐる本なのです。面白いことに向ふで英語の本が出ると同時に日本でも出版され、かなり売れてゐるさうですが、アメリカでは猛烈に売れてゐる。さういったこと、これは一つのシンボルですよ。さういふ事が起るといふのはただ事ではないので、流れはまったく變つてゐる。それに気がつかないのは愚かであり、惜むべきことだと、かうなるわけです。

以上が私の日本文明論です。

△これからの世界の中の日本▽

これからの世界は混迷がいよいよ増すでせう。一番目立つことは、ソ連の武力がアメリカより強くなったことですが、これも見やうによっては、アメリカがこれから自覚して、蘇って来る。さうすると、あと五年七年の後には、武力的にもまたソ連を凌駕しますから、今がソ連にとって最良最後のチャンスです。だからソ連は、核兵器を使って大戦争をやってもいいという態度でこちらに臨んで来る。アメリカに対し、或いは日本やどこかの国に対して強圧を加へ、一步一步地歩を築いてゆく。アメリカが二度三度譲ったら、あとはどうにもならなくなるかもしれない。かういふ観察をする必要があるので、油断は出来ないので。或いは私が全く想像しないやうなことが起るかも知れませんが世の中は要するに無気味です。もう決して安泰ではない。

中東の石油の問題にしても、中東自体が乱れるかもしれない。彼らは石油の値上げをしようとカルテルを結び、こちらは先のサミットで消費者カルテルを作って対抗しようとする。どっちが強いのですかね。こちら側の内部分裂も起り得るし、向ふの内部分裂も起り得る。いづれにしてもただでは済まぬ形勢ですね。

ヨーロッパはまあまあよくやっていると、いふ程度でせう。イタリヤは非常に危いが、イギリスはサッチャーが出て来て、どうやら上向き歩調になるらしいです。

たゞ困るのはアメリカです。カーターといふ人は非常にいい人らしいけれども、いい人だからなほ危いといふことがある。そこへもって来て、アメリカは経済学をかしいですから、依然として失業とインフレとの同時解決が出来ない。

以上の様に世界は実際無気味な情勢ですが、その中において日本は、他のいづれの国も持つてゐない文明を持つてゐる。その日本の行動、姿、影響力等は、容易に想像出来ないほど素晴らしいものであらうと私は思つてゐるのです。しかし、日本国が積極的に世界をどうする、後進国をどうするといふのは余計なことでは。ちゃんとした国が、今の世界に対処するには、自ら道があります。その道を踏んでゐればいいので、おれがかう指導してやるなんていふのは怪我のもとだと思ふ。だから日本がどういふ態度を取るべきかは実にむづかしいのです。今の言論界に現はれて来るのは、大体ヨーロッパ流の「おれがおれが」といふ考へです。その「おれが」を減少しろといふのが東洋流なので、無我とまで行かなくとも、謙虚でなければだめだといふのが東洋流なのです。だから、いま日本で、これからの日本はどうしなければならぬといふ議論をしてゐる人達は、大体ヨーロッパ流の考へでのを言つてゐるので、あまり力はない。さういふ人には言はしておけばいいのですが、たださういふ言葉に心を貸さないやうにす

べきだと思ひます。

以上述べてきたやうな認識のもとに、いま私は「新しい健康な経済学」（仮題）といふ本を書いてゐる。出版は十一月になる予定ですが、どうぞご期待願ひます。

過去一年間の動き

△共産主義の崩壊▽

先日、鄧小平が日本に來ましたね。日本に來て方々を見てびっくり仰天して歸つて行つた。彼は最後に松下幸之助さんと會つたが、あれが圧巻でした。彼は資本主義に完全に頭を下げたと思ふのです。彼がそれを自覺してゐるかどうかは別ですが、事實は、資本主義に頭を下げたにちがひありません。今の資本主義国の状況がいいわけではありませんが、共産主義といふものは要するに間違ひですから、結局は資本主義に頭を下げるといふ形で幕がおりなければ事は納まらぬ。彼の奥さんは池袋のサンシャインビルといふ高層ビルの上の水族館を見て、えらくびっくり大いに氣に入つたといふ話です。さういふことが頭を変へるのです。

しばらく前、毛沢東が矛盾論を出した頃、或ひは文化大革命をやって造反有理だと言つた頃は、毛沢東は神格化されて大變偉い人のやうに見えてゐました。しかし、その後四人組がやっ

つけられ、今では、四人組をやつつけることは、即ち毛沢東をやつつけることだといふことに成って来ました。ですから中国が「脱共産化」することは決定的です。以前は脱毛沢東まで進んでゆけば、中国は麻の如くに乱れるのではないか、それも困ったものだがらるに私は考へてゐたのですが、今は脱毛沢東になりさうですが、だからと言って麻の如くに乱れないで済むかもしれないと思ふやうになった。ただし中国がどうなるかは、別箇の問題で、大事なものは、彼らがいよいよ共産主義を捨てるといふ問題です。

北ベトナムといふ国は、私には昔は共産主義国の中でも最も優れた国に見えてをりました。けれどもその北ベトナムが南を併合し、全国を共産化したら、どうにもならなくなつた。その上何を思つたかカンボジアに手を出し、カンボジアの赤色クメール政権をつぶしにかかつた。この赤色クメールといふのが、共産主義国の中で最も素朴な徹底した共産主義で、アメリカが敗退して、自分の天下になるや否や、すごい惨らしいことまでやって共産化した。それを北ベトナムが攻める。さうしたら今度は中国が後から、北ベトナムに攻めこんだ。この一連の事件を、ベ平連その他左翼主義の人達はどう説明するのですか。聞かせて欲しいですね。「私どもは間違つてゐました」と言つてくれるならば大変結構ですが、言ひませぬ。彼等は全く恥を知らないといふことですが、これもあまり追ひつめないで、放つておいてもいいかと思ひます。一方日本では、美濃部さんもゐなくなつたし、蜷川さんも黒田さんもゐなくなつた。だから

と云ってそれは、なにも資本主義の復活でもなければ、社会党共産党の消滅でもないのですが、とにかくさういふ動きをしてゐる。ヨーロッパでは、一時期はちょっとよく見えてゐたユーロコミニズムがだめになって来た。

これを要するに共産主義といふものは、近い将来、なくなつてしまふことは確かだと思ひます。さうなるとそこに、「絶対平和」の契機があるのです。さきほどソ連恐るべしと言ひましたが、ソ連の中には共産主義思想が根強いといふものでもないのです。たゞ、何のはづみか、馬鹿でかい軍備を彼らは持つてしまつたといふ事実があるだけなのです。世界を平和にしたければ、言ひ換へれば米ソの間の核戦争の危険といふものを除きたければ、中国が脱共産主義になつたその勢ひを借りて、ソ連から共産主義が脱け落ちるやうに仕向ける。さうなれば大国間の戦争はなくなるのです。といふのは、ドイツとフランスとはかつて何十回と互ひに戦つたが、両国間に戦争が今後起ることはもう決してない。それはイギリスとフランスの間についても、或いはイギリスとドイツの間についてもいへるのです。以前は戦争をして当り前、恨みに報いるに恨みをもってした。相手をやつつけなければ生きて行けないと思つてゐたわけです。しかもう決して戦争はない。それは人類の歴史がそこまで進歩して来たからです。最大の貢献者は、西欧作るところの「科学技術文明」です。それならばソ連とアメリカとが戦争をしなくなるのも当り前であつて、もしするとすれば余程持つて行き方が下手なのです。

△東京サミット▽

もうひとつ大事なことはこの間のサミットです。サミットは、第一次石油ショックの結果世界の経済が不況になった、共同歩調で切りぬけようといふ発想から始まったので、一九七五年にフランスで集り、次はアメリカ、その次はロンドン、そして昨年がボン、第五回が東京サミットだったわけです。

東京での第一議題は、共同して世界の経済を何とかしようといふことです。それには日本に対して「日本の出超が大き過ぎる。日本はインフレを覚悟し、成長率を高めて輸入をふやせ。さうすれば世界の経済は良くなる」と要求したいところだったので。ところが日本は、年初以来赤字、東京サミットの六月末には、すでに相当の赤字になってゐた。そこで彼らはその事実に押されて文句が言へず、第一議題は消滅も同様でした。第二議題は貿易問題。第三議題は世界通貨ですが、これらも殆ど論じられなかった。第四議題は南北問題、これはサミット直前の五月に、南が或る会議で理不尽な要求をつきつけたので北側は全部拒絶して決裂した。決裂したばかりなのに、先進国だけが集まって南北問題を論ずるわけにはいかないでせう。かうして四つの議題は全部吹っ飛んだのです。

第五議題はエネルギー問題で、これ専一の会議になった。ところが丁度同じ時機にOPEC

（産油国機構）が集まって新しい石油価格を決めたわけです。今まで一四ドルだったものを、サウジ他二国は一八ドルにする。あとの十ヶ国は最高二三ドル五〇セントまで自由とする、といふひどいことを決めたのです。この決定が東京サミットに伝えられ、緊急かつ緊迫した議論になり、今までは不可能と思はれてゐたことを決めたのです。

それは昭和六十年まで、E.C.は一日当り一〇〇〇万バレルの消費量で抑へる。アメリカは輸入量を八五〇万バレルに抑へる。日本は現状で一日当り五四〇万バレルの輸入ですが、これを昭和六十年までには六三〇万乃至六九〇万バレルにしてもいいと決った。現状より増量が認められたのは日本だけです。大平さんは「新経済社会七ヶ年計画」といふものがあるが六・三%の成長率を予定してゐる。石油を五四〇万バレルで抑へるといふならこの計画は実現できない、といって頑張ったといふ話です。彼らは七%成長にしろと日本を攻めてゐた手前、何ともならず、日本だけ増量が認められた。意外なことです。

実際は、もの見方を変へ、生活のねらひを変へ、本当にその気になれば、五四〇万バレルでもそれ以下でも十分やれるのです。参考事実をひとつだけ申しますと、オリンピックの時ですが、新幹線が走り始め経済は活発で、外国人も驚いたやうなあの時の日本の石油の使用量は現在の四分の一だったのです。

△財政と新経済・社会七ヶ年計画▽

サミットでは、大平さんは石油の増量を勝ち取ってよかったのですが、これから大変なのは予算の問題です。

来年度の予算は、増税を前提にしなければ組めないのです。どのくらい増税するかといふと、三兆ぐらゐる来年は欲しい。それから四兆五兆と増えて行く。それだけの継続的な増税を決めないと、来年度の予算は組めないのです。大蔵省は随分前から研究を進めてゐて、「一般消費税」といふつまり付加価値税ですが、それが一番いいと考へてゐる。私は天下の悪税だと思ひます。嘘がつけるし不公平なことがやたらにある。だから皆を怒らせるでせうし、嘘をつくやつを取締りやうがないのです。だからあれは是非やめて欲しい。大平さんは、一般消費税がいやなら所得税を増税しようと言ひ出したのです。それで今は、一般消費税と所得税の二者択一といはれてゐます。私は大平さんの真意は、話をさういふふうにして行つて、ある機会に両方止める、その代りに皆がびっくりするやうな政費節減をやるつもりではないかと好意的に考へてゐるのです。

現在の財政はもう一つ問題を抱へてゐます。それは、国債発行がうまく行かないのです。一月以来、大蔵省のやったことは失敗の連続で、「金利」とか「自由市場」といふものが全然おわかりになつてゐない証拠だと私は思ふのです。今年は国債を十五兆二千億出す計画ですが、四

ヶ月でまだ二兆五千億円も出してゐないらしい。これでは要するに今年度の財政は執行できないのです。これは日本国としておそらく未曾有のことです。破産会社と同じです。破産しさうな会社なら、いよいよ困ったら従業員の首を切るか、あるいは減俸すればいい。ですから国家も、地方公務員も含めて全部一割ぐらゐ減俸して、民間の社内預金のやうに、一時預ればいいでせう。一割減俸したって皆悠々と生きて行きますよ。それに今は不況を脱却する為に公共投資をむやみにやることになってゐます。今年度予算で七兆七千億です。しかし、何も今公共投資をそのやうにやらなければ、日本は不況に再転落して駄目になるといふことではないのです。だから、ここでせめて一兆五千億節約してほしい。さうすれば国債発行はうんと楽になります。

ともかく国債の管理政策が全くダメなので、いまは



売るため、金利ばかりむやみに上げてゐますから、財界は悲鳴を上げる。そこへ増税が来たら大不況になってしまふでせう。

つい先日発表になつた「新経済社会七ヶ年計画」といふのが、愚の骨頂です。今までのやうな公共投資をうんとやる、福祉行政も教育行政もうんとやる、高等学校はほとんど全入になつが、大学にももっと補助をして行かうとかういふ考へ方です。これでは、日本は間違ひなく破産です。この計画では成長率をいくらにするとか、失業率をどうするとか言つてゐますが、財政のことはひとつも言つてゐない。ただ大増税をする必要を言つてゐるだけです。現在の日本の租税負担はGNPとの比率で見ると一九パーセントぐらゐで、文明国の中では格段に低い。だからこそ日本は調子が良いのです。それを来年から始めて、アメリカ並みの二六・五パーセントまで、毎年租税の上げ幅を十八パーセント強にするといふのです。話になりませんが、大蔵省始め政府の人は、真面目にそれでいい、と云つてゐるのです。

つまり大平内閣が悟りを開いて、新しい方針を探ればいいのですが、でなければ投げ出しでせう。さうなると日本に相当な非常時が来ますが、それもいいと私は思つてゐます。しかし多分来ないでせうね。その直前に気が付いて何とかする。つまり、「現代の経済学」の間違ひに気が付いて、大蔵省、政府、財界、マスコミ等が概ね持つてゐる考へ方をその根元のところでひと捻り捻れば、この財政困難はみんな消えてしまふのです。雲散霧消、雲の如く霧の如く消えて

しまふ、さうだと私は思つてゐます。実態は何でもないのに、間違つたことを考へて大変だと
言つてゐるが、根元をちょっと捻れば、あゝこれは絵に書いたお化けを見て脅えてゐたんだ、
といふことがわかるでせう。

そもそも七ヶ年計画なんてものは要らないのです。勿論、代替エネルギーの開発とか、もの
によつては十年計画、十五年計画が欲しいのですけれども、経済の全体を七ヶ年計画する、こ
れは思ひ上がりといふものです。

ひと捻り捻るとは、「七ヶ年計画は、これを要するに思ひ上がりの産物であり、これこれの経
済理念の間違つたものを採用してゐるからだ」といふことに気が付く。それで問題はきれいに
消えてしまふ。このやうなことが、私がいま見てゐる当面の日本の国情です。

今、政府始めみんな間違つてゐるのでから、これから国民の方でいい議論が出て来るかど
うかを注視したいと思ふわけです。

新しい健康な経済学

セマンティックス（意味論）といふ学問とコミュニケーション（通意論）といふ学問があり
ます。人はどういふ場合にコミュニケーション出来るのか。言葉といふものの使ひ方は、人に

よって違ふのではないか、例へば民主主義といふ言葉は人によって随分使ひ方が違ふ、どうしてコミュニケーションは出来るのか。かういふことを、さんざんに考へ抜いて、絶対的な孤独感にひたる、といふ生活経験があまりにならないと、この話はおわかりにならないかもしれないのですが、コミュニケーションの難しさに困り抜いたあと、「あ、さうか、コミュニケーションが出来るのはかういふわけだ」とわかる。およそコミュニケーションとは、ある共通の場を持ったときのみできるのです。経済学でいえば、大きな共通の場を設定するのは困難ですから、なるべく小さな場がやりやすい。インフレを論ずる場合なら、この議論ではインフレをかう定義する”として、議論の場を設定してゆく。

私が今度出版する「新しい、健康な経済学」はさういふふうになり立ってゐます。

その本の内容を少し紹介しますと、第一部は「学問」です。その第一論文は「経済現象は歴史的現象」であつて、日本がこれから陥るかも知れないインフレと、この間までのインフレ、戦後のインフレなど、インフレとひと口には言つてもみんなその時々で違ふ。その個性を読み取るのが大事なのに、今の経済学では、インフレとはかういふものだといふ抽象的な共通理論を発見しようとする。だから駄目なのだ、といった論法です。

次に私はものが解るとはどういふ事か書いてゐます。ものは見えて来るのです。ものは始めから見えてゐるやうだけれども、実はだんだんに見えて来るのです。以前この合宿教室で、

小林秀雄さんが「君らにルノアールが出してゐる色なんか見えるものか」といはれたことがあります。ルノアールの絵を見て、色は見えてゐますね。しかし、それが本当に見えるといふのは大変な事なのです。「君らに見えるものか」と小林さんは乱暴なことを言ひましたが、怒った学生は一人もゐなくて、みんな頭を下げて聞いてゐた。これは不平等感の是認ですね。見える人間もゐるし、見えない人間もゐる。といふことは世の中は不平等だといふことです。でも平等といふものは欲しいので、それではどういふ場合に平等があるのだらうといふやうな事を考へて行けば、今の世の中の間違ひを直すに足る議論が少しは生まれて来るでせう。そんなことが第一部の「学問」に書いてあることです。

第二部は「世界」で、今の世界はどういふ世界だといふことを、人類の歴史の全体にわたつて書いてゐます。経済学は歴史現象ですから、全てのものは歴史として見なければだめです。世界歴史といふのは、本当に興味を持てば面白くて面白くてたまらないものなので、さういふ私の世界歴史観に、私の論ずるインフレ問題であらうと雇用問題であらうと、みんな載つてゐる。そのつながりを読んでほしい。

第三部が「日本」で、今日お話ししたモンペルランソサイエティに提出した論文「私の日本論」を載せようと思つてゐる。それから、「日本の歴史と日本語の不思議さ」といふ一文を書かうと思つてゐます。歴史も日本語も私の最も不得手な題目なのですけれども、しかし八十年間

ものをちゃんと聞く態度で生きてみると、大事なことは自然にみなわかって来るので、それをそのまま書かうと思つてゐます。

最後の第四部は「新しい健康な経済学」でこれが全体の約四割をしめることになるでせう。以上が本のあらましで、それは今日申し上げてゐることと一体不離のものですから、今日の話が本当におわかりになれば、本はお読みにならなくていいのです。それより自分自身で本当に考へてくれるほうがもっとありがたい。自分で考へるのが本物だ、人のものを読むのは、実は自分がダメだからだ、とさういふふうにお思ひにならないとだめです。

(附記 この本は「当来の経済学」といふ題で、十二月の十七日に発表になりました。多くの方が、盛大な「出版祝賀会」を催して下さつた席上です。)

言語と日本固有の文明

最後に新しい日本文明について、少し敷衍したいと思ひます。先程、印度文明と支那文明は共に漢字といふ仲介物に乗って日本に入って来たと申しましたが、このことに是非注目して欲しい。

支那語といふのは奇妙な言葉で、発音の数は五百ばかりしかないので、原則としては、

一音が一物を表はすのですが、森羅万象を五百の音で表はすことは出来ない。そこで二つの漢字を組み合はせて新語を作つて凌いでゐる。日本語は「五十音図」といふが、それしかない。それに濁音などを加へて一二〇もありますか。世界で一番「音の数」の少い言葉でせう。英語のシラブルとなると、いくつあるか数へおほせた人がゐないさうです。三千といひ四千といふ。彼らは物を音で区別するので、日本人や支那人は音の数が少ないからどうしても眼で区別しなければならぬ。だから「表意文字」となつてゐるのです。

戦後の間もない頃、あのアメリカ崇拜の時期には、漢字は見た目にはちょっと複雑なものだから、日本は漢字を止めなければだめだと考へた。ところが、さうではないので、見ていきなりわかる文字が、実は能率がいいのです。音は消えてしまひますから、音で捉へるのでは、——言葉といふものは元は音ですが——実はあまりハッキリしない。ロシア語などは極端な例で、猛烈に子音を重ねて音を作り出し、それによつて区別することになつてゐる。音で区別するのは、しかし要するに限度があつて、漢字は五万あつても、眼でみて悉く異なる、といふわけに行かない。その上、書いたものを見て、一度「音」に翻訳して、それで意味を考へるのでは遅い。支那人がどうして漢字といふ不思議な文字を發明してくれたのか、今となつては感謝するばかりなのです。

というのは、この漢字が支那において、人文の進歩につれて十分に熟してゐたからこそ、そ

の豊富な表現力を使って、大乘仏教の実にむづかしい思想内容を翻訳してくれた。ですから、大乘仏教は漢字さへ知ってゐれば大体のことはわかるのです。日本人は漢字を知りましたから、全国的にある程度、支那語は知らなくとも、仏教を理解し、儒教を理解するといふことになつてゐるのです。これは、一々の文字が意味を持つてゐなければ出来ないことです。そのいい証拠は、フランスやドイツには、十九世紀以降すぐれた仏教学者やバラモン教の学者が出てゐるのですが、彼らは原典について学んでゐる。しかしいくら原典に詳しい偉い学者が出たつて、国民とは無縁ですね。だからフランスやドイツの国民が印度思想を取り入れるといふことには全然ならない。それが日本の場合のやうに、漢字に乗って入つて来ると、国民のものになる。明治の日本人は、ヨーロッパ文明を知るために必要な言葉を漢字によって作つた。明治以降は全国民が漢字を知りましたから、ヨーロッパ文明は一举にして全国民のものになったのです。先程、アメリカには少数の偉い人はゐるが、多くの人は馬鹿と言へば馬鹿で、そこには中間層がないのだと申しました。それに比べて、日本人は全部中間層だといふのは漢字のお蔭です。さういふことを知らなくて、漢字は止めようなどとこの間まで言つてゐたのだが、いくら止めようとしたつて、日本国の本当の動きといふものは、ちゃんと間違ひを正しつつ進んでゐるのです。

それに日本の言葉が不思議な言葉であつて、主語はあまり言ひませんね。これは主語を略す

のではなくて、日本人の考へ方が自分・を・環境・の・中・に・置・い・て・ゐるから、自分を中心にしてものを考へることはしないのです。主語を省くのではないので、もともと主語の要らない考へ方をするといふわけです。これが先程申した日本文明の基礎、古事記、万葉に表はれてゐるやうな心情”といふものなのです。

もともと日本人は自分を環境の中に置いて考へる。それが本当ですね。環境なくして自分はないのですから、過去とのつながり、未来とのつながり、周囲とのつながりの中に、初めて自分があるのです。

西欧流では、自分がかうだといふその論理で押し通さうとするからいけないので、これはかうだが、ほかにもたくさん論理があつて、自分の論理のみを押し通すものではない、と知つてゐる方がいい。西欧系統の人は、論理的にのみものを考へるから始末に負へないことになつてゐるのです。しかし、一方、論理的にものを考へなければ、今のやうなヨーロッパ文明は出て来なかつたので、その功績も認めませうね。

東洋の道徳は、自己主張をあまりしないで足ることを知る——少欲知足ですが、これは仏教でも儒教でも同じです。我をはって欲をむやみに出してはいけません。なんとすれば欲を出してゐたらきりが無いから、永久にアンハッピーなのです。この足るを知る民族が共同一致して、あまり内部でけんかをせず、力を合はせて仕事をして、近代科学技術を十分に使つたら、生

きて行くことなんかは何でもないので。既に概ねさうなっているのが、今の日本の状態です。この上もう少し無駄が省けてくれば、一日のうちで、生きる為に働かなければならない時間は三時間とかそんなことになってしまふ。しかしあとのあまった時間を悪いことに使っては駄目です。ですから、悪いことには使はないやうになるかならないかが、日本のこれからの問題で、これは我々がじたばたしてもだめなので、神様がどういふふうに造ってをられるかの問題ですから、結局信仰の問題になってくる。支那流に言ひますと、「天行健」といふ言葉があります。「天の行くや健なり」このユニバース、大宇宙といふものの動きは実に健全な歩みを歩んでゐるのだ、そのことがはっきり目に見えるやうになつた人がさういふ言葉を作つたのでせうね。みなさんもさうなることをお勧めします。世の中の悪い事ばかり発見して、あいつが悪いからいけない、大平がだめなのだ、いや福田がだめだった、その前の三木が、田中はもっと悪かったなどと、人のせいにはかりしてゐます。それは天行健を知らない人の言ふことなのです。天の行き方は、田中を使ひ三木を使って日本人を鍛練してゐるのかもしれない。さういふ大きな着眼がお出来るようになる必要があります。

先程、印度文明は心を研究し、支那文明は、社会を対象にものを考へ、ヨーロッパ文明は自然界を征服的に研究したと申しましたね。では、日本固有の文明とは、ひと口に言へばどういふものか、それを外人に説明しなければならぬ。私はそれを、もの事をあまり詮索しない、

分析もあまりやらない、言葉で説明しようとはしない、ただありとあらゆるものを、その美しさにおいて感じ取ることを究極の願ひとしてゐるやうな人達が作り出した文明”と説明しました。古事記がまさにその通りなので、私は古事記はあまり知らないのですが、一見したところまるで歌を説明してゐる本のやうなものです。かういふときにかういふ歌をお作りになった、それで話が切れてしまふ場合が多い。

日本人はものごとをその「美」において感得する”といふ言葉は、実はヨーロッパ人向けの説明だから、仕方なく使った言葉なのですが、「美」といふと彼らは、芸術、音楽、美術といったものを考へるでせうね。しかしここでいふ「美」とは、日本人が、素晴らしいものに接して「ああいいなあ」と思ふあれなのです。「もののあはれ」とはさういふもので、「あはれ」とは「あっぱれ」といふこと、「素晴らしい、ああいいなあ」と思ふことですが、ですから日本は、あらゆるものごとにおいて「ああいいなあ」と思ひたいと思ふ人々が作つてゐる国なのです。言葉にはあんまりしないのです、うるさいから。言葉にあんまりしてしまふと、なにを見ても聞いても、「ああいいなあ」ではなくなつてしまふ。分析的に見たらだめです。世の中を、森羅万象をその全体においてはんと捉へる。自己を大宇宙の中に置いて、その大宇宙に、或いは森羅万象に、自己を投入するやうな気分になつてゐれば、もの事の美しさは見えて来るわけです。それが日本人の本来の心情だと思ひます。

精神文化と科学機械文明と

—従来のイデオロギーでは—

今日の難問は解けなくなつた—

文学博士・元京都大学教授

高 山 岩 男



一、「道具」の時代と「機械」の時代

文明の公益と公害

人間性の崩壊

大衆社会の造出

二、議会制民主政治の問題

イデアルタイプスに固執することの愚

民主政治における最大の難問

アテネの民主主義

共和制ローマ

三政体の巧妙なる統合

三、現代の戦争と平和

ゼノサイドの危機

針谷夕雲の相抜剣法

世界戦争防止のための若干の問題提起

四、新しい人間と社会の理念

第三の道

「ゲノッセンシャフト」に於ける

「ゲザムトアイゲントウム」

「公」と「私」の調和

一、「道具」の時代と「機械」の時代

△文明の公益と公害▽

現代の世界が直面してをります、危機的な状況、問題といふものの一部を、基本的な点に絞ってお話したいと思ひます。

人類は、何千年、何万年といふ、長い道具の時代から、蒸気機関の発明を転機として、機械の時代に入り、今日に至ってゐるわけですが、鉛筆を削ることに至るまで機械化され、手を使ふといふことを漸次止め始めてをります。

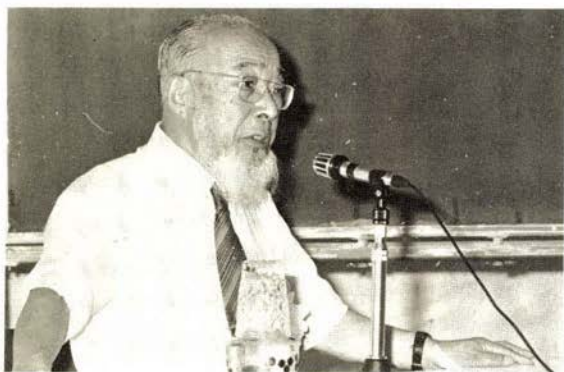
この機械時代になりましたから、まだわづかに二世紀しか過ぎてゐませんが、この間の進歩発達は、形容の言葉がないくらゐに迅速猛烈なものであり、従つて我々人間の文明の諸方面に、大変な、言ふならば革命的な変化を随所に起したと思はれるのであります。

戦争といふものを取りあげてみますと、フランス革命に続いたナポレオン戦争は、史上最初の「国民戦争」で、近代戦争は、これから始まります。それまでは、王朝が自分の財政で養つてゐた、ごくチャチな兵隊で戦争をやつてゐたもので、「国民軍」といふものは形成されてゐなせぬ。このナポレオン戦争をモデルに築かれた戦争論が、プロシヤのクラウゼヴィツの有名な

『戦争論』で、第一次世界大戦まで兵学のバイブルだったので。

ナポレオン戦争後一世紀の間に、国と国との経済上政治上の相互依存関係が急速に緊密化され、三国同盟と三国協商の間に戦争が起きますと、あれよ、あれよといふ間に「世界戦争」になってしまひました。この戦争は勝敗を決するものが前線の武闘だけでなく銃後の工業力にあることを知らしめ、ルーデンドルフの『総力戦』が新しく兵学のバイブルとして登場しました。それからわづか二〇年で、今度は太平洋と大西洋とを戦場とした本格的な世界戦争、第二次世界大戦が起きてしまふ。これは、現代機械文明の特徴を示す一つの、恐らく最大の事例であります。兵器、その他にいたしましても大変な変化を起しましたし、今日もまた起してゐるわけです。

また、十九世紀末葉あたりから、微子的現象に関する物理化学の進歩により、俄然合成技術が発達し始めました。第二次世界大戦前後が大きな境になると思ひますが、合成繊維、合成の金属、薬品、肥料と前代未聞の大変化をもたらし、今日では私達が周囲を見まはしても、合成技術の所産でないものは見つけ出すことが困難なほどになりました。合成薬品、合成肥料といふものから、大変な公益が生まれると同時に、実は大変な公害も発生して来てゐることが、年を経るにつれて明らかになって来てをります。人類の生命のみならず、自然界のあらゆる生命に害が及びつつあるやうです。



△人間性の崩壊▽

今後問題となると思はれますのは、生命の合成でせう。すでに英国で行なはれた試験管ベビー、また遺伝子を人工的に造成するのに成功したといふことも伝えられてゐますが、更に、人間が人造の遺伝子によって、実は、生命をも作ることが出来ると、かういふこととなりますと、今の生命観といふものが、動揺するほかなくなりませう。すでにキリスト教民族にも大きなショックを与へてゐるやうに見えます。

男女が夫婦になる必要がない、試験管で卵子と精子を結合させればよい。といふだけにとどまらず、悪い遺伝を持ってゐるもの、病気を持ってゐるやうなものを、遺伝子をコントロールすることで、一切排除して、非常に優秀なものを作るならば、人類の素質はすばらしいものになるんだ、といふことになると大変なこと

です。

すでに起つてゐます家庭の崩壊といふ現象と結びついて、人類が家庭の教育として親が担当してゐた任務といふものを、すっかり社会や、国が受け継いで担当するといふ方向に行くでせう。

人工的に優秀な男性、女性を国家が育成して行く、社会が公的に育成して行くといふことになれば、当然ここに、強烈な統制が入るわけでありまして、ひと言で申せば、全体主義の方向へ、欲すると否とにかかはらず進まざるを得なくなると私には考へられます。

もはや、自由な人間の精神生活といふものは失はれて、ひたすらに、あるイデオロギーを持ったものに統制されて、化石のやうに同じ形のものが作られて行く可能性が発生する、さういふ道筋が私には目に見えるやうに思はれるのです。

△大衆社会の造出▽

さて、機械文明は蒸気機関から発足しましたが、二十世紀の今日はもう蒸気の時代を過ぎて、電気の時代に進みました。電気はただ動力として使はれるのみでなく、広汎な電波の技術を発達させました。印刷技術の進歩によって新聞がずるぶん普及しましたが、さらに、電波文明によって、ラジオ、テレビといふものももう日常生活から不可分のものとなりました。これが、

人類発生以来未だ見たこともないやうな「大衆」といふ存在を造り出し、これが否応なく社会を支配するといふ現象を産み出してをります。

大正末年、私が哲学に進む決意をした頃に「三文文士」といふ言葉がありました。小説など書いても三文くらいの収入しかないのです、バカにした言葉なのですが、哲学なども似たやうなもので、文学部を出た者などいい生活ができないといふことが当時の常識であったわけです。その後半世紀経ってみますと、印刷術はひろふること、このラジオ、テレビが甚大な支配力を発揮し、エロ小説家やタレントと称せられる者が躍り出て活躍し始め、いかげんな青年や、年端も行かぬ小娘が、たちまちのうちに億万長者の如きものになります。

私は、七四年生きてまゐりましたけれども、一生で一番驚くべきものは、おそらくこれではないかと思ふのです。三文文士のカテゴリーに入る芸能人が、今は実業家以上の金儲けができる世の中になったことです。つい先達てまで、代用品といはれていたものが、いつの間にか本物の道具や家具、衣類を駆逐してしまつたやうに、人間世界でも代用品の人間がすべての方面で本物を駆逐してゐるのが今日の姿であります。わけても、重要なことは、何も深い政治知識を持たない「大衆」が、印刷文明や電波文明の宣伝にあやつられて、これまた深い政治的叡智も政治家的徳性もためいいかげんな「代表」を選挙して国会に送るといふことです。かういふ、マス・デモクラシーの時代に、一体本当の政治といふものが出来るのか。かういふ問題が

出てまゐります。ひとつ問題をそちらの方に移して考へてみたいと思ひます。

二、議會制民主政治の問題

ハイデアルタイプスに固執することの愚[▽]

戦後のデモクラシーといふものの受け入れ方は、冷静に考へますと、まことに、でたらめ放題であります。誰が「民主主義」などいふ訳語を付けたのか知りませぬが、日本人はこの民主主義の中に凡そ考へ得る善いものはみんなこの中に入れて、デモクラシーは人民に仕合せをもたらすばらしい善政の政体だと考へさせられてゐるやうです。が、今日の民主政治は大衆民主政治で、これは政治素人の大衆が政治素人の「代表」を選挙する方式で、しかも今日は代用品が本物に取って代つてゐる時代です。このやうなデモクラシーは、もし放置しておいたら、むしろ悪政をもたらすのは当然で、早くプラトンは、民主政治は金権政治に転落すると申してをります。民主政治を成功させるには並々ならぬ工夫が必要なのです。また民主主義とは主権が人民にある政体だとされ、主権が貴族にあれば貴族政、主権が王にあれば王政と、極めて簡単に申されますが、これは理論的な類型のことにすぎませぬ。すなわちイデアルタイプス(Ideallypus)にすぎないので。だから現実に民主政治がうまく行つてゐる国は、その政体を具体的に見る

ならば、例へば英国のようにこの三つの政体の総合形態であるのが現実の姿なのです。

今世紀の初期に、イギリスにブライス卿といふ学者政治家がゐまして、二巻の大著「モダン・デモクラシーズ」(“Modern Democracies”)といふ名著を書いてゐますが、この中で彼は、本当に民主政治に成功した国は十数か国ほどであると言つてをります。さうして、ザ・デモクラシー(The Democracy)といふやうな、単数定冠詞の抽象名詞は実存しない、うまく行つてゐる国のデモクラシーは、それぞれの国民の性格を反映した個性豊かなもので、真似のできるものではないと言つてゐるのです。彼の著書の題名が「モダン・デモクラシーズ」と複数形になつてゐるのはそのためなのです。

△民主政治における最大の難問▽

今日国連には一五〇余りの国が加入してをります。戦後独立したアジア、アフリカ、中近東の国が参加したためで、大變な数の独立国が出来たことは、喜ばしいといへば本当に喜ばしいことです。それらの国々はみな最初から現在の進んだ「大衆民主政治」の方式を採りました。さうして間もなく全部失敗してしまひました。

まづ、インドネシアから西の方へ、シンガポールから北上してインドシナ三国、フィリピン、朝鮮へ、そしてまた、インドから中近東へ、さらにアフリカへと見てごらん下さい。どの国の

民主政治も長く経ってないうちにみんな失敗してしまひました。さうしてほとんどが軍部独裁政権になり、シヴィリアンの服を着てゐるけれども、実は軍人独裁の政権になつてゐるのが実状であります。

日本は、明治維新後、西欧風民主議会政治を採り入れるのに非常に慎重な態度をとり、長い準備期間を置きました。その間に国民教育に力を入れ、憲法を制定し、その後国会開設といふ段取りで進み、大正デモクラシー時代、本格的な政党議会政治に至つたこと御承知の通り。ただ遺憾ながら世界の動乱期に捲きぞへをくつて失敗致し、戦後新しく発足致したわけです。

それがどうですか、戦後は、金太鼓でジャンジャン宣伝でもすれば、それで民主政治が成功出来るといふやうな浮ついた気分になつてゐます。英国に「学問に王者の道なし」という諺があります。学問に近道なしといふことです。政治にも、民主政治にだけは近道はありません。日本が今日まで曲りなりにも議会政治に失敗しないのであるのは、日本民族は民主政治の一年生ではないのであつて、昭和の動乱期には失敗したものの、戦後を大正期のデモクラシーに接木してゐることが、他の国々と違ふ点なのであります。

それぞれの国の長い歴史から培はれ、風土や位置の特殊性と結びついて育つた政治法式の特殊性、民族精神の個性ともいふべきものを民主議会政治の制度や運営方式の中に多分に生かして行くのでなければ、民主政治は決して成功することはできないのです。わが日本は日本流の

ものを形成するやう民族の叡智を絞らなければいけないと存じます。

デモクラシーにはいろんな問題がありますけれども、最大の難問は、国家が非常状態に入ったときに、デモクラシーはどうやってこれを切り抜けるかといふ問題でせう。デモクラシーといふものは、まったくの平常時をモデルとし基準として構想され構成される政治方法です。議論をとことんまで尽して国策の見解を統合すべく努力する。さうして最後に決を取る。かういふ方式には時間といふものが抜きにされてゐます。これが平常時の特徴なのです。非常時といふのは時間が残酷なまでに決定性を有する状況であつて、時を失つてぐずぐずすれば、助かる命も失はれ、勝つべき戦も負けるといふ風なのが非常時といふものです。失つた領土は取返しもできませんが、失つた時は永劫に取返せませぬ。急を要する非常時には民主政治は極めて弱いわけで、このため緊急非常事態にどう対処するか。こゝに民主政治の方式が最大の智恵を絞らなければならぬ重大課題があるのです。

そこで、主観的に勝手なデモクラシーの構想をすることを止めて、民主政治といふものが、どこで発生し、どこでうまく成功したかを見てみたいと思ひます。

△アテネの民主主義▽

極くヒントだけの話になるかと思ひますが、民主政治といふものは、元来海洋民族の採つた

政治形態でございました。草原や砂漠の民族、大陸の民族で、デモクラシーを生み出した事實は、スイスを例外として一回もないと思ひます。

最初に、比較的短期間ですが、デモクラシーを成功裡に実現したのが、ソクラテス、プラトンなどの出る前のギリシャのアテネなのです。その頂点がペリクレスという不世出の政治家が出た時期なのであります。

ペリクレスの人物、デモクラシーに対する見解は、当時の有名な歴史家ツキディデスの「戦史」巻二の三四節から四七節、同六〇節から六四節をお読みになればお解りになります。今六五節「政治家ペリクレスとその識見」といふ、ツキディデスの評言の一部を読んでみませう。

「じじつ平和時におけるポリスの指導者であつたあいだは、かれはつねに穩健な政策によつてポリスを導き、万全の守りを固めた。そのためにかれの時代にアテーナイは最大の勢力を蓄へることとなつた。そしてついに戦争状態に入つてからも、ペリクレスは戦争におけるアテーナイの力量を正確に見通してゐたやうに思はれる。かれは開戦後、二年六ヶ月間生きてゐた。その死後、かれの戦争経過の見通しは一そう高く評価されるにいたつた。……………」

ペリクレスは世人の高い評価をうけ、すぐれた識見を備へた実力者であり、金銭上の潔白さは世の疑ひをいれる余地がなかつたので、何の恐れもなく一般民衆を統御し、民衆の意向に従ふよりも己れの指針をもつて民衆を導くことをつねとした。これはペリクレスが口先一つ

で権力を得ようとして人に媚びなかつたためであり、世人がゆだねた権力の座にあっては、聴衆の意にさからつても己れの善しとするところを主張したためである。……………

かうして、その名は民主主義と呼ばれたにせよ、實質は秀逸無二の一市民による支配がおこなはれてゐた。……………

（岩波文庫版 久保正彰訳）

ソクラテス、プラトンは、理想を賢哲政治に置いてをりましたが、実にペリクレスといふ人は、プラトンの説いた哲人政治家の面影を持った人ではなかつたかと思ふのです。

△共和制ローマ▽

ローマ人は、政治的天才民族と言はれる民族で、共和制が、何と五〇〇年も続いたのであります。平時には、今の言葉で申すならば首相とか総理大臣に当る行政の首長——「コンスル」と称したものを二人置いて、権力が一人のものに集中することを避けました。この例から推察されますやうに、以下の諸行政部門に皆権力分散方式を採った珍しい方式を成功裡に行った民族です。ところが一度び、非常時に際会しますと、元老院が二人のコンスルの中から一人を「ディクタール」に選んで、この「独裁官」に、財政上の権限だけは除いて一切を委任し、存分に手腕を発揮させるといふやうな制度を採用したのです。ただこの独裁官の任期は半年と定めました。しかしローマも漸次大きくなり、地中海を内海とする大帝國に成長しました。動

乱や戦争は半年では解決できなくなり、かくてスルラ、次にケイサルといふ、「生涯独裁官」が出現するやうになり、ここにローマの共和制は滅び「ローマ帝国」に変貌致したわけです。

ギリシア人でローマの歴史を書いたポリビオスといふ人が、その「歴史」の中で、共和制時代のローマは、王制と、貴族制と、共和制と、この三つを総合したやうな政治形態を駆使したといふことを申してをります。平常時は共和制でいいが、非常事態に入れば、元老院とデイクタートルの合作で危機を克服する。デイクタートルの制度は、まさしく短期の王制とも見るべきものであるといふわけです。

△三政体の巧妙なる統合▽

イギリスは、ヨーロッパで一番民主政治に成功してゐる国だといふのが衆目の一致するところですが、いかにデモクラシーが進みましても、ちゃんと貴族院はあるし、貴族制度は未だに廃止してをりません。それに王室がございまして、ブリティッシュ・コモンウェルス(British Commonwealth)の統合の「シンボル」とされてゐるわけです。大体このイギリスを模範にしてゐるのが、オランダ、ベルギー、さらに、スカンディナビア諸国と言つていいでせう。何もデモクラシーだからと言って、モナキーの要素やアリストクラシーの要素は絶対にあつてはい

かんといふ風の偏狭な愚かなことは歴史の長い西欧にはございませぬ。

アリストクラシーの要素とか、賢哲政治の要素とかを少なくとも「元老院」風の処に存置することがなければ、私は大衆民主政治がうまく行く道理は決してないと思つてをります。日本の参議院は、力の少い衆議院で元老院の要素は少しも存しませぬ。賢哲どころか、タレント候補でなければますます選出されることが難かしくなつて来てをり、時と金の無駄使ひで、衆議院と同じ「選挙」といふ方法に訴へる限り避けられぬことであります。

アメリカは、古代もなければ中世もない、王制もなければ封建制度もない、歴史真空の無人の原野に建国した国です。ロックの国家契約説を、あたかも物理学者が実験室で実験をやるやうに、歴史真空の中で偶然実験できた稀有なる国であります。この点でスイスといふ小国は多くのカントンから成り、アメリカ合衆国と同じ事情の上に成立した連邦であります。

しかし、このアメリカ合衆国でも、南北戦争といふ、国家崩壊の恐れのある非常状態に際会した時は、リンカーンといふ傑物の大統領がゐて独裁権限を行使いたしました。これで非常状態の時には、大統領が、憲法の規定にあらうとなからうと、独裁権限を行使する慣行が出来たと見られます。ケネディ大統領は例のキューバ危機の折、この独裁的権限を行使して成功を致しました。ルーズベルト大統領は縦横に独裁権限を振るひましたが、リップマンの云ふ「グレート・ミステイクス」を犯しました。これが第二次世界大戦が平和の獲得に失敗した根本理

由です。とにかく、このやうに自由に、平時と非常時の使ひ分けを、たとへ憲法の条章になくても、やってみるのがアメリカ民主政治の特徴でして、やっぱり、アングロ・サクソンの融通性といふものが、このアメリカにも伝はつてゐると、私は解釈してをります。

主権のあり場所によって三つのイデオロギイを区別し、民主政を主権在民と決め、平時の没時間的運営方式に固執し、常時であれば非常時もある現実を無視して行かうとするならば、非常状態に直面した場合はどうするんだといふ、ここに民主政の生か死かが係つてゐるのです。王政、貴族政、民主政——この三つを時と場合により、うまく活躍させ統合して危機を脱するか、さういふダイナミックな政治機構を法制なり慣行なりで行ふ。これが民族の政治的智恵と云つてよい。それができなければ、大衆民主政治といふものは、やがて、必ず、どこでも、バタバタ失敗して倒れてしまふ運命にあること明白です。

三、現代の戦争と平和

△ゼノサイドの危機▽

さて、政治の問題もいろいろあるのですが、それと密着してゐる今日の問題として、現代の戦争はいつたいたどうしたら防げるのか、もう防げないならどうなるのかといふことについて、

皆さんに問題を提起しておきたいと思ひます。

前に現代は「世界戦争」の時代になったと申しました。道具の時代には、一地方の、一王家の戦争であつたものが、機械の時代に入り、資本主義経済が発達するにつれ、「国民」経済が出現し、ナショナル・インタレスト(National interest)といはれるもの、「国民的」利益といふものが成立するやうになつた。この段階になつて戦争も「国民」戦争となります。更に科学技術が世界に普及し、経済面で国家間の相互依存関係が成立し、それが緊密になると、国民戦争は「世界」戦争に拡大してしまひ二〇世紀は世界戦争の時代に入つたわけです。いつも世界戦争が起きてゐるといふわけではないのですが、放置しておけば、多くのものが世界戦争になる可能性が発生したといふわけです。朝鮮戦争でも、アラビアやイランの石油の問題でも、その紛争を局地化する政治活動を怠れば、やがて世界戦争になるといふ可能性が濃厚になつて来てゐるのです。

ただ今日の世界史的状态では、単に国民戦争から世界戦争へといふ傾向にとどまらず、その世界戦争といふものが、実に兵器にあらざる兵器、これを持って戦へば、人類が自他共に消滅するやうな凶器を持って戦はれる可能性があるのであつて、ゼノサイド(genocide)といふ大悲劇を惹き起してしまふ危険な状態になつて来たのであります。

核兵器は、毎年、広島、長崎で「原爆許すまじ」と歌つて会合が——日本人だけでなく、世

界から参加する大会合が行なはれて、その禁止を要請してをります。が、三〇年一日の如くやつてゐても、核兵器はなくならうとはしません。またなくさうとはしませんね。しかも幸ひ世界戦争、核戦争にはならず済んでゐる。それには、この兵器にあらざる超兵器が、逆に世界戦争の勃発を阻止する相互の抑止力になってゐることは事実だと存じます。が、抑止力があるからと言って安心できるものでせうか。

既に専門家の間では、最悪の事態を想定して、この兵器にあらざる兵器が使はれた場合の生き残りの問題が検討されてをります。今の知恵では、たとへ敵方から先制攻撃を受けても、空中に待避してゐる航空機や、海中に待機してゐる潜水艦からの核報復ができる、さうして相手側にも壊滅的打撃を与へることができる、といふやうなところでの最終的抑止に期待し、巨大な待避壕によって国民の一部が生き残るといふやうな方法が考へられてをるやうです。

△針谷夕雲の相抜剣法▽

私は戦後、この問題をずっと考へて来てをりますが、それにつけても、針谷夕雲といふ元禄時代の剣客のことが絶えず偲ばれてなりません。この剣客は神陰流の奥義まで行っただけでなく、中国の戈の術も兼ね備へて、当時天下無双とされた剣客なのです。戦前ですが、富永半次郎といふ方が個人雑誌「一」といふのを寄贈して下さいましたが、或るときその中で、こ

の針谷夕雲の「相抜け」剣道の事を連載され、針谷夕雲なる剣客のゐることを知ると共に、宮本武蔵「五輪の書」を最高位に考へてゐた迷妄を打破されると共に、日本武士道の到達した至高の境地に驚嘆し、私は種々の問題を考へさせられて今日に至ってゐる次第です。

剣術の極地は、「相打ち」です。もう、剣術最高のところまで技倆が達すれば、勝敗の決するところはなく、当然相打ちとなります。武蔵と小次郎の巖流島の対決には、どこかに紙一重の差があった筈です。ところが針谷夕雲によるとこれはまだ畜生心の剣術で、その極致は相打ちとなる。敵に勝ちたいといふ一心で剣の腕を磨く、さうして最高のところまで行ったなら、流派は問はず相打ちになる。これを針谷夕雲は、畜生心の剣道と称しました。

針谷夕雲も神陰流と中国戈の術を使つてゐた時代は、この立場でした。彼はある時、剣が使へなくなりました。さうして、あちこちの禅寺で参禅を致してゐるうちに、遂に悟りを得まして、剣に戻り、自分の新しい剣道を「あいぬけ剣法」と申したのでさうです。学問もなく、一文字知らずの人物で、その伝記も詳しいものではありませんが、あい抜け剣道の極致に達した弟子の一人、一雲といふ人の口伝の伝記がありますが、残念ながら重複や欠損があつて、甚だ不十分のものです。が、その中で、自分は三度師匠と真剣をもって相対した。さうして三度とも相抜たと申してをります。そして相抜けのたび毎に、師匠は、自分を前に座らせて、うちから香をたき、念珠を取り出して、自分を伏し拝んだと言つてをります。

何も弟子を拝んだわけではありませぬ。相打の剣法では、双方畜生心の次元です。相抜け剣法の次元では、自分の前の弟子の心は「聖」なのです。私は「仏」とか「仏心」とか申した方が一層適切かと存じますが、夕雲は「聖」と云ってゐたやうです。師匠は自分の弟子の中のこの仏を拝んだわけです。

日本の元禄時代に、何故かかるものが、このやうな境地が開かれたのか、不思議に思つてゐるのです。大根を切るやうに切りまくつてゐた戦国争乱期には却つて真実至高の境地には達せなかつたのかも知れませぬ。私は抑止力が核戦争を僅かに阻止してゐますが、その抑止力は「相討ち」に他ならず、その立場は「畜生心」だと思ふのです。今こそ「相討ち」から「相抜け」に飛躍すべき秋ときに直面してゐるのではないか。核兵器軍縮を何遍やっても成功しない現状を一挙に打破する何かの「はづみ」を作る機会、機縁はできないものか。私はそのやうなことを寝ても醒めても思つてゐるわけです。

△世界戦争防止のための若干の問題提起▽

前世紀の末、戦争の何もない時に、ハーグで平和会議がもたれ、軍備縮少は失敗に終はり、第二回目が一九〇七年、同じくハーグで開催され、ここで、海戦法規と、陸戦法規が出来ました。その後、少し修正されて国際法になってをります。これによって、戦争に参加せざる中立

国の利益は守られることになり、非戦闘員の生命は重んじるといふことになったのです。が、第一次世界大戦が起きてみると中立国の利益は守られず、海戦法規は紙クズとなりました。陸戦法規の定めた人に関する規定、例へば、戦意を自ら捨てた者、かういった者に危害を加へてはならないといふ条項は、守られたでせうが、飛行機の出現で銃後の工業地帯では守れなくなりました。第二次大戦では戦略爆撃が大挙繰返され、最後に広島、長崎が原爆で蒸発させられて、折角の国際法も滅茶苦茶になったこと、申し上げる必要もございません。

国連の心臓に当る安全保障理事会は、今は事実上その機能を停止してゐると言つてよい。その原因は、米、ソ二つの常任理事国だけは、いかなる悪逆無道をやりましても、安全保障理事会と国連警察軍がこれを処罰することは不可能だといふことにあるのです。日本は安全保障理事会の常任理事国になりたいと先般立候補しましたが一小国に敗れました。二、三番目の高い経営維持費を出してをり、国連大学などまで日本に招致してゐるのですが、一体世界平和のため何を提案するつもりなのでせうか。

私は、国連を蘇生させ、安全保障理事会の機能を復活させるためには、日本あたりが率先して「兵器とは何ぞや」「戦争とは何ぞや」と、その定義を決めるといふ議を提案すべきだと考へてゐます。これが「相抜け剣法」を現代に再現する唯一の道だと思ふわけです。何年、何十年かかってもかまひません。これをやってゆく以外にはないと思ふ。抑止力に頼るのはまだ畜生

心剣道、相討ちの次元を抜け出てをりませぬ。その結果自体には大したことは期待できないかも知れませんが、「定義」問題の論議を続けてゐる間はまづ使用の邪念は起さずに済み、「相抜け」の尊い心境の片鱗に現代文明人も触れるかも知れず、いろいろの好ましき副産物を生むでせう。この副産物を畜生心から迷路に陥つてゐる国連安全保障理事会の中から出すことが、私の狙ひなのです。

今は原爆製造などマサチューセツツ工業大学の卒業生でも出来るといふことですから、何も現在世界中で保有してゐる核兵器を全部なくする必要などありません。十分の一か五分の一かを残しておく。これを地球上十か二十の島に配置しておく。そして国籍を離脱して人類平和に挺身しようとする軍人兵士で護衛し、人類に対し核を使はうとする対人類反逆罪の者に対して、国連の命令により処罰を加へる、といふやうな道を残しておく事が出来ないことかと日夜考へてをる訳です。

私は年もとり、いい考へが出る自信もありません。皆さんの若い頭では是非考へてもらひたいと思ふわけです。そのためにも、前に触れました針谷夕雲の相抜け剣法のこと、頭に置いて少し御研究いただきたいと思ふのです。

四、新しい人間と社会の理念

△第三の道▽

いろいろ申し上げるつもりで参りましたが、時間もございませぬので最後のところを一つ申し上げておきたいと思ひます。

私はもう、共産主義だの、科学的社会主義だのといふ十九世紀の思想を振廻して、大真面目に議論したりする時代ではないと思ひます。ソ連での共産革命の実験、中共での共産革命、文化大革命の実験、いづれも皆初期の目標、マルクス唯物史観の予言からは懸絶し、失敗してゐるではありませんか。最近では、旧仏印三国の革命と称するものが生み出した悲惨極まりない状態を考へただけでも、これがマルクス主義の共産革命といふのでは、マルクスが活き返ってみたらどんなに立腹するか判らぬと存じます。敗戦の灰燼より見事に復興した日本や西独の事実を考へれば、古臭い資本主義だの、進歩的な社会主義だのといふのは、歴史的現実に全く無感覚な、云ふならば思想「音痴」歴史「音痴」の連中のたわ言に過ぎませぬ。今こそいづれをも一応ご破算にして、ある新しい、人間観、社会観を構想したらと思ひます。その際特に「所有権」といふものの本質を検討してみたら新しい道が開けると思ひます。

資本主義も、共産主義も、この所有権の觀念を中心に物を考へ、それが誰に帰するかといふことで構想され、不倶戴天の敵対関係をなすのでありますが、大雑把に言つて「個人」に帰属

させるのが個人主義、自由主義であり、反対に社会に帰属させるのが、社会主義、共産主義であるといふ考へ方を致します。そしてその極端類型を大まじめに考へるところに現実離れの無理があると私は考へるのです。既に、スイスやドイツの経済学者の中に、「第二の道」といふことを言ふ人があります。レプケ、オイッケンなどがその代表で、この人々の思想でエアハルト経済相による西独の経済復興——奇蹟の復興といふものがなされたのであります。私は別の視点から、相似た「第三の道」を考へてをりますので、この問題をとり上げてお話しませう。

△「ゲノツセンシャフト」に於ける「ゲザムトアイゲントウム」▽

皆さんは、ドイツのテンニス(F. Tönnies)といふ社会学者を御存知でせう。十九世紀末葉の人です。彼は、人は生まれながら自由・平等といふ啓蒙主義哲学の人間観によって構成された社会を社会唯一の型とするのに抵抗した学者です。自由平等の私的個人を成員とした社会の模範は町人社会です。この都市社会、商工業社会、これを学術語としてゲゼルシャフト(Gesellschaft)と名付けました。さうして、これだけで人間社会を全部割り切るといふことは、途方もない間違ひだとして、もう一つの型、ゲマインシャフト(Gemeinschaft)と名づけるものを考へたわけです。そしてこのゲマインシャフトの構造を明らかにするときに、彼はヘンリー・メイン(H. Maine)の「古代法」(Ancient Law)と、オットー・フォン・ギールケ(O. V.

（Gierke）の「ダス・ドイチェ・ゲノッセンシャフトツレヒト」（“Das. Deutsche Genossenschaftsrecht”）、この二者のお世話になったといふことを申してをります。そしてゲゼルシャフトの構造を明らかにするときには、アダム・スミスの「国富論」、マルクスの「資本論」、この二つの恩恵を受けたと言つてをります。

実はこのテンニースは、ギールケの、「ゲノッセンシャフト」をよく読みまして、ゲメインシャフトとは少し別の社会を構想したいといふ気持を持ってゐたやうですが、それができず、つひに第三の社会類型を考へるところまで至らずに死にました。

ゲメインシャフトの類範は家、家族——即ち血縁団体で、村はその集りです。ゲゼルシャフトの典型は、今申したやうに株式会社で、商工業都市社会がその集りです。両者では人間関係がすっかり異なります。団体、社会の觀念が異つてゐるわけです。私はテンニースと異つて、更にもう一つ、第三に、ギールケの言ふ、ゲノッセンシャフト（Genossenschaft）、かういふものを置きたいのです。日本語では文字の上からは仲間団体とも呼ぶべきですが、記しようもなく、英人がこのギールケのゲノッセンシャフトを紹介するときは英語に当る適当な言葉なしとして、そのままゲノッセンシャフトとドイツ語で使つてゐます。問題はその構造にあります。これを詳細に、人間観、社会観として明らかにすることもできますが、今は「所有権」の在り方を説明申し上げませう。

今、人間観については時間もありませんので省きまして、ギールケが、前述の著者（四卷一八六八年より一九一三年に及ぶ。近年オーストリアから写真復刻版出づ）の中でも、またべルリン大学総長になった時の、就任演説でも、説いてをりますところのゲザムトアイゲントゥーム（Gesamteigentum）といふ、所有権の在り方について触れておきませう。

これは彼が青年時代に直観した古代ゲルマン民族に特殊な所有権の觀念への命名であつて、彼は生涯の長い歴史研究の過程を通じて、これが理想的な所有権の觀念であることを確信して行つたと思はれるものです。実は、これは特別にゲルマン民族の古代森林の農耕牧畜の社会生活にのみ見られるものではなく、戦前石田文次郎博士がその力著「土地総有権史論」（昭和二年）で明らかにしたやうに、日本の「入会権」が、このゲザムトアイゲントゥームと同じ構造をもつてゐるのです。

所有、所有権といふ事態は、実は、性質の異つたいろいろの権能の総合形態への命名なのであります。大きく分けても、管理権、処分権、用益権（使用权・収益権）といったものが考へられます。この全権能が共に私に属してゐるといふやうな物件がここにあるとしますと（例へば時計、本、万年筆等）、これが完全な「私有」で、この物件は私がどう使ひ、利用しようとして、これを人にやらうと川に捨てようと、どこにしまつておこうと、全く私の自由です。ところが、今私のもつてゐる本が学校の図書館の本でありますと、所有権の中の管理処分権は、学校とい

ふ団体の権能に属するもの、その団体の成員は用益権だけを持ってゐるといふ風に分割されて団体と個人（成員）に配当されるのです。私は本を自由に借り出して利用はできるが、これを勝手に売りとばしてビールを飲むといふやうなことはできない。かういふ所有権の在り方の方法もあるわけです。

団体に属する管理処分権、その構成員に属する用益権、この質的に違つた権能を合はせると、ここに始めて一つの完全な所有権になる。このやうに成員と団体自体に分割配当する所有権の姿を「総有権」即ち「ゲザムトアイゲントウム」といふのです。日本の入会権は御承知と思ひますが、村の山、野原などの土地に、村人が入って薪を拾つたり、蕨をとつたり、竹の子をとつたりすることは自由、ただそれは村の一員、村人といふ身分から許されることであり、山や野の土地、村の公有地で売買などは出来ない、さういふ権利を指してゐるものであります。ギールケは村とか町とかの土地で一切の所有の権能を村が独占し、その成員に用益の権能も許さぬやうな形態のもの——つまり国家、社会、団体の「私有」に対して「総有」を主張致したわけです。その上ギールケは、所有権の権能を団体と個人に分割配当する場合、それぞれの物件について同じでない、物件の性格によって用途なり保護なりは違ふのであるから、物件の性格を無視することなく、物件を活かすやうに適宜に配分してきたことを説き、これをザッヘンインデイヴィデュアリズムス、(Sachenindividualismus) 即ち「物件個別主義」といふ、ま

ことに巧妙適切な言葉を以て表現致したのであります。

かういふ物件個別主義を採用した総有の形態は、何も入会権や図書館の書物利用だけでなく、実は人間生活の随所に存してゐるのであり、而も古い時代だけでなく、現代にもいくらかも存するのであります。町の運動場、公園、競輪競馬場等々がさうではありませんか。何もギールケ先生の説を借りなくても、いろんなところで人間はこの総有といふやうな形の権利分割を實際にやつてゐたのです。少し大げさに言ふならば、歴史発展の中にあつて不変の所有形態で、人類の良識が同じ民族の中で続けて来たのであります。ここで私は新しくその事実に気づき、それをよく考へてみたらどうかと言ひたいのです。

かう言へば諸君の中にも、さうか、人類の良識が古くから良識的な所有形態を無意識のうちにも続けて来たのに、それが何かの際に非常識に転化してしまつたのではないか、といふ考へが浮かぶと存じますが、如何でせうか。諸種の違つた伝統習慣の民族が一国家の中に生活するやうな場合は、これが生じ易い。事実、西では、ローマが地中海を内海とする大帝國(Gimperium Romanum)を建設した時がさうで、こゝに「ローマ法」が出来ますが、その際、色の白黒などの人種別を超越し、民族固有の慣習を超越する抽象的な「人格」が法や権利の主体とされる破天荒のことが生じました。これと呼応して全く抽象的な「物件」觀念も生まれ、社会と個人は「公的」と「私的」と対立し、所有権も分割することなく、全権能を公的社会が享受し、

或は私的個人が全権能を享受するといふ現象が否応なく発生致したわけです。ここに古代慣習法として存続し来たった良識が姿を消し、ローマ法を継受して後のゲルマン民族からも漸次影が薄くなつて行つたのであります。

そして商工業の発達と共に、これが決定的となり、人は生まれながら自由平等の個人なりと、男でも女でも、親でも子でもない「純粹個人」が大まじめに考へられ、この純粹個人が何千年か何万年かの大昔、契約（社会契約）で社会を制作したと、大まじめに主張する近代に入り込んだ次第なのです。あとは自由主義から社会主義へと、誰も知る通りの思想発展が行なはれるだけで、良識の復活は生まれる気配もない次第です。

近代資本主義にあつては、一切を個人私有の対象とする自由主義の立場から出立します。即ち諸権能の全てが「個人」資本家に属する私有から、ここに搾取が当然起つてくる。ローマで奴隷となつた人間は人格をもたぬ物件でした。ローマ史を知つてゐたマルクス、エンゲルスが、この古代奴隷のやうな奴隷化が近代資本主義でも起きると想定したことは、私達も想像できません。さうして次には階級闘争が起きる。その最後の階級闘争がプロレタリア革命であり、今度は一切私有を止めて共産主義とする。たゞ廃絶されるのは個人の私有で、今度は諸権能全てが何かに属するやうになる。この何かが共産党の支配する「国家」、或は「党」であることにならざるを得ない。ソフォーズが良い例で、管理、処分、使用、収益全ての権能が、国家の手にあ

り、その農場員にはない。農民は工場労働者と全く同じ賃金労働者になりました。ですから、例へば農場で夜中に牛がギャーギャー鳴いて死にかけ始めてゐても、私有の存した農業、農場の世とは異なり、介抱しないで死んでも農場工員は一文も自分の腹を痛めません。農業牧畜を、雨が降らうと風が荒れようと、そんなことに関係なし労働のできる工場と同一視して成功する道理はありません。失敗するのは当然で、現に失敗しました。

コルホーズでは、住宅附近のある一定の土地では、牛何頭、にはとり何羽、野菜栽培は自由、といふやうに、所有の一部がコルホーズ員には認められます。ここから出るものは、認められた自由市場に持って行って売る。それが自分達の収入になるやうになってゐます。だからみんな一所懸命になるわけです。こゝだけが新鮮なものの手に入る場所となつてゐるやうです。フルシチョフは、コルホーズのお蔭でソ連人は救はれてゐると申したことがあり、近年コルホーズの面積はふえて来てゐると言はれます。二つの農場を比較してみただけでも鮮かなやうに、物件によって異なるべき所有の諸権能の配当を全然考慮に入れず、工場生産同様、全部を党か国家に属させて、国家の私有に化してしまひ、構成員には何の権能も分与しない方式が陋巧か、それとも、これをうまく物件に応じて分けて、構成員にも配分して利を手中にさせる方が陋巧か、答は自から明らかではなうか。ソ連の実験で国家私有といふ資本主義を逆転しただけの智慧のないやり方が駄目なことは極めて明瞭であります。ギールケの言葉でゲノツ

センシャフトといふ新しいソーシャリズムが、といふより自由主義とソーシャリズムの新しい総合が出たって良いのではないでせうか。

△「公」と「私」の調和▽

人類がもしさういふ所有権の原理を採用すれば、人間は社会の中で、「自分のため」に生きることと、「他人（構成員）のため」に生きることと、この二つが立派に組み合はされ、相互する「公」と「私」とが調節され調和されることが実現すると、私は考へるのであります。われわれ日本人が、人の住む世の中、世間を意味する漢語の「人間」を、同時に「人」と同意味の語に使用して来てゐることに、偶然かも知れませぬが、上のやうな考へ方が伴つてゐると言へませう。

人には、親子のやうに切つても切れぬ縁があるのかかはらず、一旦、母の胎内から生まれ出ると、赤の他人といふ個人、絶対的個人ともなります。子がいかに重病にかかつて苦痛を訴へようと母の肉体は痛まず、死に至る場合、親がかはって死んでやるといふ代死は不可能であります。即ち母子も全く赤の他人で、二個の個体である面が存するのです。このやうに人は人間で、方向相反する二つの面、人倫を綜合してゐる存在です。社会と個人といふ二面について、或は「公」と「私」といふ相反二面について、私達はこれを詳細に拾ひあげて考察することが

できます。そこで所有、所有権を問題とすると、所有の対象となる物件の性格、性質によって、所有権の包蔵する諸権能を、どういふ風に公的の社会と私的の個人とに配分し配当するのが妥当かといふ良識が働き出しうるのであって、ここに新しい発想を働かせて行くなれば、何も社会主義だと言って革命騒ぎを演ずる必要はなくなると思ふのです。

私はこれを今日の状況では「第三の道」と言つたら良いと思ふだけのことです。前に述べましたやうに、スイスや西ドイツの経済学者の間に、すでに第三の道といふことを言ふ学者が居りますが、いかなながら、偉大な、ゲルマン法の大歴史家であると同時に、立派な哲学者であつたギールケの「ゲノツセンシャフト」の理念が活かされてゐないやうに思ふのです。

よその国がやらないのなら、私は日本が率先してやつたつて良いではないかと、かう考へてをるのであります。

■ 青年研究発表

混乱した教育現場に
身を投じて感じたこと

福岡県立若松高校教諭

坂口秀俊



ただいまご紹介いただきました坂口でございます。私は昭和五十一年から福岡県北九州市の若松高校に勤めてをります。この私の学校で、今年三月一日に行はれました卒業式で、国歌斉唱が行はれた時、一音楽教師による妨害事件が起りましたことは、マスコミを通じて大きく報道されたことにより、大多数の方はご存知かと思ひます。しかし、その後のマスコミの報道には残念ながら著しい偏向がありました。例へば、その音楽教師の伴奏はジャズ風であったと報道されました。卒業式の場合国歌をジャズ風に演奏したとすれば、そのこと自体大変な問題だとは思ひますが、実はあの卒業式の場合にゐた者の感じではジャズ風といふよりも完全な妨害であり、ピアノの乱打でありました。また、その音楽教師は服装等の問題により五月八日付けで分限免職になりましたが、日教組系の福岡県高等学校教職員組合、いはゆる高教組に属してをりましたため、日教組はマスコミと一体になりました。この教師に対する処分には右翼的な背景がある、として弁解にこれ努めました。実は私も、その攻撃の目標にされましたが、名前こそ出さないものの、私のことを約一ヶ月に亘り連日新聞に書きたてました。そのことはここで改めてとりあげる必要もないと思ひますが、ともかく此の度の事件を通じて、私はマスコミの報道のいい加減なことを身にしみて感じました。

さて、私は昭和五十一年に若松高校に赴任したわけですが、福岡県の教育界は荒廃してゐることは聞いてをりました。想像してをりましたよりもはるかにひどく、生徒の遅刻や無断早

退・欠課等、目をおほふばかりの状態でした。また日教組の年休闘争等により、一日の授業のうち半分が欠けるといふことも度々あり、若松高校だけではないと思ひますが、これでも学校かといふやうな状態でした。このやうな状況の中で、一体これからどうしたらいいか途方にくれるやうな思ひをいたしました。この合宿教室で教へていただいた諸先生方や、月に一度の輪読会での先輩や友人の叱咤激励により、やはり私は日本の歴史を教へるために教師になったのだと考へ直し、授業にうち込むやう勤めました。当り前のことではありませんが、ともかく授業中に私語や内職をさせず、きちんと聞かせることから出発いたしました。半年ほどその努力をいたしまして、二期期の半ばくらゐ、十月くらゐから生徒もやっとともに私の授業を聞いてくれるやうになりました。

そのころ授業で日露戦争の話をしました時、広瀬中佐のことにふれまして、広瀬中佐が柔道の達人であったこと、ロシア留学後ロシア女性との恋愛の話、旅順に出陣する際の遺書等の話をしまして、その後私は文部省唱歌「広瀬中佐」を皆の前で大声で歌ひました。すると生徒達は非常に喜びまして、教室が破れんばかりの拍手が起りました。その時は私も精一杯やっただつもりでしたので、非常にうれしく思つたものです。同じやうに東郷元師や佐久間艇長の話もしました。しかし、かういふこともあって、そのころから坂口先生は右翼ではないかといふ声も起こってきました。確かに生徒達はすなほに広瀬中佐の話には感動するけれども、小中学



校以来平和教育を受けてきた子供達の中には、私の話を戦争を礼讃する考へ方のやうにうけとめ、私を右翼であると思つたのも当然でせう。

二年目になりまして、わりに落ち着いて考へることができるようになりました。そのころ私は、去年私が右翼と呼ばれたのは無理もないことだった、あのころはあまりに感情が先走りすぎてゐた、また天皇の御製を紹介する際にも、自分としては精一杯やったつもりだったけれども、うはすべりに終り不十分な点が多かつたと反省いたしました。

歴史上の人物に愛着をこめて語る
ことと、ファナティックになること
とは違ふのだと思ひ、ともかくこの
一年間つとめて実証的に冷静に、し
かし父祖の足跡を偲びつつ語ること
を肝に銘じて教壇に立ちました。

かうして二年目も終りまして学年末
考査の折、一年間の授業の感想文を
生徒に書かせてみました。その中の

二人の文章を紹介しておきます。

「坂口先生は授業を受ける前はみんなから右翼であると聞かされていたし、何かいやだった。しかし、先生の授業を聞いてみると、今まであまりに日本の歴史を知らなかったことが恥ずかしくなった。これからは少しでも勉強したいと思います。」

「中学校の歴史の時間に、先生から天皇の悪口ばかりを聞かされていたので、坂口先生が天皇誕生日の前日に今上天皇御製のプリントを配布した時はイヤだった。しかし、日清戦争や日露戦争の話聞いていくうちに、だんだん日本史が好きになりました。やはり私は日本人です。」

実を申しますと、生徒達の感想文を見るのはこはかったのです。しかし、この文章を読んでほっとしました。又、やれば出来るのだ、といふ自信みたいなものもわいてきました。

若松高校に来て三年目、五十三年になりました、春休みに次のやうに考へました。歴史といふのはやはりきちんと史料を読むことから出発するわけだから、史料として高校生が理解しやすいやうな平易な文章で書かれた手紙を使って、偉人、英雄の心を偲んでゆかう。大体かういふやうに考へたわけです。いろいろな人の手紙を授業中に紹介しましたが、そのうち、ここでは野口英世のことをとりあげた時のことを述べてみます。

野口英世について語る場合、一人の生徒を指名して「野口英世について君が知ってゐること

を何でもよいから話しなさい。」と言はせませす。すると大体次のやうに申します。「福島県の会津若松の近くの貧農の家に生れ、小さい時にゐるりに左手を突っ込んで大火傷をし、左手が不自由になった。しかし、その後その不自由な左手を手術して貰ったことが契機となり、医者になる覚悟をして苦勞の末米國に渡り、梅毒や毒蛇の研究に偉大な功績をあげた。その後アフリカで黄熱病の研究をしてゐるうちに、その黄熱病に感染して亡くなった。」大体かういふやうなことを生徒は語ります。

そこで、丁度日露戦争の折、明治三十七年二月に、野口英世がデンマークのコペンハーゲンから故國日本の恩師血脇守之助に宛てて愛國の情あふれる手紙を送ったことを語り、その手紙の全文を紹介しました。その内容を少し申しますと、

「^さ儲て今回の日露戦争は二十七八年役の復讐をかね我國の積怒をはらす戦争なれば國民の一致協力すさまじき事と存候。二月八日より度々の旅順海戦常に我軍の全勝に帰し、氣強き事に候。」その後、ヨーロッパが日本を見下してゐることを述べまして、最後に「偏に我軍の全勝を祈り併せて皆々様の御健康を禱上候。」——すると、小学校以来科学者としての一面しか知らなかった生徒達はびっくりしたやうな顔をします。日露戦争といふのは軍人だけが戦った戦ひではない。外國にゐる日本人をも含めた全日本人が一丸となつて、大敵ロシアに立ち向つたのだとわかるわけです。

かういふやうなことを積み重ねていくうちに、少しづつではありますが、日本人としての自覚がよびさまされてきました。そのことが端的に表れましたのが昭和五十三年の九月に行はれました、若松高校の体育祭の閉会式にあります。

若松高校では入学式、卒業式には国歌を斉唱するといふやうなことはありませんでしたが、体育祭の折にはブラスバンドの演奏で国旗を掲揚、そして降納することが毎年行はれてをりました。閉会式も無事終りのはうになり、国旗を降納する段になりました。ブラスバンドの「君が代」の演奏がはじまりましたが、その時、思ひもかけず三年生の一部から「君が代は千代に八千代にさざれ石の……」といふ声が出てまゐりまして、いつの間にか会場全体の大合唱になりました。私は感動のあまり胸が熱くなり、身体がぶるぶる震へました。誰が指揮したわけでもないのに、本当に極く自然に国歌斉唱はできたわけです。卒業式の時の国歌斉唱は実はこのことが契機になり、卒業式では是非国歌斉唱をしたいといふ声が三年生の中から出てきたのです。三年生を中心として、生徒独自で五十四年一月に署名運動が始まりました。またたく間に三年生の八割以上の署名が集まりました、生徒会を経て学校に提出されました。

このやうな生徒の動きとは別に、体育祭のこともあるし、卒業式では是非国歌斉唱しなければならぬといふ私たち十数名の教師も学校長に強く働きかけ、PTA、同窓会の動きも活発になり、二月の職員会議の結果、約二十年ぶりに国歌斉唱は実現したわけです。

冒頭に申しましたやうに、心ない教師により国歌斉唱の妨害といふことがありましたけれども、立派に国歌は斉唱されました。

卒業式、入学式における国歌斉唱といふものは、山積してゐます戦後教育の問題の一つにすぎませんが、荒廃した教育界で国歌斉唱を実現させるといふことが、私にとっては実に険しいことでありました。しかしどんな険しい道でも精一杯やれば開くことができるといふことを、若松高校でのさまざまな経験から体得し、そのことを強く確信してをります。

ご静聴ありがとうございました。

いのちを見つめて

福岡県宗像郡玄海小学校教諭 前園 由美子



津屋崎海岸

只今、ご紹介いただきました前園でございます。一昨年鹿児島大学を卒業し、現在、福岡県宗像郡で小学校の教師をしてをります。

学校のまわりは、田畑が広がり、近くには海や川もあり、大変自然に恵まれた所です。現在私は、四年生を担任してをりますが、この子供たちを三年生の時から受け持ちました。子供たちに接してゐますと、その素直な心に驚かされるのが度々あります。その一つをご紹介したいと思います。

三年生の時、理科の学習で、ヘチマの観察がありました。子供たちと大きなヘチマを育てようと、一センチほどのヘチマの種をまきました。夏休みに入るころになると、はじめ組んでいた竹だけでは足りない程にヘチマが伸びてきました。そこで、子供たちは、二階の六年生の教室のテラスから、太い針金を下ろして、それにヘチマを伝はらせることにしました。夏休みの間に、ヘチマはぐんぐん伸びて、もう二階にとどきさうになったので、また、三階まで針金を伸ばしました。子供たちは、登校日毎に、大きく育ってゐるヘチマを見上げては、驚喜喜んでゐる様子でした。

このやうにして伸びたヘチマを、九月になると根や茎の働きを調べるために茎を切ることになりました。そのことを子供たちに話すと、口々に「かわいさう。残酷だ。」と言ひ始めました。私は、はっといたしました。子供たちは、私が思つてゐた以上にはるかにヘチマの命を感じて

るたのです。ヘチマが切られるのが、まるで自分が切られることのやうに感じられたのでせう。私は、このやうな子供の素直な心に触れ、ほんたうに嬉しく思ひました。

その日の学級通信に載せた歌です。

口々にかわいさうよと言い出せる子らの心の清らなるかな

このやうな子供たちの清らかな心に接してゐますと、まるで私の心までも、やはらかく清らかになっていくやうな気がするのです。科学する目も大切かもしれませんが、ヘチマ一本にも心を通はすことのできる心こそ、人として生きていく上で、より大切なことではないでせうか。

このやうな素直な心、やさしい心を大切にしたいと思ふやうになつたのは、大学時代に読んだ岡潔先生の「日本の心」といふ本の中で、「人といふ存在の内容が心であり、心は幼いころに育てられる。」といふ言葉が心に残つてゐたからです。そしてもう一つ、岡先生の文章に次のやうなことがあります。

「人は、大自然の子であり、それを育てるのも大自然であつて、人をしてそれを手伝はしめてゐるのが教育なのである。」



とあり、「人づくりとか、人間形成とか言って、まるで人造人間を造るやうに思ふことは、無知も甚だしい。」と述べてをられます。

子供本来には、成長したいといふ願ひがどの子にもあると思ふのです。さういふものは、何もまわりから強制されて湧いてきたものではなく、人間本来持つてゐるもののやうです。さういふものを岡潔先生は、大自然といふ言葉で言はれたのではないでせうか。さう思ふと一人一人の子供が、本当にかけがへのない存在に思はれてまゐります。

さて、最近この岡先生の言葉が一層しみじみと感じられましたことを話させていただきます。私の組にリエちゃんといふ子供がゐます。この子は明るく無邪気なのですが、他の子と比較すると大変学力が低いのです。発音もダ行がラ行になってしまいます。ご両親は農業をされてをり、

毎日、お忙しい生活で、子供の面倒を一から十まで見るわけにはいかないやうでした。

四年生に進級してから私は、一人一人の子供とより近づいていきたいと思ひ、子供たちに日記を書かせることにしました。さういふ中で、リエちゃんも日記を書いてきました。たどたどしい字で、ほとんど平仮名ばかりの日記です。リエちゃんの初めての日記を紹介します。

「きょう雨ふりだったので、さおりちゃんがかさに入れてくれました。びしょぬれで帰りました。手がぬくかったので、さおりちゃんがつめたいだったので、ぬくくしてあげました。かさがかとんでいったので、わたしが、もってきてあげました。」

といふ文章でした。いっしょうけんめい書いた彼女の様子が思ひ浮かんで、私は、とても嬉しくなりました。そして、次を読んでみるとさおりちゃんの冷たい手を自分の手で温めてあげたといふのです。私は、かねて気がつかなかった彼女の心の世界に触れたやうな気がして、はっといたしました。このやうにしてリエちゃんは、休むことなく毎日日記を書いてくれるやうになりました。

ある日、教室ではうきが始末されてありませんでした。私が子供たちにたづねますと、皆、自分の責任ではないといふやうに顔を見まはしてゐます。その中から、すっと立ってはうきを取りに来た子がありました。リエちゃんでした。私は人が好んでやらない仕事でも進んでやるリエちゃんを褒めてあげました。そんなことが何回かあって、少しづつですが、みんなもリエ

ちゃんを見直していくやうでした。リエちゃんは、だんだん自分から手をあげて発表するやうな子になってきてゐました。ずっと心の中に伸びたいといふ思ひがあつたのだらうと思ひます。それから、「今日はこんなにしたよ。先生これみて。」と持って来るのでした。

実は、リエちゃんにとってかけがへのない手助けをしてをられる方があるのです。お母さんです。リエちゃんが日記を書き始めて二週間ほどしてから、お母さんが、五・七・五といふ俳句の形式で添へ書きをしてくださつてゐるのです。私は、お母さんの添へ書きを見てびっくりいたしました。子供たちには、添へ書きについては、指示してありませんでしたので、まさかお忙しいリエちゃんのお母さんが書いてくださるなどとは思つてもゐなかつたからです。しかもそれは、ただただしいながらも、俳句の形式になつてゐるのです。それは、日記が終る四十日余り毎日続けられました。ある日の日記を紹介します。

「今日、お母さんと二人で桃のふくろをかぶせに行きました。おかしやジュースを持って行きました。畑について桃のふくろとかねで作つたピンをこしにつけて、桃を一個ずついいいにかぶせました。わたしは六十まいかぶせました。とてもきつかつたです。」

このやうなリエちゃんの日記の後に、お母さんが、

「リエちゃん、とってもありがとう。お母さんは、ほんとうに嬉しかったよ。またしてね。休みなしいちご終れば桃つつみ」

と記してありました。いちごが終はれば次は桃といふ忙しい農家の様子と共に、さういふ中で、親子が心を通はせながら働いてゐる姿が浮んでまいります。そして、リエちゃんのお母さんの子供へのやさしい心遣ひが感じられるのです。お母さんは、毎晩、疲れた体で鉛筆をもたれたことせう。

さて、ある日、次のやうな俳句が寄せてありました。

「わが子供自分の道を切り開け」

かねての俳句と違ひ、何かお母さんの心の奥底の思ひがでてゐるやうな気がいたしました。そして、その句の傍にお母さんの文章が添へてありました。

「今日、『自然の家』に行きました。どこから来たのか口のきけない子、自分の体が自由にならない子、でも一人一人私を見て何か言おうとしているその姿を見て作ったものです。みんな手を振って別れて行った子供たちを見た時、なんとも言えぬ涙がこぼれてきました。」

このお母さんの文章に触れた時、私も目頭が熱くなってまゐりました。高学年のキャンプが県立自然の家でありました時に、養護学校の子供たちが来てをり、どの子も障害を背負ひながら懸命に生きてゐる姿を目にしたばかりだったからです。お母さんは、その子たちに自分の子供を重ねて思はれたことせう。「わが子供自分の道を切り開け」俳句といふにはつたないかもしれませんが、この句の中にお母さんの切なる願ひがこめられてゐるやうに思はれました。

学力が人にはまだまだ及ばないとしても、障害を背負って生まれてきた子供たちであらうと、あなたたちは、自分の伸びようとする力で自分の道を切り開いて行かなくてはならないのですよ。そのやうなお母さんの思ひが伝はってまゐりました。

岡先生の「人は大自然の子であり、それを育てるのも大自然であって、それを手伝はしめてゐるのが教育なのである。」といふ言葉が思ひ起こされてまゐります。リエちゃんが、自分から進んでものごとに取り組むやうになったのは、彼女自身の成長したいといふ願ひと共に、子供の成長を祈り子供を励まし、自ら努められたお母さんがあったからだと思はれるのです。

ここには、人造りとか人間形成とかいふやうな気負った姿は見られません。私はヘチマの観察やリエちゃんの日記から学んだことを大切にし、子供たち本来の素直な心、伸びようとする心を尊び、その成長の手助けとなるべく自ら顧みて勤めていきたいと思ひます。リエちゃんの記事を読んだ時に作りました歌を読ませていただき、発表を終はらせていただきました。

わが子よと祈りをこめて見守れる母の姿に心打たるる

子供らの尊き命いつくしみ心つくして育みゆかん

ご静聴ありがとうございました。

動
乱
の
生

日本ユニバック(株)勤務 大町憲朗



東郷元帥筆蹟

を、国文研の先生方が編集された本であります。その本の中に、富山県立富山商業学校に入学され、「精神会」といふ会で勉強されてゐた石田安治さんといふ方の遺文が収められてゐます。この方は、僅か十七歳にして御病気で亡くなられた方ですが、この方の文章を読んでをりますと、非常に心を動かされ、自づと体もひきしまるやうなおもひがいたしました。その方の数々の言葉にふれてゐると、十七歳といふ短かいのちを精一杯生きてこられたのだといふことを強く感じました。自分は病に臥してゐるけれども、なんとか体を治して国の為に役立ちたいといふ歌や、同信の先輩方が入宮されて行く時、その先輩方を偲ぶ歌などがあり、病床にあって精一杯生きてをられる姿が偲ばれて非常に心打たれたのであります。さらに、石田さんを紹介された文章の中に次の一節があります。

「彼は死ぬまで『明治天皇御集』『古事記』『萬葉集』の三冊を枕もとから離さず、三月一日遂に永眠。」

私は、亡くなられるまで枕許からはなさない三冊の本をお持ちだったといふことに、また非常に心動かされました。その中で古事記について、石田さんは次のやうに記してをられます。

「本日は晴天なる故、二階にて寝す。静かな所はいゝ。古事記を拝誦す。床に就いて居ると色々な考へが浮んでくる。自分は辰年である。竜は海に千年、陸に千年、而して雲に乗りて空に登り雨を呼び風を呼ぶと言ふ。我今病床に在り、これ竜の在海千年ならん。我病を治し在陸



千年の日が待たれる。空に登る時はこれ国の為に死する時なり。」

また、次の文章があります。

「古事記は二回目を拝誦す。何度読みてもあくことを知らない強い調べである。又萬葉集もまた。休むなかれ常に勉めよ。」

病に臥しながらも、何か力強い生き方をされてゐるのを感じるのでありますが、石田さんの

力強い生き方の源はこの古事記にあるのではないか、さういふ気がして参りました、私ももう一度古事記を読み返してみようと思ったのであります。学生時代の輪読会の頃特に須佐之男命が八俣の大蛇を退治するまでの命みことの人生に感動したことを今も忘れないのですが、もう一度初めから読み返してみますと、また別のところに心動あめのわかひこかされたのであります。それは天若日子といふ神様のことで

あります。

天照大神が葦原の中つ国の荒ぶる神をお治めにならうとして、まず天菩比神をお降ろしになります。三年経っても返事がない。そこで、天若日子をお降ろしになるが、天若日子は大国の神の娘を妻とし、国を自分のものにしうとして、八年経っても返事をしない。高天原では心配して雉子名鳴女といふ使ひを遣はします。ところが、天若日子はその使ひを矢で射殺してしまふのです。その矢は雉子名鳴女を射通して高天原まで登り、ついに天照大神のもとに届きます。天照大神はその矢を再び葦原の中つ国へ射返へすと、失若日子はその矢に当たって亡くなってしまう。ここまで読んできて、天若日子は何と悪い神様かと思ひましたが、次に古事記に書かれてゐるところを読んで古事記らしいなあと思つて強く心をうたれました。天若日子の父や妻子が天若日子の死を悲しむ姿でありました。そこでは悲しみにつつまれて泣きに泣き、何日にもわたつて葬式が行なはれたことが書かれてゐます。

「かれ天若日子が妻下照る比賣の哭く聲、風のむた響きて天に到りき。ここに天なる天若日子が父天津國玉の神、またその妻子ども聞きて、降り来て哭き悲みて、其處に喪屋を作りて、河鷹を岐佐理持とし、鷲を掃持とし、翠鳥を御食人とし、雀を確女とし、雉子を哭女とし、かく行ひ定めて、日八日夜八夜遊びたりき。」

この肉親の情といひますか、天若日子の父や妻子の悲しむ姿がそのまま書かれてゐるのであ

ります。ところで天若日子の葬式のとて、友人である阿あ遲じ志し貴き高たか日ひ子こ根ねの神が弔ひに参りますが、その神様の姿があまりに天若日子に似てゐたので、天若日子の父と妻は天若日子はまだ生きてゐると思ひ、その神様の手足に取りすがって泣く場面があります。

「天より降り到れる天若日子が父、またその妻みな哭きて、『我が子は死なずてありけり』『我が君は死なずてましけり』といひて、手足に取り懸かりて、哭き悲しみき。』

私はこの天若日子のところを読んでおりまして、肉親の情といふものは千何百年経っても変はらないものであることを強く感じました。『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の御本の中に黒上先生の次の御言葉があります。

「我らの祖先の描きし神々英雄はすべて隠遁超脱の聖者ではなく、動乱の生に随順せし情意的人格である。」

この御言葉がふと浮かんで参つたのであります。天若日子を亡くした家族たちはまさに、動乱のやうな生活を送られたのではないか。天若日子を亡くしたといふことはどうにもとりかへせないことですが、その時の家族の悲しみがそのまま書かれてあるところに私はひかれるのであります。さういう古事記の物語を読みながら「動乱の生に随順せし情意的人格」といふのが、その神様の姿を通して感じられたやうな気がするのです。石田安治さんもきつとかういふところに心動かされ、力を得られたのではないかといふ気がして参り、何か嬉しい気持ちが出てく

るのであります。

石田さん御自身も病で苦しい思ひで床に臥してゐなければならぬ、しかしまはりの同信の先輩方は続々と入営されてゆく、さういふ二つの苦しい気持ちがありながら、ご自分を元気づけられ精一杯生きてをられるその姿にもまた、動乱の生に随順せし情意的な人格といふものを見する思ひがしたのであります。

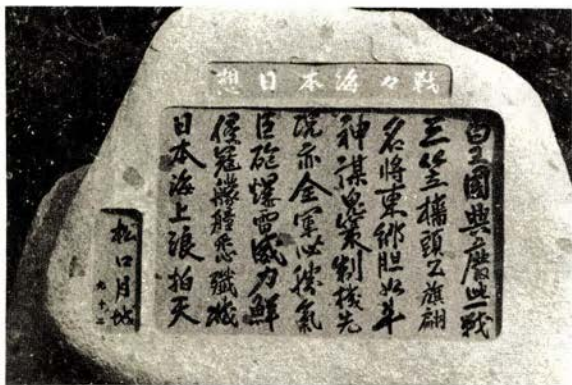
さて私は会社勤めでありますけれども、時々母校や学生寮に行つて、合宿生活への参加を勧め学生と話すことがあります。その話の中で、もっとかういふことについてしっかり話ができたら良かったのにと、自分の力不足を痛感することがありますが、一方学生から返つて来る言葉にも非常にがっかりすることが多いのです。「特に目的はないけれども大学にいけば何とかなる。」「打ち込むものがなくて悩んでゐる。」といふことです。私自身も学生時代さういふことを言つてゐたかもしれません。しかし、石田さんの生きられた姿の中には、打ち込むのがないといふやうな悩みに入る余地は全く見つかりません。古事記から石田安治さんに連なる力強い生き方、そこに日本人が昔から大切に生きてきた人生がある。私は今後とも現在の目的を失つた、氣迫の乏しい精神生活を打破して、生き生きとした精一杯な生き方を大学生の皆さんと共に、学んでゆきたいし、さういふ気持ちを養つてゆきたいと思つてゐます。

一年の歩み

—阿蘇合宿から霧島合宿まで—

九州大学法学部四年

加藤多夏詩



東郷公園入口に立つ詩碑

昭和五十四年六月六日、参議院で元号法が可決された。昨年十月十七日に「元号法制化」が閣議決定されて以来実に八ヶ月振りの事である。これによって戦後三十三年間「事実たる慣習」として存続してきた元号が法的根拠を持ち、以後の存続が法律上保障された事になる。然し、法制化は生命化ではない。法律を意味あるものとするのは国民一人一人の自覚である事を思へば「元号とは何か」といふ問ひは依然として残ることを忘れてはなるまい。

また国防論議もこゝ一年マスコミを賑はせてきた。特に昨年夏栗統幕議長が、現在の日本の防衛体制に疑問を呈されたのを機に、政治家、知識人を始めとするあらゆる人々が防衛のあべき姿を議論してきたはずであった。しかし多くの議論は本質的なものを欠いてゐた。それは折しもロッキード・グラマン航空機疑惑事件にからんだE2C対潜哨戒機導入の是非をめぐる国会討論の場で露顕した。日本の防衛をどうするのかといふ問題であるはずの対潜哨戒機導入の是非が、航空機疑惑事件の解明といふこととすりかはってしまうといふ本末顛倒の言論が国会を風靡したのである。

元号をめぐる論議にしる防衛論議にしる、「日本人としての自覚如何」といふ本質的な問ひ

を迫られてゐるにも拘らずそれを棚上げにしての議論がほとんどであつた。

それにしても国際情勢は特に著しい動きを見せた一年であつた。イランではホメイニ師を指導者と仰ぐイスラム教シーア派の革命が勃発、周辺スンニ派諸国の動揺を招き世界の石油供給源が脅かされた。一方長年犬猿の仲で中東紛争の元であつたエジプト、イスラエルが米国の仲介で平和条約を締結したものの、パレスチナをめぐる利権争ひは依然として尽きず、中東情勢は予断を許さない。

中国は鄧小平の抬頭で日米欧に接近、国交を回復し毛沢東路線を修正し近代化へ邁進した。これに対しソ連はベトナム、エチオピア、アフガニスタンと次々と軍事同盟色の強い友好条約を締結、自国の勢力圏の拡大を企てゝきたが、一方ではSALT II交渉を進め米国を牽制することを忘れなかつた。ベトナム戦争以来「世界の警察官」としての力を失なひつゝある米国を尻目に、ベトナムはカンボジアに進攻、それに対して中国は「懲罰」を加へるといふ名目でベトナムに進攻した。これは中ソ対立、ソ越条約から推して中ソ戦争ひいては世界戦争へ発展する恐れありと世界を震撼させた。国益をめぐる各国のかけひきは熾烈を極めてきたのである。

そのやうな中であつて日本では昨年十一月に自民党の総裁予備選挙にも見られるやうに、政治家は相も変わらず自己の派閥拡大に奔走し国政を忘れたかに見える一年であつた。

厳しい国際環境で日本が生き延びるには、この厳しさを直視し得る目を、政治家はもちろんのこと国民一人一人が持つ以外にないのだが、今日多くの日本人に見られる様な、日本人としての自己を見つめることを忘れた所にさういふ目が育ち様がない事は判然としてゐる。人生は二十台で決まると言はれる。ならば、さういふ目を育てるのは大学生である今を置いて他にないし、それは次代を荷ふ青年の厳肅な使命とさへ言へるのではなからうか。

昭和五十三年八月八日、阿蘇で行なはれた第二十三回全国学生合宿教室の幕が閉ぢられた時、参加者は学生、社会人を問はず、この「日本人としての自己を見つめること」の大切さをかみしめてゐた。聖徳太子や吉田松陰ら先人の言葉を味はふ中に日本人としての生き方の基本を据ゑるといふ学問は、いかなることがあらうとも絶対に絶やしてはならない。さういふ覚悟のもとに、相互の研鑽がたゆむことなく各地で続けられたのである。このやうな先人の残された古典の輪読、さらに短歌を創作し、それを相互に批評しあふことを通して、先人や友人の言葉に即して心を働かせようとすると、日本人としての真実の学びの道は確かなものとして我々の胸の奥に息づいてくる。秋も深まった頃、そのやうなねがひをこめて、東京に大阪に、さらに九州の各地でふたゝび小規模ながら合宿が開かれ、学問と友情の環はさらにひろげられていった。

△地方合宿▽

主催	年月日	場所	参加大学
東京信和会	昭和53年 10月21～23日	御岳山「山香荘」	東大・東工大・早大・亜大・ 中央大・明大・神奈川大・ 高千穂商大・高崎経済大
九大信和会	11月3～4日	油山「椿荘」	九大
熊本信和会	11月18～20日	八代市大島「海の家」	熊大・熊工大・熊商大・ 福教大
福岡信和会	11月22～24日	油山「椿荘」	九大・福大・福教大・ 西南学院大・九産大・ 佐賀医大・熊大・熊工大
早大積誠会	11月25～27日	渋谷「青少年研修会館」	早大・明大

十二月、各地のリーダー学生は福岡における活動の中心である葦牙寮に集会、来年にかけて

九大信和会	昭和54年 5月5～6日	油山「椿荘」	九大
鹿大信和会	12月16～17日	始良郡「加治木荘」	鹿大・熊大
東京信和会	12月15～16日	正大寮	東大・早大・亜大・ 神奈川大・明大・高千穂商大
大阪信和会	12月9～11日	玉泉寺	阪大・大阪市大・大阪芸大・ 京産大・名工大・九大
西南学院大 信和会	12月2～3日	東郷神社「養真閣」	西南学院大
亜大 日本文化研究会	11月25～26日	正大寮	東大・亜大・神奈川大・ 高千穂商大

の活動のプランを練った。四月になれば新しい学生が各大学に入って来る、彼らを是非とも来夏の合宿教室に参加させたい、そして各大学で生きた学問の輪を更に拡げてゆきたい、さういふ気持ちを一歩お互ひに確かめ合ふ場をもつために、三月の下旬に、三泊四日の合宿を持つことになった。合宿地は、七十五年前、皇国の興廢を賭けた一戦、日本海海戦の行なはれた海域を遥かに望む、福岡市北郊東郷神社養真閣に決った。

年が明けて三月二十六日、全国から三十二名の大学生が津屋崎東郷神社の丘に集った。空は青く澄み、蒼い、凪いだ海を航跡を残して進む一隻の漁船が印象的だった。

当日合宿に参加した学生は三十二名、内訳は左の通りであった。

△東日本▽ 高千穂商大・明治大・亜細亜大各1。高崎経済大・早稲田各2。

△西日本▽ 大阪大・大阪市立大・京都産業大・大分大・福岡教育大・西南学院大・

佐賀大・熊本工業大・熊本商科大・鹿児島大各1。熊本大3・福岡大4・

九州大8・計32名。

△国民文化研究会▽ 7名。

総計39名。

合宿は緊張した雰囲気に入れ、開会式、自己紹介、リーダー学生発表と展開されて行った。



合宿地「養真閣」よりの遠望

学生発表及びその後の全体討論は、主に、明治末期から大正にかけて時代人心の頹廃を憂へられ、その打解に奮起された沼波武夫先生に学んだ。大正十五年二月十一日、当時一高の国文学の教授であられた先生は、健全な志操の青年学徒を養成されるべく一高に「瑞穂会」を創立された。その趣意書に曰はく、**「破壊主義の跳梁、唯物論の瀰漫、軟文學の跋扈、風紀の頹廃、これ實に日本國の現状にして、同時に我が向陵（一高のこと）の現状なり。手を懐にしてこれを傍觀するは人に非ず。たゞ口に憤り筆に慨して止むは丈夫の事に非ず。我等今深く反省して既往の怠慢を悔ゆ。（中略）もとより矛を執って姦を斬るは我等が事に非ず。正義を街頭に叫んで衆を激するは我等が事に非ず。學窓堆書の裡、我等が為さむと欲するは、為さざるべからずと信ずるは根本の確立なり。即ち皇國千古一貫の生命たる日本精神の正しき把持是なり。（以下略）**」

る先生の雄叫びに参加者一同襟を正される思ひであった。(『昭和史に刻むわれらが道統』二二二頁 小田村寅二郎著参照)

さらに今回の合宿は黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読に特に力が注がれ、実質三日間の合宿期間中、実に二十時間余りの時間、聖徳太子、黒上先生の御言葉に心を傾けたのである。

輪読箇所は本書一八四頁から一九〇頁迄。「勝鬘經」に、印度の波斯匿王はしのくとその夫人が、娘勝鬘に大乘道を勧めるに当り、我が娘を讚へてゐる一節がある。それを大陸の吉藏師と聖徳太子がどう釈されたか、その違ひを比較検討される中で、太子の御釈の特色と、そこに脈打つ太子の生き方を照らし出さうとされた御文章である。

八即ち吉藏師は聡慧利根を釋するに単に利智の義を以て之を明かせるに對し、太子は耳に善く聴くを聡といひ、心に明かに察するを慧となし、之を直接耳にひびき心に味ははるゝ所の生きたる教法の信受體達とし、こゝに聡慧の真義を窮めさせたまひ、また聡察爽明なる之を利根といふと示して、利根とは啻に利智聡敏の特殊能力の讚嘆ではなく、人生の涯底に徹する微妙の洞察の爽かに明かなる人の心なりと宣はせ給ふのである。理智的觀念の世界を示すのではなく、現實の五官と心を通じ、永久の世を照す信の世界を體驗する内的生活の生きたる表白である。こゝに經典の聡慧利根といふ勝鬘夫人の性能を示す成語は、信念の情操に生命化せられる

のである。V

無息開展する緊張した黒上先生の御表現に、聖徳太子の御言葉に注がれる先生の熱き御心を感じしめられる文章であった。とりわけ「耳に善く聴く」「心に明かに察する」といふ太子の御言葉には、参加者一人一人の友とのつきあひ方や、本を読む時の姿勢に、俄然新たな生命をもたらしてくれるやうな感動を覚えた。だがこのやうな感動は、一人一人が真剣にこの書物にとりくんだために得られたものであり、そこには同胞協力の信とでもいふべきものさへも芽生えてくるのを感じる事が出来たが、このやうな体験は現在の大学生生活には到底求め得られない「学問のよろこび」であった。

また、二日目二十七日の午後には、東京から国文研理事、亜細亜大学教授夜久正雄先生に御越し頂き、先生が聖徳太子に学ばれる様にならねたいきさつを回想風に御話し頂いた。先生は学生時代から黒上先生の御言葉を通して太子に学んで来られたことを話され「聖徳太子は日本人のいとむべき国家生活とはどういふものであるかを最初に表現された方であり、さう意味からしても日本文化の最初の総合的表現者であったと思ひます。」と、今日聖徳太子に学ぶことの意味を明された。更に先生は、翌二十八日の午前の輪読にも参加され、学生の質問に答へられつゝ、ともに太子に学ばれたのである。先生とご一緒に太子の御本を輪読する一ときをもつことが出来たのは、参加者にとって何ものにもかへがたいよろこびであった。

かうして二十九日、三十数名の参加者は三日間精魂尽くして黒上先生の御本を読み込んだといふ自信と爽快感を持って閉会式を迎へた。

空は曇つてをり今にも雨が降りさうであつたが、遠く日本海海戦の海域を臨むことのできる小高い丘へ皆で走つた。閉会式はこゝで行なはれた。戦艦三笠の司令塔を型どつた記念碑が、

△春季合宿日程▽

3月26日(日) 第三日	3月27日(月) 第四日
(起 床)	
朝の集ひ・朝食	(起 床)
輪 讀	朝の集ひ・朝食
	閉 會 式
	合宿に向けて
晝 食	晝 食
輪 讀	短 歌 創 作 後 片 付 け
	解 散
夕 食 ・ 入 浴	
輪 讀	
所 信 發 表	
夜 の 集 ひ	

一年の歩み（加藤）

		3月24日(金) 第一日	3月25日(土) 第二日	
		春季 合宿 日程 表	6:00	6:30
7:00	朝の集ひ・朝食			
8:00				
9:00				
10:00	輪 読			
11:00				
12:00	晝 食			
13:00				
14:00	開 會 式		輪 読	
15:00	リーダー學生発表			
16:00	全 體 討 論		夜久正雄先生 御 講 義	
17:00			質 疑 應 答	
18:00	夕 食 ・ 入 浴		夕 食 ・ 入 浴	
19:00				
20:00				
21:00	輪 読	輪 読		
22:00				
23:00				
0:00	就 寝	就 寝		

マストに日の丸を靡かせてゐるのが見えた。閉会式の模様は九州大学工学部三年の久米秀俊君の短歌に詳しい。

戦艦のマストかたどる塔の上に日の丸を見て式始めんとす

閉会式の始まらんとせしその時にいかづちの音響きて来るも

折からの雨音に交り響き来る雷に身の引き締めたり

あいさつに立ちし御友のおちつきて語ることはに力こもれり

全身を雨に打たせて今はもう一步踏み出すのみと語るも

降る雨に打たれしままに友皆と歌ひはらしぬ神州不滅

一方男子合宿と併行して女子合宿も開かれた。三月九日から十一日迄、鹿児島は薩摩半島、近くに薩摩富士とうたはれる開聞岳を望む風光明媚の地「森と潮の里」に社会人を含め十八名の女子学生が集ったのである。もっとも当日は雨雲がたれこめてゐたため開聞のながめはなかったが、かたはらに鰻池の展望がひらけ人里遠くはなれた緑美しい山里のたゞずまひに、参加者一同心洗はれるやうなおもひであった。

第一日目に御講義された鹿児島大学教授川井修治先生は『現代世界とマルクス主義』と題さ

れ「マルクス主義を如何に評価するかは単に学問上の重要課題であるばかりでなく、我々日本民族日本国家の運命にかかはって来る重大な問題である。」と前置きされ、マルクス主義の誤謬にメスを入れてゆかれた。

二日目の朝には、小柳陽太郎先生に御話頂いた。先生はまづ、先に一人の学生がその発表の中で採り上げた「一君万臣思想——民の上に民の精神統一体として天皇を置く」といふことに触れられ、このやうに日本の国柄を概念化して了ふ事を戒められた。そして桃園天皇御製

神代より世々にかはらで君と臣の道すなほなる国はこのくに

の「すなほ」といふ御言葉に注目され「君主がその力に任せ強引にひっぱって行くとか、或いは国民が天皇を大事にするといつて大袈裟に奉るのではなく、もっと自然で活き活きとした血の通ったものが君臣の間に流れてきた、これが日本の国柄なのです。」と語られた。この後大正天皇の御后であられた貞明皇后の御歌を、今上天皇の母上を偲ばれる御歌とともに味はってゆかれた。（『国民同胞』五月号参照）ここでは皇后様の御歌を一首だけ記すにとどめたい。支那事変の折の御歌である。

傷病兵

にがりたる水にひとりていえがたき病になやむますら雄あはれ

午後からは、島根の青砥宏一先生に『短歌導入講義』をして頂いた。先生はまづ最近心動かされた女子学生の短歌に触れられ「まごころに感ずる心が大切です。」と短歌創作の生命を語られた。更に『古事記』の中、弟橘比売が倭建命に代はって入水される折の心持ちといふものは「皆さん方の心の中にもあるのです。古事記に書かれてゐる事は日本人の心の中に全部あるのです。」と、皆の心のふるさとを目覚ます如き御話をされ、最後に今上天皇の次の御歌を味はられたのである。これは終戦直後樺太にソ連軍が進攻した折、最期迄職務を遂行せんとして当地で斃れた、郵便局交換助手のをとめらを偲ばれての御歌である。

稚内公園

樺太に命を捨てしたをやめのこゝろ思へば胸せまりくる

夜には熊本の折田豊生先生が古典輪読導入講義として『古事記』の倭建命の一節を読み味はつてゆかれた。（『国民同胞』七月号掲載）

そして四月となった。大学の学問の中に日本の歴史を回復するために、さらに人生に直結した学問の復興を目指して、新入生に対する呼びかけが積極的に開始された。徹夜して書いた文章を配り、隣の席の学生に次々と語りかけていった。講演会を聞き呼びかけもした。しかし泰平安楽ムードの中に私達の声に耳をかたむけてくれる学生は少なかった。自分には一人の後輩も作ることが出来ない程力が不足なのか、さういふ焦燥感にとらはれることもあった。が、友、先輩、先人の言葉に励まされ、学生への呼びかけは絶ゆることなく続けられていった。かくして誘ひあはせた全国の友らを迎へて、八月、遂に霧島の地に第二十四回の合宿教室は開かれたのである。

△講演会▽

主 催	九大信和会
年 月 日	昭和54年 5月16日
場 所	九大学生会館大ホール
講 師 ・ 演 題	志賀建一郎先生（三池高校教諭） 「現代青年の課題」

西南大信和会	西南大信和会	熊本大信和会	福教大信和会	早大積誠会
6月27日	5月30日	5月26日	5月26日	5月19日
西南学院大4号館102番教室	西南学院大4号館102番教室	熊本大教養部A11番教室	福教大特別2番教室	早大3号館102番教室
滝沢寿一先生 （西南大学教授） 「〃もの〃について」	岡田武彦先生（九大名誉教授） 「日本人的なものの方」	小柳陽太郎先生（修猷館高校教諭） 「吉田松陰の学問」	志賀建一郎先生（三池高校教諭） 「歴史の学び方」 聖徳太子の生き方に学ぶ」	国武忠彦先生（翠嵐高校教諭） 「大学で何を学ぶか」 本居宣長に学ぶもの」

第二十四回 「合宿教室」の
あらまし

九州大学経済学部四年

奈良崎 修

二



開 会 式 まで

第二十四回全国学生青年合宿教室は、昭和五十四年八月五日より九日までの四泊五日間、霧島国立公園内、霧島ホテルで開催された。緑濃き霊峰・高千穂峰を間近に仰ぐこの地は、奇しくも三十余年前、国文研の前身たる日本学生協会の学生数名が出征を前に最後の旅行をした因縁深き地である。その中のお一人が終戦直後、福岡市郊外の油山山腹にて、敗戦の責を一身に負はれ割腹自刃された寺尾博之海軍少尉であった。若くして散った人々の御霊が飮する如き、この深き緑の中で全国の友等と合宿を営むのだと思ふと、言ひ知れぬ感慨に胸打たれる。合宿開会三日前、事前合宿参加の幹部学生三十余名と国文研会員数名が会場に集合した。そして、合宿運営、班運営の中心となるべきこの三十数名による事前合宿が二日間に亘って行はれた。真摯な、そして時に厳しい研鑽を通じて、新しい友を迎へんとする緊張感が一人一人の胸内に昂って行ったのである。翌日は、終日合宿開催準備の作業に追はれた。班室表示や仮名簿作成、講義場の設営や、講義レジュメの準備等々である。玄関前には「友よ！ と呼べば友は来たりぬ」と大書された横断幕が掲げられ、明治天皇御製を書いた大きなのぼりも立てられた。

夜に入って作業は完了。翌日集ふ全国からの友を待つばかりとなった。参加者の内訳は次の通りである。

(学生班 四十九大学)

- 東北大1 一橋大1 亜細亜大13 高千穂商大9
早稲田大5 中央大3 日本大3 青学大2
高崎経大2 東海大2 大東文化大2 専修大1
法政大1 国際商大1 明治大1 東京農大1
慶大1 学習院大1 多摩美大1 神奈川大1
明学大1 埼玉大1 旭川女短大1 名城大2
皇学館大1 京産大1 大阪経法大1
大阪市大1 岡山大1 島根大1 広島大1
山口大3 九州大25 福岡教大8 福岡大10
西南学院大5 中村学園大3 八幡大3
九州共立大2 第一薬大2 福岡女子大1
佐賀大4 長崎大5 長崎総合科学大1 熊大10
熊工大1 尚綱大1 宮崎大4 鹿児島大10



合宿の準備

計一六二名（うち女子二五名）

（社会人・教員班） 計十九名

（招聘講師） 二名 （大学教官有志協議会・国民文化研究会） 七十二名 （見学）

（事務局） 一〇名 総計 二六八名 三名

参加者は、合宿申込書のアンケートをもとに七名乃至八名を単位とする班に編成され、事前合宿参加学生が、各班の班長となった。男子学生班は二十二箇班、女子学生班は四箇班、社会人班は四箇班が作られ、さらに数箇班を単位とするグループに分けられた。各グループ毎に数名の国文研会員が付き、各班長との検討会、又全体での検討会が持たれて、常時各班の情況が報告された。

八月五日、全国各地の大学、職場から、学生、青年、助言者達が、続々と集まって来た。いよいよ合宿の開始である。

午後一時、九州大学三年、弓立忠弘君の力強い「開会宣言」によって、第二十四回全国学生青年合宿教室の幕は切って落とされた。「国歌斉唱」の後、参加者一同は「戦時平時を問はず、祖国日本の為に尊い命を捧げられたすべての祖先の御霊」に対し、一分間の黙祷をささげた。

8月7日(火) (第3日)	8月8日(水) (第4日)	8月9日(木) (第5日)
(起 朝 朝	(起 朝 朝	(起 朝 朝
のつどひ 食	のつどひ 食	のつどひ 食
(講義) 「精神文化と 科学的機械文明と」 高山岩男先生	(講義) 「やむを得ざるの誠」 小柳陽太郎先生	運営委員長・所感発表
		全体意見発表
		合宿をかへりみて 小田村寅二郎先生
記念撮影	班別討論	班別懇談 第二回和歌創作 感想文執筆
班別討論		
晝食	晝食	閉會式 (晝食)
「和歌創作導入講義」 青山直幸氏	(講義) 「畏敬のこころ」を 身につけなければ 日本国民にあらず」 小田村寅二郎先生	
霧島神宮参拝 高千穂河原散策 和歌創作	班別討論	
	「和歌全體批評」 長内俊平先生	
	地區別懇談	
夕入散 食浴歩	夕入散 食浴歩	
慰霊祭の説明 ならびに執行	班別・和歌相互批評	
	夜のつどひ	
班別懇談		
(就床)	(就床)	

「合宿教室」のあらまし（奈良崎）

第二十四回「合宿教室」日程表		8月5日(日) (第1日)	8月6日(月) (第2日)
	6:30		(起 床) 朝のつどひ食
	8:00		(講義)「これからの世界 の中の日本」
	9:00		木内信胤先生
	10:00		(質疑 應 答)
	11:00		班 別 討 論
	12:00		晝 食
	1:00	開 會 式	(講義)「聖徳太子の信仰 思想と日本文化創業」
	2:00	運営委員長あいさつ	夜久正雄先生
	3:00	班別自己紹介	班 別 輪 讀
	4:00	班 別 討 論	
	5:00	(講義)「明治の精神」 山田輝彦先生	
	6:00		青年研究発表 (坂口・前園・大町)
	7:00	夕 食 入 浴 散 歩	夕 食 入 浴 散 歩
	8:00		
	9:00	班 別 討 論	班 別 輪 讀
10:00	(就 床)	(就 床)	

次いで主催者を代表して、国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生が「この合宿の主体は自分自身であるといふ心組みで取り組んで頂きたい。又、大学の入試の難易度による格差、学年、年齢の違い等、外的な区別を一切取り払って、一対一の日本の青年として平等な立場でつき合ひを開始ませう」と挨拶された。

続いて参加学生を代表して、九州大学経済学部四年奈良崎修二が、吉田松陰の若き日の遊学日記から、「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは触に従ひて発し、感に遇ひて動く」といふ言葉を引用し、「合宿の一瞬一瞬に全力で打ち込み、自己の心を発動させる、機を逃さず掴み取らう」と参加者に訴へ、開会式を終了した。

この後、熊本県立人吉高校教諭・田之上正明指揮班長より合宿生活全般に亘る諸注意が伝達され、休憩をはさんで福岡県立三池高校教諭・志賀建一郎運営委員長の挨拶が行はれた。志賀運営委員長は、先づ合宿の全容を紹介された後、幕末の勤皇の志士・平野国臣が、煙を大空に吐く桜島を仰ぎつゝ、胸中に沸々たる国への思ひを詠んだ

我が胸の燃ゆる思ひにくらぶれば煙はうすし桜島山

といふ歌を引用され、今の我々に、国臣が国の命運に対して、或ひは時勢に対して抱いた様な「燃ゆる思ひ」があるだらうかと問ひかけられた。そして現在の大学の状況に対して「一見平

穩で充実にある様に見える学園生活ではあるが、現実には、学生同士が国や人生について真剣に語り合ふ場もなく、一人一人の心は荒廃してゐる」と指摘され、さらに「この合宿では一人一人が自らの心に新たな火を点火し、この『燃ゆる思ひ』を自分の心の裡に確かめてゆかうではないか」と強く訴へられた。

この後直ちに全参加者は、各班室に移り、自己紹介及び合宿参加の動機等、所感を述べ合ひ、引き続き「日本への回帰・第十四集」の輪読を行った。

講 義

第一日目、班別自己紹介、輪読の後、合宿導入講義として、福岡教育大学教授・山田輝彦先生の御講義が行はれた。演題は「明治の精神——現代精神蘇生のために——」である。先生はまづ、戦後日本の思想の変遷を概観され、日本の現状に対して「国民が日常生活に埋没し、国家に対する感覚が欠落してゐる」と指摘された。そしてこの様に衰弱した現代精神を蘇生させる為に、国家が国民の瑞々しい精神に支へられてゐた明治といふ時代を今一度振り返ってみたいと述べられ、明治の人の文章を幾つか引用してゆかれた。

まづ、福沢諭吉の「文明論之概略」から、「国の独立如何の事に逢へば忽ち之に感動して、

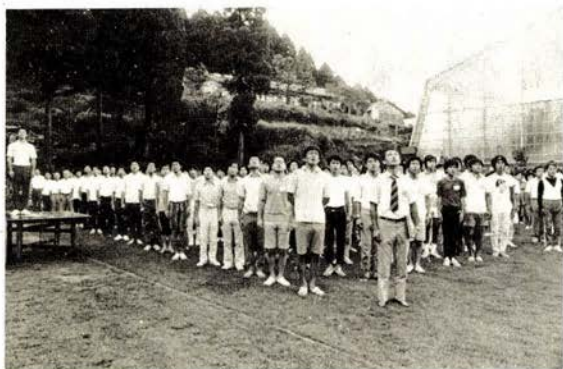
恰も蜂尾の刺蠶に触るゝが如く、心身共に穎敏ならん事を欲するのみ。」といふ箇處を引用され、「平素は各々自分の職業に没頭してゐても、一旦国の独立にかゝる如き問題に遭遇するや、敏感に反応する。さういふ気持ちをも明治の人々皆が持つてゐた」と述べられた。そして、樋口一葉や、「山桜集」、更には小学唱歌や子規、鷗外、漱石等に触れられて、明治の日本を支へてゐた精神を偲んでゆかれた。最後に先生は、この明治といふ時代の中心に明治天皇が置かれたといふ、重大な歴史事実に触れられ、明治三十七年、日露戦争開戦時の御製、

樹間花

こずゑのみ人に知られて櫻花木がくれながら散りや果つらむ

を紹介された。そして「人知れず黙々と国を支へて死んでゆく人々を思はれる天皇の御心にかげがへのない個人の生命が摂取されてゆく、その喜びといふものが明治を支へてゐた」と述べられ、私的な次元でしか思考する事のできなくなつた現代精神を蘇生する為に、この明治の人々の心を虚心に振り返って欲しい、と御講義を結ばれた。

第二日目午前中は、世界經濟調査会理事長・木内信胤先生による御講義「これからの世界のなかの日本——近刊『新しい、健康な経済学』に触れながら——」であつた。木内先生は今回



国歌斉唱 (日の丸を仰いで)

で連続二十回目の御出講である。先生はまづ、日本が明治以来百数十年に亘る、自己を西欧化する”といふ道を成功裡に走り了った事、一方、近代西欧文明の作り主たる欧米諸国に於て、その文明が概ね任務を完了して一種の行き詰りに到達し、社会の乱れ”を招いてゐる事を指摘され、「新しい日本文明」について言及された。即ち「今の日本は政治経済上の困難な問題を、不思議といふ程巧みに解決してゐるが、それは、日本国民が一樣に身につけてゐる文明の力による。日本人は古事記、万葉に表はれた如き日本古来の心情をもとに、印度、支那、西欧の文明を融合して来た。この偉大さを日本国民が自覚すれば、混迷する世界の中で、日本のもつ影響力は想像できぬ程素晴らしいものにならう。」と、「新生」日本の素晴らしさと役割の大きさを説いてゆかれた。又、先生は日本人本来の生き方について、「物事を余り詮索も分析もせず、あらゆる

ものを、その美に於て感得しようとする」、「森羅万象に自己を投入する事が出来る」と述べられ、その様な生き方を包み込む様な悠悠たる言葉「天行健」を紹介された。

午後に入り、亜細亜大学教授・夜久正雄先生による輪読導入講義が行はれた。先生は最初に、昨年の合宿での小林秀雄先生の御講義の中から、「心を開いて、人を信じてお互に語り合ふところに、火花のやうに散る知恵が、本当に生きた知恵だ」といふ言葉を引用され、これが輪読のあり方だと示された。そして人の成長と同様に「文明も他との交流なしには自滅してふが、又他との交流の中で自らの文明を発展させてゆく事も実に難かしい事だ」と述べられて、聖徳太子の業績を偲んでゆかれた。「我が国が、印度、支那といふ異文化と初めて本格的に交流した時代に出現されたのが聖徳太子であり、太子はそれら異文化を日本の伝統精神の中に摂取、融化されたのである。又十七条憲法は、日本の国家の内容を初めて明らかにし、表現されたものである。」と太子の歴史的な位置、偉大さを明らかにされた。続いて先生は、太子の仏典研究について、単なる概念的理解に止まらぬ御自身の体験と信念の表現である事、又その研究方法が輪読形式であった事が偲ばれる事などを指摘されて、太子の御文章を実際に読み味はってゆかれた。まづ声は以て意を伝へ書は以て声を伝ふ」といふ御言葉をあげられて、「作者の心情に思ひを致し、その心の声が聞こえてくるまで読み込む事が必要だ。そこに読書の感動が生れる。太子の『文に随ひて直ちに唱ふるのみ』といふ御言葉は、さうした太子御自身の

感動の御表現である。」と示された。更に、「耳に善く聴く」といふ御言葉について「善く聴き、善く読んでゐる時に、自分の心が先人の言葉の中に摂取されてゆくやうな感動を覚える。我々は、自己の心的経験の事実を信じないで一体何を信じる事ができようか。」と語られ、「本当に感動した時には、自他の区別はなくなつてゐる。これが『神情開朗にして小乗の疑滞なきなり』といふ事であらう。このやうな心持ちを求めてゆきたいものです。」と述べて御講義を結ばれた。

翌日、第三日目の午前は、文学博士・元京都大学教授・高山岩男先生の御登壇。題は、「精神文化と科学的機械文明と——従来のイデオロギーでは、今日の難問は解けなくなつた——」である。先生は、近代科学の進歩の歴史は「道具」から「機械」への移行の歴史であり、科学技術の恐るべき進歩が人間性を崩壊に導いてゐる事、それが戦争形態の変遷、拡大化の要因ともなり、今や人類絶滅の危険すらも現実のものとなつてゐる事を指摘された。さらに、合成技術の発達により、未知の物質が次々と生み出され、「試験管ベイビー」や「遺伝子の組替へ」により「生命」までが合成される現代を「代用物が本物を駆逐する時代」と評して、我々の生命観が知らず知らずのうちに変質させられてゐる事に警鐘を鳴らされた。先生は続いてデモクラシーの問題に言及して、アテナイの民主政治、ローマ共和制、英国の政治等に触れつゝ、「我々は、種々の政治形態の諸要素を、自国の長い歴史伝統に培はれた国柄といふものにうまく融和させ

て、平時戦時の対応をよく考へた、真のデモクラシーをこそ求むべきだ。」と語られた。最後に先生は、精神文化について触れられ、今日の課題が、進歩して已まぬ科学技術と「進歩」では捉へられぬ精神文化とを、如何に調和させてゆくかにある事を強調された。そしてその達成の為に、人間社会といふものを従来のイデオロギーに捉はれる事なく、人々の生きた繋りの中で考へてゆく事が大切であると述べられた。

合宿第四日目は、福岡県立修猷館高校教諭・小柳陽太郎先生による御講義「やむを得ざるの誠——松陰、素行、宣長を中心に——」からである。先づ先生は、松陰の、

かくすればかくなるものとしりながらやむにやまれぬやまとだましひ

といふ歌を引かれ、ここに日本人が昔から大事にして来た人生の姿、即ち小賢しい知的判断を拒絶して、心



講義室にて

に湧きおこってくるその心の動きのまゝに生きて悔いる事のない世界がある、と語られた。又「動処に於て本心を認むる、更に善し」といふ言葉にも松陰の生き生きとした人生の姿を偲ばれ、一方、この様な生きた松陰の姿には目もくれず、歴史体系、歴史概念の中で松陰を如何に規定するか、といふ様な事にのみ忙しい現代歴史学に対して、厳しい批判を加へられた。更に、「松下村塾零話」により、熱情迸るが如き松陰の学問、教育の様を示され、「松陰にとつて学問とは、優れた先人に出遇ふ喜びを自分の心の中に確かめることであつた。」と語られた。次に先生は、本居宣長、山鹿素行について、その学問の道を語られた。特に小林秀雄氏の「本居宣長」から「動かなければ、心は心である事を止める、動かぬ心は『死物』である。……学問の努力の中心部では、生きた心が生きた心に直かに触れて、これを知るといふ事しか起こらない。」といふ文章を引用され、この様な人間本来の生き生きとした心を取り戻さなければならぬ事を強く訴へられた。

四日目の午後に入つて、国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生の御講義。演題は「畏敬のこゝろ」を身につけなくては日本国民にあらざ」である。先生はまづ、この厳しい演題について「『畏敬のこゝろ』とは、自分自身を欠点の多い人間として自覚する事から生まれるものである。」と述べられ、「現在の学校教育には、この『畏敬のこゝろ』を一人一人の内心に定着させる努力が全く欠落してゐる。」と指摘された。先生はこの日本人本来の『畏敬のこゝろ』

の具体的表現として、明治憲法制定の御告文、発布の勅語、上諭を取り上げられ、これを懇切に読み、説明してゆかれた。そして、憲法制定に際して明治天皇が、歴代の天皇方の御威徳、並びに天皇方を助けて日本を守り通して来た国民の祖先の上を偲ばせ給ひ、その御魂に対して、国民とともに国を治めてゆく事をお誓ひになつてをられる御姿を偲んでゆかれた。更に明治憲法のこの根本精神を偲ぶ事なく憲法問題を論ずる事の重大な誤りを強く訴へられた。次に先生は、吉田松陰刑死の際の有様を、同囚達の残した言葉等を引きながら語られ、「松陰や、その困りの人々にとって、友情とは友を畏敬する心であり、志をてらし合ふ事であった。」「畏敬の心の尊さを知る人にとっては、この松陰の立派な死に様は必ずや心動かされるものであるに違ひない。」と述べられた。又、戦時中の学徒の遺詠遺文抄である「いのちささげて」「続・いのちささげて」についても語られ、畏敬のこゝろを通じて死者と生者が結ばれてゐるといふ事は、嚴肅な人生事実である、と語られた。次いで先生は、「ジャパン アズ ナンバーワン」といふ書物を紹介されて、アメリカ人が自国の現実を考へ直す為に日本に熱い視線を送つてゐる、その姿を思い、日本の運命を考へるのは日本の学生の任務たる事を熱を込めて説かれ、最後に歴代天皇の御歌を、数多くレジュメに紹介されて、「これらの御歌の中には、国民の上やすかれといふ祈りが一すじに貫かれてゐる。畏敬のこゝろの中に日本精神は生き続けて来てゐる。学問の第一義はこの畏敬のこゝろを育くむ事にある。」と語られ、長時間に亘る御講義を

終へられた。

班別輪読・班別討論・和歌創作

合宿教室には、先生方による御講義の他に、班別輪読、班別討論、和歌相互批評といふ学生相互の研鑽の場が設けられてゐる。

中でも今回特記すべきは、二度に亘って行はれた「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読であった。二十四回を数へる合宿で、初めて計四時間半といふ長時間の輪読が行はれた。今回の輪読箇所は、聖徳太子が勝鬘教義疏と吉蔵師の仏典解釈とを比較、対照しつゝ、太子が大乗仏典を撰取し給ふに際し、常に經典の言葉を人生事実の上に味識され、単なる理智的解釈に止まらぬ太子御自身の信念体験としてそれを御表現された事が述べられてゐる処である。仏教用語も頻出してをり、極めて難解な一節ではあるが、夜久先生の御講義を棗とし乍ら各班で輪読が進められていった。一回目の輪読では、言葉の意味、文の脈絡を追ふのが精一杯といった班も多かった様だが、二回目に入り、一つの文章、一語一語の言葉を正確に辿りつゝ、著者の思ひを偲んで繰り返し読む中に、言葉が本当に生き生きと読む者の胸に響いて来る、といふ輪読本来の姿が各班で実現していった様である。「今迄この様にして読書した事はなかった。

一つ一つの言葉に著者の思ひを偲んでゆく事の大切さ、素晴しさを痛感した。」と感想を述べた友も多かった。ともすれば未消化の儘終はりがちだった合宿での輪読が、この様に真の学問の場として実現され始めた事の喜びは大きかった。

講義の後には、そこで提出された問題についての班別討論が行はれる。それは、概念的な論理や知識のやりとりではなく、又相手を論破せんとする討論でもない。自分自身の体験に基づいて、本当に心の底から感じた事を互ひに披瀝し合ひ、そして友の言葉に真剣に耳を傾ける場である。さういふ努力によって真の学問の深まりが、又友との心の交流が実現されてゆくのである。

又和歌創作、相互批評もこの合宿の大きな柱である。

三日目の午後、高千穂河原散索に先立って、戸田建設
榊技師・青山直幸氏による短歌導入講義が行はれた。



班別輪読

氏はまづ、本居宣長の「感ずべきことにあたりて、感ずべきことゝろを知りて、感ずる」といふ言葉を用ひし、「最近の青年は、熱中すること、感動することが少ない。この様な何事にも無感動な風潮から抜け出して、日本人のもつ生き生きとした心の働きを取り戻して欲しい」と話された。そして「古人は感動した時に、それを三十一文字の短歌の形にととのへ、それによつて感動に形を与へ、心情・感情の洗練を行つてきたのであり、和歌を詠むことは人間本来の心の働きを回復する大切な道です。」と語られたのである。さらに氏は、明治天皇御製

おもふことうちつけにいふをさなごの言葉はやがて歌にぞありける

を拝誦し、「平易な言葉でも心に感じた儘に表現すること」の大切さを指摘され、又日本人は、歌を詠むことを「しきしまの道」と呼び、万葉の昔から今日に至る迄、日本人が歩むべき道の中心として受け継いできた事を話された。

続いて、大東亜戦争に学徒出陣し、終戦後自決された故寺尾博之さんが、出征直前に数人の友と霧島に遊ばれた折詠まれた、

再びは見る日もあらじきりしまに友と眺むる月の影かな

以下七首の、友との永訣の思ひの込められた歌を読み味はってゆかれた。これ等の歌の、悲しくも雄々しきしらべは、参加者の心を強く打つものがあった。氏はこれらを通じて「短歌を詠むにあたっては、体験に根ざした切実な感動を詠む事。自分の感動を正確に表現する事。歌に詠む気持を一点に集中する事。」と短歌創作の手引きを紹介された。

この後、参加者はバスで霧島神宮へと向かった。当初予定されてゐた高千穂登山は、悪天候の為残念乍ら中止となった。霧島神宮で全員参拝、宮司さんのお話を伺った後、高千穂河原へと向かった。高千穂の峰は霧に蔽はれてその姿を仰ぎ見る事はできなかったが、皆、思ひ思ひに高千穂河原を散策し、友との語りひ、短歌創作など、緊張した日程の中での心楽しい一時を過ごした。



霧島神宮にて その1

この時創られた歌は、先生方や、事務局の高校生諸君の徹夜の作業で分厚い歌稿となり、翌日全員に配布された。そしてその日の午後、国民文化研究会理事・長内俊平先生による和歌全体批評が行はれた。

先生は冒頭に、明治天皇の御製、

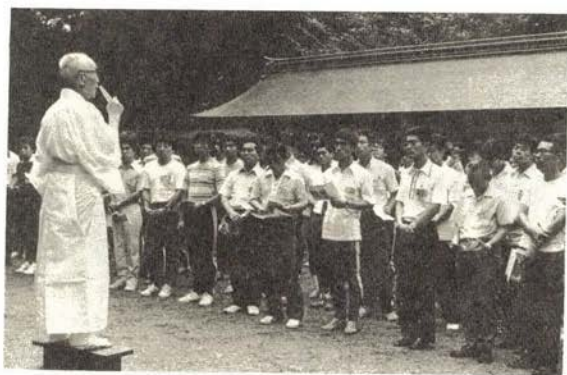
新しきふしはなくともくれたけのすなほならなむ大和ことのは

を挙げられ、「新しきふしはなくとも、自分の心を素直に述べた歌が人の心を打つ。さういふ歌を大切にしたい。」と述べて批評に入ってゆかれた。三十首近い歌を一首一首懇切に批評・添削してゆかれたが、言葉の一つ一つを大切にしていって味はってゆかれる先生の姿に一同心を打たれ、知らず知らずの中に、皆も友の言葉の一つ一つに心を寄せて、歌を味はっていったのである。先生の御批評は、巧まざるユーモアに満ち溢れたもので、場内爆笑が渦巻く事も度々であったが、又折々に、我々の心のあり方を厳しく正されようとする御指摘もあり、言葉によって心を正してゆく事の大切さが沁み沁みと思はれる一時でもあった。又先生は、日常生活の中で歌を詠む事の大切さを語られ、その秘訣として、友に手紙を書く事と、良い歌を読む事を勧められた。最後に、「歌を作る事は真心を磨く。今は概念的な思考が非常に強い時代だが、その概念

的な思考から訣別してゆかなければ我々は本当の魂を奪回できない。その為には、歌を作る事、しきしまの道を学ぶ事が一番良い方法だと、私は自分の体験から思ふ。事実を見つめなければ歌は出来ない。観念的に頭の中で考へても歌は出て来ない。凝つともものを見つめる、そして言葉の一つ一つを選んで行くといふ努力の中に、真心や魂といったものは養はれてゆくでせう。」と力強く訴へられて、御話を終へられたのである。

この後、夜に入って班別和歌相互批評の時間が持たれ、班員全員の歌が丁寧に批評添削された。歌の一つ一つの言葉を辿り乍ら、友の心を思ひ合ふ中に、互ひの心が通ひ合ひ、心広がる共感の世界が生み出されていった。

青年研究発表



霧島神宮にて その2

最初に登壇された福岡県立若松高校教諭・坂口秀俊氏は、まづ今年の卒業式に同校で起こった国歌斉唱妨害事件の経緯や、赴任当時の校内の様子を述べ、教育界の異常とも言へる荒廃ぶりを訴へられた。そしてその様な中で、氏が授業中に、日露戦役当時の野口英世の愛国の情溢れる手紙を紹介したり、唱歌「広瀬中佐」を歌って聞かせたりして、生徒の心に日本人としての自覚を培ふ努力を行った事を語られた。氏は又、体育祭の国旗降納の折に、一人の生徒が歌ひ出した「君が代」が遂に全員の大合唱となった時の感動を語り、その感動を心の支へとしてみ出されたの険しい道を歩んでゆく決意を述べられた。

続いて登壇された福岡県宗像郡・町立玄海小学校教諭・前園由美子さんは、子供達との「へちまの観察」の折に、へちまの生命を感じ取って心を寄せてゐる子供達の、敏感な、やさしい心に触れた感動を語られた。そして教へ子の知恵遅れの一少女を育くんでゆく日々の事を語って、最後に次の自作の歌を読み上げて話を終られた。

子供らの尊きいのちいつくしみ心つくして育くみゆかむ

最後に、日本ユニバック働勤務・大町憲朗氏が、自分の日々の生活、読書体験からお話をされた。大町氏は「いのちささげて」の中の石田安治さんの遺文に触れ、「病床にあり乍ら国の為に一心に心を尽くし、精一杯生きぬかれた石田さんの姿に心打たれ、励まされる思ひがした。」と述べ、さらに石田さんが終生愛読された「古事記」の天若日子の物語を引用された。そして、

石田さんや、古事記の中の神々に「動乱の生に随順せし情意的人格」さながらの姿を偲ばれ、先人の姿を偲んで精一杯、生き生きと生きて欲しい、と訴へられた。

慰 靈 祭

合宿三日目の夜、慰霊祭が举行された。連日の悪天候もあって、戸外での実施が危ぶまれたが、祭場をしつらへて下さった国文研会員の方々の祈りも通じてか、雨はあがり、星空さへ覗く夜となった。

慰霊祭に先立ち、国民文化研究会会員歯科医師・吉田哲太郎氏より、慰霊祭の説明が行はれた。その後参加者は屋外に出て、祭場の前に整列した。祭場には篝火がたかれ、祭壇が煌々と照らされてゐる。厳粛な雰囲気であった。記者はふと、志を同じうして学び乍ら交通事故で斃れた友の事を思ひ、その友の魂も祖先の御魂と、もにこの祭りのにはに降りて来てゐるのだと思ふと胸が熱くなった。

まづ、お抜ひに代へて国文研の三宅将之先生により、故三井甲之先生の遺歌、

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

が朗読され、戦時・平時を問はず日本の国をまもる為に尊い生命を捧げられたすべての祖先の御霊に対し黙祷を捧げた。続いて参加者一同を代表して高木尚一先生が祭文を奏上され、夜久正雄先生による御製拝誦が行はれた。玉串奉奠の後、全員で「海征かば」を斉唱し、最後に再び黙祷、最敬礼、御霊をお送りして慰霊祭を終へた。

ここに慰霊祭に於て拝誦された御製、並びに祭文を記して置く。

明治天皇御製

明治三十七・八年、日露戦争の折に詠ませたまへる大御歌十一首
折にふれて

いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ
石だたみかたきとりでも軍人^{いくさびと}みをすててこそうち砕きけれ
よとともに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさをを
思ふことつらぬきはてて國民^{くにたみ}の心やすめむときぞまたるる

樹間花

こずゑのみ人に知られて櫻花こがくれながら散りやはつらむ

民戸煙

事あるにつけていよいよ思ふかな民のかまどの煙いかにと

峯

おほぞらにそびえて見ゆるたかねにも登ればのぼる道はありけり

歌

世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり

夢

今も世にあらばと思ふ人をしもこの暁の夢に見しかな

披書思昔

のこしおく書ふみをしみればいにしへの人の聲をも聞くこちして

凱旋の時

外國にかばねさらししますらをの魂も都にけふかへるらむ

今上天皇御製

大東亜戦争終戦の折に詠ませたまへる大御歌三首

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて
國がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

昭和五十四年元日の新聞によりて示させたまへる大御歌

春はやくはえ吹き立ててなるかみのとどろく夜なり雨ふりしきる

祭 文

神さぶる霧島の山なみ、杉木立深々となみ立てるしじまの中に、今宵昭和五十四年八月七日、われら第二十四回学生青年合宿教室参加者一同、ここに集ひてとこしへに、みくにまもりますみ祖のみたま、はたまたみくにのため尊きいのちを捧げたまひしいくさびと、同胞、友らのみたまなごめのみ祭仕へまつらむとす。

天の八重たな雲を押し分け、稜威の道別きに道別きて、天降りましし、みおやの神のみ稜威をしのび、みくにの内外にみてるまがごとのことを、うちらははむと力の限り学びつとめ、講義の聴講に、はたまた班別討論、和歌創作などを重ねつつ合宿教室もはや半ばをすぐせり。

今年も、我らのゆくての道はことのほかけはしく、我らもともに大君のみことかしこみかたしとて思ひたゆまず、身心をかたむけてみくにをまもり、日毎のつとめに立ち向はむとす。いまよりのち、まなびやにはたまたつとめのにはに、力合せ、しきしまのみち、いやつぎつぎにふみひらかむと、うけひまつることのよしを、いましみことたち、きこしめしたまへ。

天にますみ祖のみ霊よ、願はくは我らのゆくてをまもらせ給へと、第二十四回学生青年合宿教室参加者一同に代り高木尚一謹み敬ひ恐み恐み白す。

合宿最後の日

四泊五日の合宿も愈々最終日を迎へた。まづ初めに志賀建一郎運営委員長が所感発表を行はれた。志賀氏は前日の和歌全体批評で取り上げられた歌から「くやしと思ふ」といふ言葉を引きかたて、「この言葉で表される気持ちは、合宿の冒頭で述べた『燃ゆる思ひ』といふものと相通ふのではないか。今の日本には、防衛問題を初めとして、この気持ちを馳せるべき様々の問題が起こつてゐる。この様な問題に対して、我々一人一人が本心に『くやしと思ふ』心を身につけなければ、我々は日本の国民、青年とは言へないのではないか。」と強く訴へられた。又合宿での輪読体験に触れられ、黒上先生の御著者から「信念の情操に生命化せられる」といふ御



最後の夜の集ひ

言葉を引かれて、「我々がこの合宿で学んだ事は、言葉を自分自身の中に生命化してゆく修練ではなかったか。さういふ、人の言葉に接する、学問をしてゆく際の根本の姿勢を学んだのだと思ふ。それによって、合宿の中で信の世界が実現されたのである。我々はこの様な信の世界を各々の場で実現して、我々の精神にも、又大学にも活力をもたらし、様々な問題にぶつかって行きたい。」と訴へられた。

次いで全体意見発表に移り、この合宿で得た感動を語らんとする友が次々と登壇した。

続いて小田村寅二郎先生が登壇され、「合宿をかへりみて」と題してお話になった。先生は、開会式からの事を振り返られつゝ、「この五日間の経験の中で友達づき合ひの奥底知れない面に気づかれたのではないか。平生の学生々活の中で理解されてゐる友情と、この合宿の中で生まれて来た友情とのレベルの違いを思つて

て欲しい。」と述べられ、吉田松陰の「読書尚友は君子の事なり」といふ言葉を引かれ乍ら、「学問をする者の友情とは、喜びも悲しみも全て包み込む様な、深い広いスケールの中に生れるものである。」と語られた。そして、その事を僕等が体験的に知った事の重要さを指摘され、「物事といふものは、一つがわかれば後は全部わかってゆく手がかりが揃めるものだ。」と述べられた。さらに先生は、この事を憲法問題、天皇問題等についても敷衍してゆかれ、日本固有の文明の本質を看過して、西欧文明の枠組や概念を表面的に取り入れる事で能事足れりとしてゐる現代学問の根本的な誤謬を厳しく批判された。そして「日本が本当に世界の文化を総合して発展してゆくには、日本人としての自覚を失ひ、日本固有の文化に眼をつぶつてゐては不能である」事を強く主張された。

さらに先生は、前日の講義レジュメの中から、聖徳太子の御言葉、「耳に善く聴くを聡と曰ひ」と「一たび聞きて即悟して再教を待たざるなり」の二句を引かれて、学問の根本の姿勢は、この二つの御言葉を心魂に定着させる事だと語られた。そして同じくレジュメの中から、桃園天皇の御製六首を挙げられて、学問の根本の姿勢を身につけてをられた桃園天皇の御人柄を偲ばれ乍ら、一首一首を読み味はってゆかれた。

この後、参加者は最後の班別懇談を行った。小田村先生の気迫のこもったお話を思ひ返し乍ら、合宿で擱んだ事をお話し合ふ様な懇談が各班で行はれた。そしてその事を感想文に記し、



別　　れ

和歌に詠んでいった。

全参加者が精魂を傾けて「祖国・学問・人生」について学び合った合宿も、愈々閉会式である。国歌斉唱の声が、力強く二度響きわたった。参加学生を代表して、九州大学四年・亀川龍彦君が挨拶に立ち、明治天皇御製、

もろともたすけかはしてむつび合ふ友ぞ世に立つ
力なるべき

を拝誦して、「この合宿で得た喜びを僕等の学生生活に持続させてゆくべく頑張ってゆきたい」と訴へた。続いて国民文化研究会副理事長・宝辺正久先生が、「この合宿で皆さんは学問の喜びを経験した。是非、学問に志して、日本を支えてゆくべく努めて下さい。そしてこの合宿で共に学んだ友等と、葉書一枚でもやりとりを続けて欲しい。それが、日本の学問の第一歩だと信じます。」と挨拶されたのである。

続いて全参加者が「進めこの道」を斉唱し、その後、国文研の先生、先輩方に対して一同で感謝の言葉述べた。最後に垂細垂大学三年・安田利雄君の「閉会宣言」によって、四泊五日間の合宿全日程を終了した。

閉会式を終へて、各参加者は、五日間の厳しい研鑽に共に打ち込んだ友等と語らひつゝ、又別れを惜しみつゝ、帰途についたのである。

福岡大学三年 大山輝昭

書読みて思ひしことどもしたためて送り給へや帰りし後にも

九州大学三年 長澤一成

手を握り笑みて別れを告ぐる友の面かがやきてすがしかりけり

合
宿
詠
草



霧島神宮・古宮

△講義▽

中央大 法 四年 馬 淵 雅 宣

小田村先生の話をお聞きして

唐丸の籠にゆられて死に向かふ松陰の心澄みわたりたり
辞世をば笑みたたへつつ朗々と吟じたる師に囚人ひとも泣くとふ
死を前にかくまで清く美しき姿見せたる人のありしか
三十歳てふ短き生命燃やし尽し神さりましたしみ魂悲しも

名城大 理工 四年 浜 田 好 徳

小田村先生の御講義をききて

のどからし汗をかきつつ訴へ給ふ師の御姿のただありがたし

高千穂商大 商 二年 渡 辺 卓 志

小田村先生の御講義をお聞きして

自分から心きたふる場をもとと強き御言葉胸をつき刺す
君たちと同年代の友の中に既に働く者ありといはれたり
君たちは学ぶ者なり国の命考へたまへと厳しくいはれぬ
御言葉に我が身ふるへておのづから熱き思ひのわきあがるかな

福岡教育大 教 三年 大石 育 郎

山田先生の講義を聴きて

戦ひに散りにし友の悲しみを偲ばなむとぞ大人はのたまふ
亡き友の思ひを若きらに語らむが残されしわれの任務とのたまふ

九州大 法 一年 後藤 和 孝

坂口さんの発表を聴きて

このわれも教師になりて日本の美し歴史を伝へてしかな
日の本の旗や歌をもふみにじるあやまてるやからわれは許さじ

出光興産㈱中央訓練所 吉 田 彰 秀

坂口氏の青年体験発表を聞いて

信じたる道を歩みし後輩の声の強きに苦勞思ほゆ
勇氣持ち信じる道を歩みゆけばいかなるさはりも突破するとふ
後輩の歩みし道に引きくらべ我が歩みしはなんと易きか
我も又今日後は勇氣持ち信じる道を進みてゆかん

亜細亜大 経営 一年 畠 山 正 明

前園さんの「りえちゃん」の御話を聞きて

わが子よと子のゆくすゑをいのらるる母君の心つたはりてきぬ

第一薬科大 薬 一年 古井 祐二

前園由美子さんの研究発表を聴きて

母親のわが子を思ふを聴きしとき我が母思ひて胸熱くなる

熊本大 教 三年 武藤 慶子

前園さんの発表を聴き

ひたすらに子らは素直と語られし先輩の言葉に胸あつくなる

西南学院大 法 四年 酒村 聡一郎

青山先輩の短歌導入講義の際、寺尾博之さんの「霧島温泉にて」といふ歌を読まれる

御軍に発つ日も近く霧島のこの地に来られしかみ友らとともに

のを聞きて

友どちのねがほを見てはうづまきし大人のみ心いかにありけむ

△慰霊祭▽

山口大 理 一年 神門 誠司

かがり火の燃えあがりたるその中に浮かびし祭司の姿しるしも

おおと言ふ魂よせの声長々と暗き木立ちに消えてゆきたり

山口大経 四年 中山直也
み靈らを慰めまつらむと詠みゆかるる御歌の調べは高くひびきぬ

鹿兒島大 教 四年 前之園 登美子
慰靈祭にて夜久先生が御靈を拝み給ひし時

深々と拝礼されし師の御心深く思はれ涙こぼるる

長崎大 教 二年 北川 雅子
慰靈祭に参加して

御靈らの降り給ひしとのたまへば身のひきしまり頭下がらぬ

頭下げ目をとぢをれば亡き祖父の笑みしみ顔の浮かびくるなり
御祭の終りて夜空ながむれば星のすがしくかがやきてをり

△レクリエーション▽

東海大 工 三年 濱崎 博

車中より錦江湾をのぞみ病床の祖母を思ふ

年老いた祖母は丸尾にただ一人不治の病の床につきをり

雲海に浮かぶがごとき桜島を病の祖母に一目見せし

雨あがり緑の世界走るバス新しき友と胸おどらせて
熊本大法 一年 園田達也

見さくれば八重の山波そのはてに煙吹き上げ桜島たつ
鹿兒島大水産 三年 姫野政直

友みなと心しづめて拝殿にむかひてをれば身のひきしまる
早稲田大 政経 四年 内海勝彦

石段の緑の苔の生ふる中ただ一本の草花咲きたり
鹿兒島大 教 四年 前之園登美子

御社までの道歩きつつ合宿に来ざりし友のこと偲ばるる
長崎大 教 二年 北川雅子

千歳経る川原の石を踏みしめてゆけば神代のことぞ偲ばるる
九州大 経 一年 江崎雅彦

高千穂の峰に登るを待ちゐたれど霧たちこめて登れぬがくやし
宮崎大 教 二年 松原慎治

高千穂河原散策の折に
熊本大 医 四年 福田誠

雲低み高千穂の峰仰がれず雲去りゆけと願ひをれども

班員の友らとゐるが楽しさよ共に過ぐして三日なれども

早稲田大 社 四年 阿 川 信 次

高千穂河原にて

今までに聞きしことなき山鳥の笛吹く如き声の聞こゆる

その声に応ふる如き鳥の声隣の山の方より聞こゆ

山中に声をかぎりに鳴き交はす鳥らの声にしばし聴き入る

九州 大 法 四年 加 藤 多 夏 詩

霧島神宮の旧跡を訪ねて

その昔瓊々杵尊にぎのみことの天降りしとふ高千穂の峰は霧にかくれし

火の山の噴きにし炎に御社は焼かれて今は鳥居のみ立つ

鳥居たつ丘より見れば山の辺の霧のしづかに動きゆく見ゆ

△友との語らひ▽

大阪経済大 法 二年 陣 内 道 也

み友らは吾が詠みし歌の言の葉を心をこめて直してくれぬ

西南学院大 文 一年 重 博 巳
深夜まで心開けず苦しむ我をはげましたまふ友ありがたし

亜細亜大 法 四年 大 塩 耕 三

一人して苦しみぬきし友どちに心合はせて語りゆきたり
討論のすすみゆくうちだんだんと友の面おもはに明るさの見ゆ

時たつも忘るることく友はなほ苦しき思ひを語りゆきたり

はなれても心をかよはせつき合はうてふ友の心のうれしかりけり

大阪市立大 理 四年 氏 原 秀 起

班友と月仰ぎつつ声あはせうたひゆきけり学びし御歌を

宮崎大 教 二年 梶 栗 勝 敏

班長の涙ながらのみ言葉に高慢な己が心知らるる

初日から悩みたまへる班長の苦しみ思へば胸痛くなりぬ

九州大 工 四年 亀 川 龍 彦

己が思ひを語れず居りし傍の友おもむろに話し出したたり

うちとけて語ることもなく合宿を過ごし来たるが申し訳なしと

今度こそ自ら進んで話さむと思ひ居りしと友語り給ふ

己が思ひを言葉にせむと震へつつも語る姿を見るはうれしき

西南学院大 文 一年 結城誠二

班友のふともらしたる言の葉に目を開かるる思ひしたるも

我がおもひ素直に言へばその後返へる言葉もうれしかりけり

九州大 農 二年 佐野淳志

心より語れぬ吾れをすまなしと頭を下げて言ひし友はも

友どちの心の底ゆわき出づる言葉にみなも語り始めぬ

先輩の元気出せよと語りしにはげまされたりと友の語りぬ

その友のまごころこまれる言の葉にみなも続き語り始めたり

鹿児島大 法文 四年 良本光明

合宿に集へぬ友に手紙を書きて

入浴の時をさきても文せむと今日の講義のノート見入りぬ

一通の文書き終へて筆置けば集へぬ友のことの俣ばる

八幡大 法経 四年 照屋全明

大御歌を瞳うるませ読む友のあつき思ひに心うたるる

福岡教育大 教 四年 久間敏子

友どちと一つの言葉に心寄せ語りてゆけば心なごみぬ

すなほなる友の姿を見てをれば心洗はるここちするなり

ふるさとに帰りてもなほこのきづな結びゆかんと誓ひ合ふなり

鹿兒島大 法文 一年 江口 定子

班別討論の折に

感動を涙ながらに語りたる友の姿の忘れかねつる

我が思ひ素直に言葉にならざるがただに悲しく口惜しきかな

九州大 工 二年 松井 哲也

星野先生の戦争体験をお聴きして

今し方隣に居りし戦友の敵弾に倒れしと話し給ひぬ

戦友の倒れしを見てその敵を八裂きにせんと思はれしといふ

淡々と話し給ふ言の葉に先生の悲しみの深さ偲ばる

専修大 経 三年 細川 梯弘

友どちの暖かき言葉に吾が心いつしか知らず開かれてゆく

国際科大 教養 一年 山口 唯観

輪読にて心に懸かりし言の葉を床につきてもあぢはひかへしぬ

佐賀大 教 二年 寺崎周子
 ひたすらに我がこころのうちを言ひたけれどことばにならず胸のつまりて
 八幡大 法 三年 阿波連昇
 友らとの話はずみて胸底よりしらずよろこびの湧き上りたり

〈全體意見発表〉

福岡大 法 三年 源嶋秀治
 合宿に勧誘せし友の壇上で感想を述ぶる

とつとつと話し給へる友どちの面輪を見れば涙こみあぐ
 すなほなる心もちて物事に当りゆくてふ御言葉嬉しも
 大学に帰りてのちもこの友と共に学びてゆかむとぞ思ふ

熊本大 法 一年 園田達也
 男泣きに泣きしみ友の真心に胸のふるへて涙おつるも

亜細亜大 工 四年 富本哲弘
 友どちと心通へる喜びを思へば涙の知らずあふれ来

福岡大 商 四年 原田憲治

全体感想発表にて

一言も思ひ述べ得ぬ友どちは今壇上で喜び語りぬ

友どちは初めて班のみ友らとわかり合へたと声つまらせぬ

み友らの思ふがままを聴きをればあふるる涙ぬぐひきれずも

鹿兒島大 工 二年 一丸 修

ありがたうとなみだごゑにて呼びかくる友どちのこゑのむねにひびきく

九州大 工 四年 久米 秀俊

小野先輩の所感発表を聞きて

戦場にゆかれし父上偲びつゝ燃えあがる炎見つめられしと

終戦時の御製の調べ聞きをれば倒るるが如しと語り給ふも

去年の夏失せにし友もこの場に還りにはきつるかと思つたまらせたまふ

あふれたる涙のままに高らかに終戦時の御製読み給ひけり

先輩の読み給ひたる大御歌の強きしらべに涙あふれたり

熊本大 理 二年 佐藤 利憲

全体感想発表の折

友を思ふ心の通ひし喜びを涙ながしつつ語りゆかるる

一段と大きな声で言はれしは「ありがたう」てふ言葉なりけり

九州大 医 三年 笠

普 一 朗

全体感想発表の折に

つぎつぎに壇上にのぼりしみ友らは思ひのたけを語りてくれぬ

とつとつとつまりながらも胸ぬちの思ひのたけを友語りゆく

ことばいはずたゞひとこと「ありがたう」と涙うかべて語りてくれぬ

胸ぬちのもゆる思ひを語りたる言の葉きけば涙あふれく

言の葉の雄々しきしらべ我胸にひゞきわたれり大波のごと

福岡教育大 教 一年 野 口 ゆかり

せつせつと友への思ひ語りゆくますらをの声のふるへて聞こゆ

ますらをの流す涙にわれもまたまぶたの熱くなりけるかな

〈別れ〉

出光興産備兵庫製油所

南 嘉 高

いよよ今日は別るる日なりとみ友らの寝顔を見ればさびしさこみあぐ

尚 綱 大 文 二年 川 田 京 子

友達とかたりあふ夜も最後だと思へばしらず悲しくなりぬ

九州大 法 四年 安部 修

明日にはたがひに別れゆく友どちと内庭うちにはに出でてともに語らん

つかれてもなほ眠りがたし共にをる時のわづかとなるを思へば

佐賀大 農 二年 佐本 将彦

美しき月仰ぎつつ友どちと語る今宵ぞとはに忘れじ

熊本大 医 二年 古井 博明

六名の友らとともに声あはせ「神州不滅」歌ひし夜はも

九州大 工 一年 藤田 泰之

夜更けまで語りあひたる友どちと別れることのひたにつらしも

九州共立大 経 三年 宮里 一史

五日間共に過ごせしみ友らと別れつぐればさびしさおぼゆ

八代市立八代小学校教諭 久保 貴資

心こめし友の言葉に涙して別れの言葉のつまりて出でず

九州大 工 一年 甲斐 郁人

合宿にてめぐり逢ひたる友どちを我は決して忘れじと思ふ

広島大 理 一年 内田武文

またの日に集はんことを誓ひつつ微笑む友の顔すがすがし

(事務局) 熊本県立人吉高校 二年 小林敏郎

幾日か枕並べて寝た友と別れる時ぞ空も晴れゆく

故郷へ帰ると思へばうれしけれど友と別れることの悲しき

またいつかあはむといひし友の目にながれし涙を忘れられずも

△大学教官有志協議会・国民文化研究会▽

(財)労働科学研究所理事・高千穂商科大教授

高木尚一

朝空に陽はのぼりつゝ桜島さやかに浮ぶ雲の彼方に

噴煙は横にたなびき悠々と雲にまじはる姿たふとし

合宿も終らむとしてむらぎもの心安らぐ朝の一とき

神山のくしびのいのち身にうけてすぐし来にけりこの五日はも

次々に壇に上りて力強く語る友らの姿たのもし

皇国のいのちさながら若人の語る言葉は力あふるゝ

人ごころかたみに思ひ深奥の信の世界に入りゆかんとす

信を共にみくににつくすまごころの言葉をきけばなみだあふるゝ

亜細亜大教授・教養部長

夜久正雄

亡き友のうた朗々と若き友の読みゆく聞けば思ひけうせつ

この宿の昔の宿につどひけむ友らをしのぶのこせしうたに

今生の別れの酒をくみかはしすめらみいくさにゆきし友はや

いまでも聞くせせらぎの音を亡き友がききてよみけむみうたかなしも

みうたよむこれのつどひを亡き友のかなしみ魂はみそなはすらむ

熊本女子商業高講師

瀬上安正

若き友いやつぎつぎに集ひ来て霧島神宮に此度びも詣づる

太鼓の音とどろき渡りすめ国のはじめのときの昔偲びつ

天降^{おも}りまししみおやの神の力もて此の若人ら守らせ給へ

吉田松陰の死を憶ふ

死すること常のごとくに詩を吟じ行き給ふ姿光るがごとし

幕吏共呆然として立ちしまゝなすすべ知らず見送りしとふ

同囚の志士らも松陰の壮絶なるその死を歌に詠みとむらひぬ

輪読の折に

福岡教育大学教授 山田輝彦

霧島ははや秋ならし夜をこめて暗きしじまに雨降りしきる
若きらと太子のみふみ読みをれば雨脚しげし銚杉の枝に
聖徳の皇子のみことば若きらとたどりてゆけば心すがしも
むらぎもの心つくして一行の文に真向ふ面輪きびしき

慰靈寮

榎宝辺商店社長 宝辺正久

ふりつづきし雨はれていま西の方夕映えしつづ暮れゆかんとす
かがり火のいや赤きかも国のためたふれし人のみたままつりに
再びはかへらじと言ひし亡き友よかへりきまさなこれのゆにはに
唱へまつる御歌のしらべは波のごとくわれらが胸にゆりとどろくも
白雲は月に光りていつくしき空を仰げば亡友ともぞ恋しき

合宿を終了して

夕空をあかずながめぬ合宿の友の大方往にける宿に
小雨また降り出でにつゝ原遠く立ちたる雲は夕日に染みぬ

合宿の最後に歌ひし「君が代」のしらべは今も耳にありけり

心々に感じたりけむ若きらの国歌うたふや雄々しかりけり

美しき旋律なりき若きらが君が代をこそいのるその歌

皇神ゆ代々の大君上にありて民はなびかふ草の如くに

日商岩井燃料第二部第二課課長代理

沢部寿孫

晴れにしと思ふまもなく黒雲のたちまちおこりて空をおほひぬ

神のみたまよばはふみまつりに雨な降りそといひたにいのりぬ

谷底ゆ吹きあげて来しゆけむりの杉の木の間消えてゆくみゆ

忙しき日々の仕事にいつとなく歌詠ふ心忘れぬしかも

いつとなく忘れし心のおのづからよみがへり来ぬ友と語れば

戸田建設機技師

青山直幸

慰霊祭にて

みたまらの降りたたすらむかがり火の炎はいよよ燃えさかるなり

みたまらの我ら呼ぶごとかがり火の火の粉やにはに舞ひ上りたり

天皇の御歌誦まるる師の君の御声しるけく響きわたるも

「海ゆかば」歌ひてゆけば胸底ゆ熱き思ひのこみ上げて来ぬ

ふとわれにかへれば谷のせせらぎの音のさやけく聞こえるなり

大成建設海外事業部経理課

山口秀範

うす雲のそのはたてには高く低くうち重なりて山々の見ゆ

緑濃き木々のはざまゆ湯けむりの勢ひ強くたち昇る見ゆ

山ぎはに雲流れ来てつかの間の入日の影をまたも隠せり

乳色の雲にはつかに茜さし薩摩国原暮れゆかむとす

「再びは来る日もあらじ」と詠みましし先輩のみ心偲び已まずも

澄みし大気ふるはす如く鳴きしきるひぐらしの音の胸にしみ入る

神奈川県湯河原町立吉浜小教諭

岩越豊雄

慰霊祭の折に

雨雲のこめにし空も晴れゆきてさはやかに星もかがやきそめぬ

夕ぐれし庭に虫もすだきを霧島原は秋立ちにしか

山の間けいひつの声ひびきけり天かけるたまよぶがごとくに

たままつりのときすぎゆけば山の端の木立のあはひゆ月いでにけり

岡山県立東岡山工業高講師

砂川芳毅

最後の夜

ご講義を一心不乱に聴きをれど心はをどらず悲しくなりぬ
動かざる己が心が憎らしく悲しくあれどせんすべもなし

重苦しき心のままに最後の夜に友と語りゆくうす暗きベランダ

胸奥の苦しき思ひをこのときとばかりに述べれば涙出でくる

友どちは心の葛藤乗り越えし体験語りゆくいとうれしげに

励み来し友の話を聴きゆけばしだいに勇気わき出でにけり

あなうれしみ友は我れの進むべき学びの道をしめしくれたり

合宿終了の折に社会人班のM君から和歌の推敲を求められて

佐世保市交通局企画係長 朝永清之

友の詠みししらべのあとをたどりつつ友のみ心しのびまつりぬ

たらはざる己がみなれどこの友の心のままに直しみるとす

詠み替へし言葉に友はうなづくもわづかにちがふと首をかしぐる

一語づつ友の心をたしかめつ友の思ひをしのびつつはげみぬ

やうやくに一つのしらべとのひて詠みあげゆけば心すがしも

この友と心あはせてうたよみしこれの思ひはとはわすれじ

○

国民文化研究会会員の「合宿感想文集」の編集を終へて

(社)国民文化研究会理事長

小田村

寅二郎

むそなな
六十七たりの友らのふみとみうたとを編み終へにけりここ数日に
霧島のみ山の集ひに生れにける。合成威力”のあとぞしるけし
個々にてはなし得ざりける力はも生み出したり山の集ひは
すめぐにを守らむ道もかくのごと力あはせつ拓きゆくべし
亡き友らのみたまのふゆをかゝぶりて今年も終へにき尊き集ひを
集ひ来し新らたなる友らさはに得て心すがしく山降りし友らよ
み友らの篤き心をふみのうへまたそのみうたにしのびてやまず
来む年もまた来む年も霧島のみ山の集ひに続かむものを
門の辺に年毎咲ける一株の萩に花咲くとき近きかも
蝉しぐれひとときは高く聞えきて合宿終へしをしみじみと思ひぬ

(五四・八・一七)

あとがき

合宿の講義室の窓から見えるホテルの壁には、墨痕あざやかに明治天皇の一首の御歌の書かれた垂れ幕が下つてゐた。

とき遅きたがひはあれどつらぬかぬことなきものは誠なりけり

人の心の、かくあれかしといふねがひは、それがまごころから発したものである限り必ず実現する。たとへ早い遅いのちがひはあるにしても――。さういふ、人の世の真実に対する絶対の確信をお述べになつた御製である。或る一つの主張をスローガンに高くかゝげて進むことは、一見強さうに見えても所詮はもろく、どこかで崩れてしまふものだが、偽りのない人間のすなほな情感から生れたねがひは、いかなる障害をも貫いて実現する。

桃園天皇の御製に

神代より世々にかはらで君と臣の道すなほなる国はわがくに

といふ一首があるが、ここに述べられた君臣の關係のすなほさ、そこにはかたくなな主義にまどはされ

ない人間の真実があり、まことがある。その真実を守りつたへたのが外ならぬ日本の国がらであった。さう思つてみれば、「日本への回帰」とはこの人間の真実への回帰だと言つていい。

合宿記録「日本への回帰」もすでに十五集を数へるに至つたが、この一連の記録集の中に、このやうなわれわれの切なるねがひを読みとつていたゞきたいと思ふ。

なほ、今回のタイトル頁の写真は、数年前から学生諸君が春に秋に合宿を営んでは相互の研鑽をつんできた、福岡市北郊、津屋崎の東郷公園を中心とした景観を収めた。東郷公園は遠く玄海灘の彼方、沖の島を望む丘の上にあるが、日露の戦において日本海々戦を目のあたりにすることの出来たところ、その日を記念して頂上には「日本海々戦記念碑」が軍艦三笠の司令塔を摸して作られてをり、そのかたはらには東郷元帥を祭つた東郷神社がある。合宿の思ひ出の地としてだけではなく、日本海々戦の昔を偲ぶよすがとして御覧いたゞけば幸である。

今夏の合宿は雲仙ファミリーホテルに決定、各地の学生諸君はその日を目ざして活発な運動を展開しつつある。緑濃き雲仙の地に全国の友らの集ふその日を偲びつゝ編集の筆を擱きたい。

昭和五十五年三月

編集委員 山田輝彦

小柳陽太郎

社団法人 国民文化研究会関係図書目録

A 先師・先輩の遺著

書名	著者・編者	発行年月日	版・頁数	頒価
聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業 (増補再版本)	黒上 正一郎	四四・一〇・一五 (現在四版)	A5判 三〇四頁	〒一、八〇〇円
憂国の光と影 ―田所広泰遺稿集―	小田村寅二郎編	四五・三・一〇 (在庫ナシ)	B6判 五〇二頁	非売品

B 国文研叢書(新書判)

書名	著者・編者	発行年月日	頁数	頒価
古事記のいのち ―改訂版―	夜久 正雄	四一・三・二五 (原 版) 四八・一一・一一 (改訂版)	三〇七頁	〒七〇〇円 一〇〇円
日本精神史鈔 ―親鸞と実朝の系譜―	桑原 暁一	四一・一一・二五 (在庫ナシ)	二七九頁	非売品

No.11	No.10	No.9	No.8	No.7	No.6	No.5	No.4	No.3
続 日本精神史鈔 —花山院とその系譜—	欧米名著邦訳(明治)集 —文献資料集—	歴史と人生観 —マルクス主義の超克—	日本思想の系譜 —文献資料集(近代その二)	日本思想の系譜 —文献資料集(近代その一)	日本思想の系譜 —文献資料集(近世その二)	日本思想の系譜 —文献資料集(近世その一)	日本思想の系譜 —文献資料集(古代・中世)	弁証法批判の歴史
桑原 暁一	小田村寅二郎編	川井 修治	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	高木 尚一
四五・一二・二五	四五・三・二〇	四三・三・一五	四四・三・二五	四四・三・二五	四三・一〇・一	四三・二・一	四二・三・二五	四二・二・二五
三一〇頁	四八三頁	二八三頁	三八一頁	四〇三頁	四〇九頁	三一七頁	三〇九頁	二四一頁
非売品	〒五〇〇円 一〇〇円	〒六〇〇円 一〇〇円	〒七二〇円 一〇〇円	〒七八〇円 一〇〇円	〒七八〇円 一〇〇円	〒六二〇円 一〇〇円	〒六〇〇円 一〇〇円	〒五〇〇円 二〇〇円

No.20	No.19	No.18	No.17	No.16	No.15	No.14	No.13	No.12
<p>続いのちささげて ―戦中学徒・遺文遺詠抄―</p>	<p>いのちささげて ―戦中学徒・遺文遺詠抄―</p>	<p>明治天皇御集研究</p>	<p>日本における ―マルクス主義批判論集―</p>	<p>国史の地熱 ―聖徳太子と楠氏の精神―</p>	<p>白村江の戦 ―七世紀・東アジアの動乱―</p>	<p>ヨーロッパにおける マルクス主義批判論集</p>	<p>短歌のあゆみ ―続「短歌のすすめ」―</p>	<p>短歌のすすめ</p>
<p>国民文化研究会編</p>	<p>国民文化研究会編</p>	<p>三井甲之著</p>	<p>戸田義雄編</p>	<p>桑原 暁 一</p>	<p>夜久正雄</p>	<p>桑原暁一編</p>	<p>山夜田久輝彦</p>	<p>山夜田久輝彦</p>
<p>五四・四・二〇</p>	<p>五三・二・一五</p>	<p>五二・二・一〇</p>	<p>五一・三・一〇</p>	<p>四九・一〇・二五</p>	<p>四九・一・一〇</p>	<p>四八・二・一〇</p>	<p>四六・一二・一</p>	<p>四六・四・一</p>
<p>四二二頁</p>	<p>四四九頁</p>	<p>三五四頁</p>	<p>三二〇頁</p>	<p>二七九頁</p>	<p>二八九頁</p>	<p>三二八頁</p>	<p>三一六頁</p>	<p>三〇九頁</p>
<p>〒九〇〇円 一六〇円</p>	<p>〒九〇〇円 一六〇円</p>	<p>〒七〇〇円 一六〇円</p>	<p>〒七〇〇円 一六〇円</p>	<p>〒七〇〇円 一三〇円</p>	<p>〒五〇〇円 一六〇円</p>	<p>〒五〇〇円 一六〇円</p>	<p>〒三五〇円 一六〇円</p>	<p>〒六〇〇円 一六〇円</p>

No.21

社会主義理論との戦い
—山本勝市博士論文選集—

三加
浦納
貞祐
蔵五

五五・二・一

四〇七頁

〒九〇〇円
一六〇円

C 「合宿教室」レポート

回数	開催地 (人員)	年	書名	主要講師	版・頁数	定価
1	霧島 (九二名)	31	混迷の時代に指標を求めて	広田洋二・日下藤吾 夜久正雄	A5判 八八頁	〒一五〇円 二〇〇円
2	福岡 (二七名)	32	民族自立のために	竹山道雄・高山岩男 浅野晃	A5判 五三頁	〒五〇円 一三〇円
(2)	岡山	32	民族復興の根底を培うもの	木下尚一・石村暢五郎 高木一	新書判 一三三頁	〒一〇〇円 一三〇円
3	佐賀 (七二名)	33	民族の明日を求めて	勝部真長・木下彪 森三十郎	新書判 二五〇頁	〒二〇〇円 二五〇円
4	阿蘇 (一六〇名)	34	国民同胞感の探求	花田大五郎・中山優 野口恒樹	B6判 三六五頁	〒五〇〇円 一六〇円
5	雲仙 (二〇〇名)	35	続国民同胞感の探求	木内信胤・花田大五郎 佐藤慎一郎	B6判 四三三頁	〒五六〇円 二〇〇円

14	13	12	11	10	9	8	7	6
阿蘇 (四〇三名)	霧島 (三五三名)	阿蘇 (三三六名)	雲仙 (二四〇名)	別府・城島 (二一五名)	桜島 (二〇二名)	雲仙 (二〇二名)	阿蘇 (二一五名)	雲仙 (二〇八名)
44	43	42	41	40	39	38	37	36
日本への回帰 —第五集—	日本への回帰 —第四集—	日本への回帰 —第三集—	日本への回帰 —第二集—	日本への回帰 —第一集—	新しい学風を興すために —第三集—	新しい学風を興すために —第二集—	新しい学風を興すために —第一集—	続々国民同胞感の探求
岡下 道雄・木内 信胤	竹山 道雄・高谷 信胤	林内 房雄・太田 信胤	福田 恆存・木内 尚	岡内 信胤	小林 秀雄・広田 信胤	竹山 道雄・木内 信胤	福田 恆存・木内 信胤	津下 秀雄・木内 信胤
二新書判 九五頁	三新書判 二四頁	三新書判 〇七頁	三新書判 二〇頁	二新書判 九五頁	二新書判 九八頁	二新書判 九八頁	二新書判 四八頁	三B 二五頁
〒三〇〇円 一〇円	〒三〇〇円 一〇円	〒三〇〇円 一〇円	〒三〇〇円 一〇円	〒三〇〇円 一〇円	〒三〇〇円 一〇円	〒三〇〇円 一〇円	二〇〇円 一〇円	五〇〇円 一〇円

23	22	21	20	19	18	17	16	15
阿蘇 (四四〇名)	雲仙 (三三二名)	佐世保 (三七二名)	阿蘇 (四三五名)	霧島 (五二八名)	雲仙 (四三三名)	阿蘇 (四〇二名)	霧島 (三〇二名)	雲仙 (四九一名)
53	52	51	50	49	48	47	46	45
日本への回帰 ―第十四集―	日本への回帰 ―第十三集―	日本への回帰 ―第十二集―	日本への回帰 ―第十一集―	日本への回帰 ―第十集―	日本への回帰 ―第九集―	日本への回帰 ―第八集―	日本への回帰 ―第七集―	日本への回帰 ―第六集―
小林 秀雄・木内 信胤	木内 信胤・衛藤 藩吉	木内 信胤・村松 剛	木内 信胤・福田 恆存	小林 秀雄・木内 信胤	木内 信胤・村松 剛	木内 信胤・胡 蘭 成 山本 勝市	木内 信胤・戸田 義雄 村松 剛	小林 秀雄・木内 信胤
新書刊 三三七頁	新書判 三三二頁	新書判 二八五頁	新書判 三二五頁	新書判 三〇六頁	新書判 二八九頁	新書判 三〇六頁	新書判 三二二頁	新書判 二六五頁
〒五〇〇円 一〇円	〒五〇〇円 一〇円	〒五〇〇円 一〇円	〒五〇〇円 一〇円	〒五〇〇円 一〇円	〒五〇〇円 一〇円	〒三〇〇円 一〇円	〒三〇〇円 一〇円	〒三〇〇円 一〇円

(国民同胞感の探求三部作は「理想社」より刊行)

D 「合宿教室」感想文集（非売品）

	書名	編者	発行年月日	版・頁数
第十回	「合宿教室」参加者感想文集 三一五名	国民文化研究会編	四〇・一〇・二〇	A5判 八〇頁
第十一回	「合宿教室」参加者感想文集 二四〇名	国民文化研究会編	四一・一〇・五	A5判 一四〇頁
第十二回	「合宿教室」参加者感想文集 三三六名	国民文化研究会編	四二・一一・五	A5判 一二〇頁
第十三回	「合宿教室」参加者感想文集 三五三名	国民文化研究会編	四三・一〇・一〇	A5判 一八頁
第十四回	「合宿教室」参加者感想文集 四〇三名	国民文化研究会編	四四・一〇・二〇	A5判 一三六頁
第十五回	「合宿教室」参加者感想文集 —現代知性への警鐘— 四九一名	国民文化研究会編	四五・一〇・三〇	A5判 二一八頁
第十六回	「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて— 三〇二名	国民文化研究会編	四六・一一・一〇	A5判 一二六頁

第十七回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四〇二名	国民文化研究会編	四七・一〇・三〇	A5判 一六四頁
第十八回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四三三名	国民文化研究会編	四八・一〇・二〇	A5判 一七七頁
第十九回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	五二八名	国民文化研究会編	四九・一〇・三〇	A5判 二〇〇頁
第二十回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四三五名	国民文化研究会編	五〇・一〇・二〇	A5判 一六七頁
第二十一回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	三七二名	国民文化研究会編	五一・一〇・二〇	A5判 一五一頁
第二十二回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	三三二名	国民文化研究会編	五二・一〇・二五	A5判 一五六頁
第二十三回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四四〇名	国民文化研究会編	五三・一〇・二五	A5判 一八五頁
第二十四回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	二六八名	国民文化研究会編	五四・一〇・二〇	A5判 一三五頁

E 海外派遣レポート（非売品）

書名	編者	発行年月日	版・頁数
日韓・海と河の交流（日韓交流レポート）	浜田 収二郎	四三・六・一	A5判 一二二頁
香港・マニラ・ミンダナオ巡訪団 レポート	浜川 田井修治 田 収二郎	四四・一一・二九	A5判 八〇頁

F その他

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
（資料）九州地区国立大学紛争の体験記録 —教官側の発言—	（昭和四十六年十月） （国民文化研究会発行）	A5判 三三二頁	非売品
歌よみに与ふる書・他四編	正岡 子規 （国民文化研究会発行）	新書判 一二二頁	（品切）
天皇と天皇制についての基本的思考	小田村寅二郎・夜久正雄 （斑鳩会発行）	新書判 一〇七頁	（品切）

今上天皇御歌解説 (附) 万葉集論	三井 甲之 (斑鳩会発行)	新書判 一五七頁	(品切)
明治・大正・昭和 『謹選 詔勅集』	(斑鳩会発行)	新書判 八五頁	〒二二〇〇円
式典曲「神州不滅」 行進曲「進めこのみち」	三井 甲之 作詞 時 潔 作曲 —日本学生協会の歌—	A5判 各四頁	〒各一〇〇円 一〇〇円

G 関 係 図 書

書 名	著 者・発 行 者	版・頁 数	定 価
新輯 日本思想の系譜(上・下) —文献資料集—	小田村寅二郎編 (時事通信社)	(上)A5判 (下)八五七頁 九一二頁	上・下各 三、〇〇〇円
日本思想の源流 —歴代天皇を中心に—	小田村 寅二郎 (日本教文社)	四六判 三〇五頁	八五〇円
THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN (国文研叢書 No. 1 「社事記のそと」の翻訳)	(訳者)G. W. ROBINSON [THE CENTRE FOR EAST ASIAN CULTU- RAL STUDIES]	B6判 二〇八頁	

H 月 刊 誌

<p>歴代天皇の御歌 — 初代から今上陛下まで二千首 — △増補改訂▽</p>	<p>小田村 寅二郎 柳 陽太郎 (日本教文社)</p>	<p>四六判 四三八頁</p>	<p>一、七〇〇円</p>
<p>歌人・今上天皇</p>	<p>夜久 正雄 (日本教文社)</p>	<p>四六判 三三三頁</p>	<p>一、五〇〇円</p>
<p>日本の感性</p>	<p>戸田 義雄 (日本教文社)</p>	<p>四六判 三四六頁</p>	<p>一、二〇〇円</p>
<p>昭和史に刻むわれらが道統</p>	<p>小田村 寅二郎 (日本教文社)</p>	<p>四六判 三三三頁</p>	<p>一、三〇〇円</p>
<p>誌 名</p>	<p>創刊・号数</p>	<p>版・頁数</p>	<p>定 価</p>
<p>月刊「国民同胞」 「国民同胞」合本 同 第一卷 同 第二卷 同 第三卷 同 第四卷</p>	<p>昭和三十六年十一月創刊 昭和五十五年三月現在一二二二号 第一号〜第五〇号 第一〇一号〜第一五〇号 第一五一号〜第二〇〇号</p>	<p>B 5 判 八頁 各卷四〇〇頁</p>	<p>年間 一、〇〇〇円 共 一 各卷 二〇〇〇円 (含送料) — 残部僅少 —</p>

1
(分科会)・教育内容は正促進委員会編著

書名	発行年	版・頁数
現下の学校教育の内容を正すために急務を要する問題点	四十七年十二月	B5判・二五頁

—— 日本への回帰 ——

(第15集)

昭和五十五年三月二十三日発行

定価 五〇〇円

〒一六〇円

編者

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小田 寅一郎

発行所

社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇一八柳瀬ビル

振替 東京 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします

